

転生食堂と常連達

かのそん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれ変わって2度目の人生を歩む、変わり者の男。

そんな彼が経営するお店に集まる人たちは、やはりどこかわっている。そんな変わり者達の日常の一コマ。

・最近はお絵かきが楽しくて仕方ないので、そちらに舵を切っています。13〜15話後書きに、お嬢ちゃんの絵を3枚追加しました。お納めください。(10/3現在)

・活動報告にこぼれ話投下しました。

・定期的に見返す為、加筆や修正が入る可能性があります。

・気紛れで絵を描きます。絵がある場合「★」をタイトル後ろに

目次

本編

1話	side 魔法使い	1
2話	店長と魔法使い	17
3話	店長とラミア	29
4話	店長と大好物	41
5話	有名人と自称ライバル	50
6話	昔話と能力	60
7話	side 勇者	72
8話	自責と新たな火種	80
9話	大乱闘と事後処理	91
10話	蜘蛛と試験	103
11話	未知と困惑 ★	115
12話	勧誘と旅立ち ★	129
13話	悪戯と開拓 ★	138
14話	詰問と鬼嫁 ★	151
15話	雇用と主人 ★	162
16話	御手入れと淫魔	175
17話	混乱と新作	184

本編

1話 side魔法使い

〽〽

それはただの気まぐれだった。

◇

「ふう．．．。この本も終わり。」

読み終えた魔道書をパタン、と小気味いい音を立てて閉じる。未読の本の山から新たな1冊を抜き取り、読み終えた書物は1ヶ所に纏められ、積み上げられなくなると新たな山を、そうして日に日に、新しい既読の本の山を作り出されていく。

繰り返される日常。いつもの様に自分の拠点兼自宅に籠り、ひたすら知識の積み重ねる行為に傾倒する日々。それは、誰かに披露するわけでも誇るでもなく。

ましてや、世のため人のため。そんなことでは決して無い。

求めるのはただ己の為。

どれだけ新しい世の理を詰め込んでも、新しい魔法を覚えても足りない、満たされない。

基本的な魔法、地水火風は程度の差さえあるものの、不自由なく使いこなせる様になった。

『モット、モット．．．。』

何か耳鳴りがした気がした。

知識欲と言う、もはや自分では抑える事の出来ない。

そもそも微塵も抑えるつもりが無いのだが。

己の中にある概念。それが新しい可能性を渴望し、未知の魔法を希求する。

魔王が統治する領内に忍び込み書物を漁り、人間の王が取り仕切る国への道すがらモンスター相手に魔法の実験を繰り返す。

最初は基本的な魔法を単体で行っていたが、その内組み合わせたりもした。

モンスターを発火させ、風でその勢いを増す。大気中の水分を集めて浴びせ雷を落とす。疾風の刃で軸足を刻み、バランスを崩し転倒する先に地面から岩石の槍を出現させる。

自分の思い描いたままに効果が得られた時には心が踊った。

『欲シイ……。』

最近耳鳴りに加えて慢性的な軽い頭痛がある。

移動が面倒になってきた

そんな考えから、燃費が悪い事を理由に習得を見送っていた。空間移動の魔法を身に付けた。

使う度に距離に比例して、身体に脱力感、倦怠感が押し寄せる。魔力を大量に消費した証拠だろう、だが移動に時間が掛からなくなったのは大きい。

『マダ、マダ……。』

幻聴が聞こえた気がした。

王国では読破した蔵書を次から次へと積み上げてゆく。そこから得た情報の取捨選択を繰り返し、脳に刻み込む。

時には自分で作った紙を纏めて乱雑に紐で括っただけの物に書き殴る。

恐らく私以外の誰にも読み解けないだろうが、私の知識は私だけのものだ。

それで不都合が無いのだから構わなかった。

『足りナイ……。』

明らかに体調が優れない。だが私には、こんなところで止まっている時間はない。

人の脳と言うものは睡眠中に記憶の整理をしている。

しばしば睡眠も食事も疎かにしてしまいがちな私ではあるが。

過去に意識の覚醒を促す魔法を埋め込んだ魔道具を作成。

身体も脳も酷使して強制的に活動を続けると言う暴挙を行い、最終的にはその魔法の覚醒効果を振り切つて意識を失った。

そして、気がついたのはキツカリ3日後。

その作業効率と、あまりにもお粗末な成果に辟易し。魔道具は倉庫の奥に投げ捨てるかの様に封印。破壊しようとも思ったがその気力すら湧かない程に衰弱したのを覚えている。

そうして、知識だけで知っていた事柄を。睡眠が脳に与える影響を身をもって知った私は。

知識をより効率良く詰め込むため睡眠だけはキツチリと取る様になっている。

逆に

それとは反して、私にとって食事とは睡眠に比べると然程重要視していなかった。体内の隅々まで魔力を行き渡らせ生きるために必要な物を練り上げ、食料を取らずにそれらを手に入れてゆく。

最初は上手くいかないこともあったが、今では慣れたものだ。片手間でもそれが可能になった。

家出同然に飛び出した私は、まず生きる為に知識を欲した。

やがて女である自分の非力な身体に辟易し男の身体に嫉妬した。

少女から女へと、移り変わりゆく身体では。どうあつても男に一歩も二歩も劣る能力が憎かった。

そうして、その差を埋める様に更に知識を求めた。

己の中にぽっかりと開いた深い深い底無し闇。そこに片っ端から知識を放り投げる行為に没頭した。

いくら詰め込もうとも際限なく欲し、全く底が見えない。

『モット、モットダ。』

頭痛が酷い……。作業を続ける……。

軍属の中に限定して見たとしても、魔法を使う人間は通常の兵に比べ、もって生まれた才能が関係してくる為。その絶対数は兵士に比べると少ない。

だが、それでも軍の中に魔法部隊が確立する程にはいる。

だとしても、人間としての生き方を捨て去る。

”種族としての魔法使い”は驚くほど少ない。

『マダムダマダマダ、モット、モット……！』

頭の奥がじくじくと痛む……。痛みを忘れようと作業に意識を集中する。

最初からそうだったのか。

途中から変わっていったのか。

今ではもうわからない。

やがて、生きる為の知識ではなく。

知識を得るために生きる様になった頃。

私は人間の様なモノ。

魔法使いになった。

なってしまうた。

◇

その日の夜、まるで最初から無かったんじやないかと疑うほど、頭痛がきれいさっぱり消えさつていた。

そして魔法使いになっても、私の日常は変わらなかつた。

ただただ探求心の命ずるまま、知識欲を満たす。

でも……。

食事が。

他人が。

自分の知識欲以外の万物に対して無頓着に、興味を失っていくのがわかつた。

元々の興味が薄かつた事柄とは言え。己の身体が、淡い色が強引に真つ黒に塗り潰され変質してゆく様は、ハッキリ言つて気持ち悪かつた。

それは自分の生き方とて例外ではなく。

他の全てと協調せず、また決して折れない。

人間の三大欲求の内二つを蔑ろにして。

置き去りにして。

忘れ去ろうとして。

だが、それでも私は人間なのだろう……。

私の心が人間であつたことを忘れない様にする為の自衛行為なのか。

月に一度の割合で、身体が我慢できないレベルの欲求を訴え始めるようになった。魔法ではどうしようもない、それこそ他の何も考えられなくなる程の強い飢餓感。

初めてこの欲求に襲われた時は、暫くの間、身体が何を求めている

のか理解出来ず。ただ床に倒れ伏した。

私が倒れた際にぶつかっただらしく。あらゆるものが乗った机から色々な物が転がり落ちた。立て掛けられた杖や、珍しい鉱石、書物や走り書きのメモ等が床に散らばる。

そして。初めて見たと言う理由で摘み取って来ていた茸が目の前へと転がり落ちた。

自らの欲求を理解しないまま、倒れた体勢の身体を無理矢理よじり、必死に手を伸ばし、それを掴み取り。それと同時に茸に齧り付いた。

たどたどしく咀嚼し、弱々しくコクリと嚙下する。それは毒キノコだったけれど、胃の中に物が入る事が重要だった。胃が食道が口内がその二口目を拒絶する。きつと拒絶反応なのだろうと思う。吐き気を催す。逆流するそれを、途方もない飢餓感で抑え込み、強制的に飲み込む。

・
・
・
・
・

どうやら満足のいく食事をすれば今まで通りの生活に戻れるらしい。その日、私は数年振りに食事をした。

そして、同時に数年振りに行った自炊の出来は酷く、その失敗を繰り返す気もなく。その事件以降、どこか適当な町を歩いて気の向くままに。

一度は捨てかけた食欲を存分に満たす。

それが私が魔法使いになって。

唯一変わった。新しい日常。

◇

さて、そんなこんなで、もう少しで一ヶ月。

小腹が空いて来た気がする。身体が本格的な空腹を訴る前に行動に移る。流石にもう毒キノコだなんだと言ったキワモノを食べたく

はない。

最近は少し日差しが強い。身体を動かすと暑いし、薄手の淡い紫色のワンピース。その上に日焼け避けに紺色ローブを羽織る。

食事をするのには適さない大きな杖はいつもの場所へ。沢山の書物、鉱石、走り書きのメモ、色々な物が錯乱している机に寄せる様に立て掛ける。

自衛と空間移動の魔法を使うため、ローブの内側に作ったポケットに入るサイズの、動きの邪魔にならない。小さなステッキを取り出す。

切るのが面倒で腰まで伸びた、金色の髪は青いリボンで適当に纏めて。

ドアの横にあるラックに掛けてある。ローブの色に合わせた紺の鏢の広い大きな三角帽子を被り、準備完了。

軽く深呼吸をして、転移魔法を唱えた。

今回向かった場所。

人間の王国の民と、魔王の領地の民が入り乱れる交易が盛んな中継地点。

そこに新たに出来た町。

戦争で行き場を無くした人にとって、王国も魔王も関係なかった。

例えそれが明らかに人間とは違う。蛇の身体を持つファミア、身体が小さく大きな羽を持ち鋭利な鉤爪を持つハーピイ等々。動物の身体を半分持つような民

”魔人”だったとしても。

人間と魔人。

互いに違う体を持つ2つの種族が互いを理解し歩み寄るのに少なくない時間が掛かった。

多数の種族が集まり交易の中心となっていた中継地点の町が基盤となった為。

資材の確保は容易。

いがみ合つても仕方がない、と。意志の統一が取れてからは早かつた。

体力や力に劣るがそれを補うために捻り出した知恵を人間達が提供し、身体能力が優れる魔人達が中心になって土木作業。

お互いの法では差別や罪の重さに違いが出る事から、軍属の者達を排除。自警団の設立。

争いが起こつた場合はよつぽどの事が無い限り当事者達とその現場に居合わせた者達の裁量によつて解決がなされた。

2つの国を隔てる国境付近に鎮座し、両国に『我々はいかなる戦争、紛争に対しても不干渉を貫く』との中立を宣言。大それた武力を持たない、たった1つの街。

そんな所が中立を宣言した所で両国にとっては痛くも痒くもない。

だが、もし危害を加えた場合。物資の流通の要の1つである街が相手を鼻屑にするかも知れない。

そんな懸念を元に、干渉もしなければ進んで手を出す事もしない。と言う。暗黙の了解が生まれるのも、そう遅くはなかった。

そして、そこは戦争孤児を中心に、行き場のなくなつた者達を優先して受け入れる方針がなされた。

子供が集まり、自立させるための施設があり、資金は多数訪れる商人達からの積荷の関税を取り立てる事によつて賄われた。

行商人達から最初反発はあつたものの、大量に行き交う物資への魅力を捨てきれず。関税を取るときの積荷のチェックが入ることにより偽者を掴まさせる事の減つた町への信頼性。それらを理由に段々と反発は消えていった。

そして、孤児の子供達は働き、夫婦になり、家庭が出来、また子が生まれる。

『交易都市ハーフ』は大きくなるのに然程時間は掛からなかつた。

真新しいものを探し歩く。

人付き合いの煩わしさを嫌う私は、賑わっている大きな店は避ける。

魔人の中には夜行性の者も多く、昼は魔人達を、夜には人間達が中心に飲み明かす為。ほぼ24時間営業している酔っ払いの様な面倒事が跋扈する酒屋も素通りする。

大通りを歩く。喧騒の中に居ても聞こえてくる活力溢れる呼び込みの声を背景に歩を進める。

長年経営している店よりも露天の様な売りきりタイプの店の方が、珍しいものが多い。

見慣れないものを見掛けたらとりあえず買う。

蛇の様な何かの姿焼き、貴重な砂糖の使われた小さな飴細工、固めの黒パンに肉と野菜を挟んだもの、デカイ肉塊を火の上で回し焼けた表面を削り取ったもの、積み上げられた多数の果実、それ単体では食べられない調味料、ありふれた食べ物、見慣れない食べ物。

「うー．．．」

普段からたつぷりと休ませ満足に動かしてない、少しの買い食いですぐに満腹になってしまう小さな胃袋。

ケプツと満足感と共に口から息が漏れた。

もう帰ろうかなあ。

歩く道すがらそう考えていると。途中見た事の無い赤い物が積み上げられているのが目に入った。

そののラミアのお姉さんに聞くとなんでも水分を大量に含んでる野菜なのだそうだ。そのままでも美味しいらしいが。

ここから少し歩いた所に。それを煮潰して、塩、黒い粒を粉末にしたものを混ぜ味を整え。そこに口に含んだだけでほどける様に崩れるまでトロトロに煮込んだ鶏肉加えただけの簡単な。

しかし、酸味が効いてさっぱりする美味しいスープが売っているら

しい事を教えてもらった。

最後にそれを頂き今回は帰ることに決めた。

少し食べ過ぎかもしれないけど。どうせ月に一度なのだから。たつぷり食べてから帰ろう、そうしよう。

先程の赤い果実にも見えた野菜を売っていたラミアに小さく会釈して先を急ぐ。

距離にして20メートルくらいだろうか、すぐに「トマトスープ」の字が書かれた旗を見付けられた。どうやら先程の赤い野菜はトマトと言う名前らしい。

流行る気持ちを抑え、正面に回ると。残念ながら既に売り切れているらしく。

「ありがとうございます」の看板がテーブルに鎮座していた。

「……」

◇

不完全燃焼。

そんな言葉を頭に浮かべたまま、ハーフから外へと出る。月一度の食事を終え自宅に帰ろうとローブに手を差し入れ、ポケットからステッキを取りだして

「……」

再び元あった場所へと戻す。

うん、帰り道は転移しない。それほど遠くないし道すがらモンスタ―相手に魔法の実験でもしようかな。杖を使わない魔法がどれくらい威力が減退するのか実験もしてみよう。

うん、別に怒ってない。

第一、私は食べなくても生きていける化け物

魔法使いになったのだから。

食べ物に関する出来事に対して怒り。そんな高度な感情を抱けるわけがない。

ただの気まぐれだ。

うん。歩いて帰ろうとした事と締めのスープが飲めなかったのは一切合切関係ない。

大体私はお腹一杯だった訳だし

うん。関係ないし怒って等しい。怒る理由がないのだから

つらつらと頭の中でいろんな事をとりとめもなく考えていると。ふと私の前に人影を見付けた、数は1。

別段急ぐことなく、ゆつくりと街道を歩く。

やがて距離が縮まったことにより、道端に座り込み何かの作業中なのが分かった。

自分の事を最優先する私にとって、他人が何をしたいようが基本的に気にも止めない。今回だって、ただ男が1人視界に入ったただけだ。横目でそれを一瞥し素通りしようとして

「よいしょつ、と」

出来なかった。

近くに来て分かったが、この男。この辺りではメジャーな毒持ちの魔物である蠍さそりを倒した後なのか解体、部位の剥ぎ取りを行っている様だった。

それだけならば特におかしな事ではない。毒を溜め込んでいる部位はそのまま武器に狩猟の補助にと用途は多岐に渡る。

矢じりに塗り込めば即席の毒矢になるし、言わずもがな刃物全般へも使える。

外骨格の有用な使い方などもあるのだろう。単純に町へと持ち込めば、それなりの値が付く。

だから おかしな事ではない、その解体作業自体は冒険をしていれば。ありふれた光景だ。

「ふんふんふーん」

男の手元。モンスターの解体している獲物が包丁でさえなければ

ば……。

◇

「それ……。」

「うん？」

不意に声が出ていた。

もう戦闘は終わっている、見ていても答えは得られないだろう。と判断して自分から話し掛けていた。

「あなたの武器？」

「あー？いや見ての通り包丁だよ、調理器具」

あまり人と関わらない生活をしてるせいで、自分の観察眼に自信はないが。

パツと見た所、整えられてはいるが顎に髭を生やしている三十路くらいの男が解体の手を止めずに答えてくれる。

サクツ、スー。

サクツ、スーップチツ

随分と手慣れている様に見える。殻と殻の隙間に刃を入れて次々と解体してゆく。

3体目が終わったところで作業が完了したらしい。危険部位とそうでない部位に分けて包んでいる。

「あなたがそれを倒したのでしよう？」

農作業で生きている農民達特有のママが出来て潰れる。それを繰り返した末のゴツゴツした固そうな手

「まあ、そうだな」

解体作業とは言え、包丁捌きには迷いがなく。また無駄もなかった。料理人なのだろうか？

「その魔物に刃物は効果的ではないと思うのだけれど？」

しかし、もしそうだとしたら。町から出た街道に1人でモンスターと戦う料理人なんているのだろうか？

「いやー、こいつら想像以上に固いわ、毒飛ばすわで参ったよ。」
そう言いながら。ハツハツハツ、と軽く笑った。参ったとか言う割りには目立った外傷は見られない。そこそこ腕も立つらしい。
包丁に付着した体液をボロ布で拭き取り納刀し、答える男。
農民にしては着ている服も、顔も小綺麗に整えられている。
身体はそこそこ鍛えている様にも見えるし、手に持つ獲物は槍でも
鎧でもなく。少し刃渡りの長い包丁。
比較的弱いとは言えここの魔物を外傷無しで倒す戦闘能力。
随分とちぐはぐな印象を与える男だ。

「こんなところで何を？」

「貿易都市への帰りの道すがらもう少しつとところで襲われたんだよ」

ほれ、と言いながら男が指差し答える。

その指先を辿って前を見ると、確かになにやら小さい建物が見える。

そこは町から町へと移動する際の、休憩場所みたいなものらしい。
普段転位してばかりだからこんな建物知らなかった。

「そうなの。ところでお願いがあるのだけれど・・・？」

男が荷物を背に歩き始めた。まだ確認したいことがあるので、私も付いて行く。

「おう、なんだい？」

「さっきの蠍が欲しいのだけれど、大丈夫かしら？お金もあるわ」

さっきの蠍の毒はきちんと保存しないと、その毒性が時間と共に失われてゆく。

見た所、先程解体していた物は新鮮そのもの。死に立てホヤホヤだ。

毒薬の錬成と抽出は私もいつかやってみたかったので、訪ねてみた。

「うーん。」

男が休憩場所へ到着し、荷物を地面に下ろしながら唸る。

「ちゃんと適正価格で買い取るわ。見た所新鮮みたいだしそれなら毒性も強いだろうから、色も付ける」

重ねて交渉してはいるものの、別段今すぐ欲しいわけでもない。

これで渋られたり。見た目が若いからと値段を吹っ掛けられたら、それ以上の交渉はせずに帰ろう。

そう考えていたら。

「いやー、でもこいつまだ食ったことないからなあ……。」

……。

は……？

「おーい、どうしたお嬢ちゃん。固まったりして」

「え、っと。」

理解不能。

「えっ、食べられるのコレ？」

ああ、もしかしたらこの男は日常的にこれらを食べているのだろう。悪食にも程がある。勝手にそう辺りをつけて訪ねる。

「知らん」

理解不能。

「だって貴方も戦ったし知ってるでしょ？こいつ毒を持っているのよ？」

「知ってるさ。」

「だが食ったら旨いかもしれないだろ！」

とても良い笑顔で即答されてしまった。

理解できない、こんな人は初めてだ。毒性、用途別の素材として魔物の部位と、その利用方法を考えるのが馬鹿らしく思えてきた。

「そ、そう。私も今回は諦めるわ、好きにして」

「そうさせてもらおう。」

ああ勿論、こいつの毒袋の場所とかは知ってるし。だから多分、大丈夫だろ」

「どうやら本当に確証も経験も無いらしい。」

「そうね、せめてあと二日ぐらい保存しとけば毒も少しは弱くなるんじゃない？」

「馬鹿言うな、新鮮な方が美味いに決まってるだろ」

毒持ちの魔物を相手に全く物怖じせず、その食に対するまっすぐな探求心が。私の知識欲と被って見えて、少し好感が持てた。

「くそっ！毒だ!!」

考えなしの馬鹿みただけだ。

「ふふっ、くそじゃないわよ……。」

久々に・・・。

ああ、久しぶりに笑った気がする・・・。

2話 店長と魔法使い

〃〃〃

「・・・。」

「おはよう、朝よ」

◇

窓から差し込む光に瞼が刺激され、目が覚めた。

どうやら朝になったらしい。欠伸をして、そのまま身を振る。腰付近の骨がボキボキと音を立てる。あまり良くないのは知っているがいつまでたっても、これは辞められない。

「うん？」

身体を捻っていると視界の端に何かを捉え、違和感を覚える。布団が盛り上がっているようだ。

俺の隣に誰か寝てる？

ガキの頃ならこういうことが定期的にあつた。うちに泊まりに来たアイツが1人で寂しくなった、怖い夢を見た。そんな様々な言い訳じみた理由を聞いてもいないのに告白し、有無を言わさず潜り込んできていたのが懐かしい。

あと、こんなことする知り合いは、ラミアの女。ミラが居るがこのベッドの膨らみとは明らかにサイズが違う。

第一、俺が寝坊した時に朝起こしに来てくれることもあるが。流石に一緒に寝る仲ではない。

では、誰なのだろうか？

寝起きの、あまり働かない頭で悩んでいても埒が明かない。俺に怪我や身体の不調がないのだから危害を与える何かではないのだろう。そう辺りを付けて中を確かめようと、毛布を持ち上げる。

さらさらの金髪。

しなやかな身体。

起伏は小さいもの。

しつかりと女を感じさせるラインの肢体。

丸くなつた裸の女の子がいた。

そつ、と何も見なかつた事にして毛布をもとに戻す。

冷や汗が吹き出してきた。

つべえー。つべえよ、これ。

いや、つべえよ。とか言つてる場合では無い、よく考えろ。現実逃避したところで状況は何も変わらない。

状況確認。まずは俺だ。

俺の姿は寝間着に着替えずに寝落ちでもしたらしい普段着だ。つていうか外行き兼仕事用の服。断じて裸ではない。セーフ!!

そして次。この女の子誰だ？

何故かおぼろげな記憶の糸を手繰り寄せ、自分の行動を思い返す。頑張れ、思い出せ俺の脳細胞。酒もほとんど飲まない俺なら記憶をなくすことなく大概のことは思い出せる筈だ。

仕事に行き、帰宅して趣味の時間に没頭して寝る。休日には馬鹿やれる学生時代からの友人と遊びに……。

明らかに遠すぎる過去だった。今の俺が生まれるどころか影も形もないわ。

『兄さん!』

ああ、これも遠い昔だ。こっちで生まれ変わって、同じ村の近所に居た6つ年下のアイツ。血の繋がりは無いが小さな農村、全員が顔見知りだ家族みたいなところだ。

いかん、落ち着け俺。前世からの不治の病DOU TEIに屈するな！世を越え未だに俺を苛むとは恐ろしい難病だ。

裸の女の子見たからって動揺するな、感動するな。頑張れ男の子
(24)

ええつと・・・。

昨日は確か露店を出してそこで商売してたんだ。んで、予定より早く捌けた。ここまではハッキリと覚えてる。

で、馬車どころか歩きでも行けるくらいの近くにある隣町。

交易都市ハーフが恐ろしいスピードで発展する中、変わらずに畜産を主流に細々と、しかし細かい所まで徹底した管理で育成。そこでしか卸せない高級な肉類や鶏卵が強いところだ。知り合いのラミア親子の故郷でもある。

予定よりも早く時間が空いたのを理由に1人で仕入れに向かい。その途中で運悪く魔物に襲われた。

うん、思い出してきた。

で、ついでに味も見ておこうと思って解体してた。そこで話し掛けて来たのが・・・。

「こいつだ。」

目線を動かしてスヤスヤと規則正しく上下する毛布を見る。

今こいつ裸なんだよなあ・・・。いかん変な気分になってきた。思考に没頭しよう。そうしよう。意義なし。意義なし。意義あり

脳内の悪魔（本能）は天使達（理性）によって串刺しにされた。K
O W A I。

よし、アホな事考えてたら少し落ち着いてきた。我ながら単純だ。

で、だ。魔物の部位を譲ってくれて言われたのを、俺が断った。理由は単純明快。食ってみたいから。

そうしたらこのお嬢ちゃんも立ち去るでも会話するでもなく、俺の失敗だらけの手探りの作業を飽きもせず観察していたんだった。

「まずは、毒袋から遠い位置にある部位の素揚げだ。

うん、食感がいいな、実に良い。パリパリしてて美味っゲフツ！」
「身もしっかり毒持ってるみたいね」

「煮込んでみたんだが、明らかに途中から毒が滲み出てるなこれ。」

「煮汁が固形物になってるわね」

「さっ、と熱湯消毒してみるか！」

「解析。逆に毒性が強くなってるわね。感心するわ」
「・・・」

「この部位なら生でいけるんじゃないかね？」

「流石にそれは止めなさい。」

「そうか、じゃあプランBで」

「ないわ」

e t c . e t c . . .

そうして、普段から別段多めに常備する物でも無い為か。俺が3体居る内の1体を使いきった辺りで。

手持ちの毒消し草、それを使った調合済みの解毒薬が無くなった。荷物をひっくり返してみるが、やはり無いようだ。

そこで諦めようとして

「私、解毒の魔法使えるわよ。

三種類に区分されてる。上、中、下、全て。」

渡りに船。

何故、初対面の俺にそこまで協力してくれるのかは分からなかったが。折角なので頼むことにした。

料金は要らないとの事だったが、今度うちの店に来たときになんでも奢ると言うのと、少し硬直したのち彼女ははにかむ様に笑ったのだった。

今日知り合ったばかりだが、基本的に無表情な彼女が見せる。その笑顔は大変魅力的だったと心に留めておく。

そのあと俺が食べ、彼女が俺の解毒を行う作業を繰り返す。ひたすら試行錯誤したのだった。

毒を喰わば皿までとは言うが流石に食い過ぎたか、そこらへんから記憶に霧が掛かったように曖昧だ……。

それにしても俺が言えた話ではないが、昔の人間って変態だよなあ。

この世界では体内から綺麗さっぱり毒を消す魔法やら薬があるけど。何人も死にながらそれでも食べるのを辞めないで試行錯誤したんだよな。確かこんにゃく芋とかもそのまま食べると胃に出血を伴ったりと、完全に毒だったらしいし。

ふぐとか幾人もの犠牲によって毒の部分を特定したのは凄いことだと思う。取り除くのは分かるが、なぜその内臓まで糠漬けにして食べようと思うのか。

ベニテングダケとか毒抜きするとめっちゃ美味いらしいな、じゃあ仕方ねえや。

結局、理解できる俺も変態だったと言うことなのだろう。

思考が逸れた、考えを戻そう。

「それから。」

成果を得られないまま2匹目を完食したところで、確か一端作業を切り上げた。

場所はあくまで町と町を繋ぐ休憩所みたいな所だ。簡単な調理器具ならあるがどれも店の物と比べるとお粗末な物だ。

いくら魔法で解毒が完璧に行われていても舌の痺れまでは取れないっほいな。ピリピリする。

ってか、こいつらでかすぎるわ。腹一杯だよもう。

舌の休憩と腹ごなしの運動も兼ねてラスト一匹の魔物を手に交易都市ハーフにある俺の仕事場まで帰ってきた。競歩で。

本来であれば隣町での仕入れを行う予定だったが。それよりも、まずは俺の探求心を優先した。

「ただいまー、っと」

「・・・」

俺の城へ帰ってきた。お嬢ちゃんも付いてきている。

契約はまだ生きてるらしい。

俺の後ろで鏢の広いとんがり帽子の埃を払っている。魔法使いとかが被ってるアレかわいいよな・・・。

うちは1階と2階で役割がハッキリと別れている。2階の居住スペースに行き、手荷物を寝室に放り投げる様に置き仕事着に着替える。

そして、1階の仕事場へと戻る。

先程と比べるとなんと調理器具の豊富な事だ。まさしく実家の様な安心感。実家じゃないけど。

調理を始めようとした時に、仕事場兼自宅のここなら解毒薬あるんだよなあ。例え使いきったとして町には知り合いの薬師がいる。

先程の蠍を手になんか事を考えながら1階の4分の1を占める調理場。そのカウンター席の端っこに、ちよこんと座る彼女を眺める。視線が絡み合い、小さく首を傾げる彼女を見ていたらふと思いついた。

「なあ、こいつの毒性。それ自体を弱体化させることは出来るか？」

俺の状態異常を直すためではなく。

魔物の体内の毒自体を弱めることが出来ないかを提案。

鳩が豆鉄砲喰らった様な顔をしていた彼女は、暫し硬直したのち心底面白そうに笑みを浮かべ

「解毒・下。効果なし。解毒・中。こちらも同じ。上も効果なしと予測。解呪・下を試行。芳しくない。新たな属性を付与、強化の一括解除。毒性の若干の不安定化を確認。この切り口で作業を継続。」

矢継ぎ早に魔法を展開。生き生きとした顔で試行錯誤している。すげえ良い表情だ。基本的に無表情な彼女が見せた新たな一面。

周囲やら手元に現れる魔方陣かけえ、なんて頭の悪いことを考えながら観察し、結果彼女はそれをやってのけた。

そして、それが終わったのは、近所の酒場から人が疎らになる様な。結構遅い時間だった。

「そこから確か・・・。」

パツと見たところ若い彼女が、独り身の男の所に遅くまでいるのも不味いだろうと。

今更ながら状況の不安定さを認識した俺は、彼女の家の場所を聞き送って行こうとしたら断られた。

「寝る・・・。」

勝手に2階の居住スペースに上がって行ったのを尻目に、俺も散々食いまくった毒で判断力が鈍っていたのだろうか？

それとも毒性の弱まった新たな食材への高揚感と期待感が、先程の心配事を綺麗さっぱりと忘れさせたのか。

「おー。」

おざなりな返事をして、特に彼女の行為を咎める事なく。調理に専念し始めたのだった。

ここでもう一度繰り返すが俺は独り身だ。ベッドが1つしかないのも当たり前であった。



「眠い……。」

唯ひたすらに眠かった。

少し魔法を使いすぎたのか、ただ単に疲れただけなのか。上手く働かない思考で今日出会ったあの男の事を考える。

面白い人間だ。

それが私の。彼に下した総評。

単独で魔物と戦うところを見たわけではない。だが3体の魔物と闘い掠り傷1つ無い身体を見れば、腕がたつのは分かる。

単純に数が多いと言うのはそれだけで前衛の脅威になりえる。

実際に使う他の武器があるのかどうかは分からないが、包丁も魔物の解体作業も見事な物だった。手慣れた解体の動き、その補助に使われた包丁は下手な剣よりも切れ味も良い業物であるのが分かる。

「……。」

寝室にたどり着く。大きなベッドだ。

そしてあの突拍子もない行動。

普通の野生にいる蠍だったのなら針から人体に注入され初めて効果の発揮する神経に作用する毒。食べても問題はないハズだ。もちろんこれは本で得た知識。試したわけではない。

だが魔物へと、毒の性質自体が変わり。果てに身体の構造の一部までも変異したモノを食べようとする行為。

耐え難い飢餓感に襲われた末の行動ではなく、ただひたすらに食欲と言う好奇心の赴くまま。行われる行為。

彼が自分のポーチを漁っている。

手持ちの解毒薬がなくなったのを状況から理解した私は、彼がどんな答えを出すのか気になって仕方がなかったのだろう。

『私、解毒の魔法使えるわよ。』

三種類に区分されてる。上、中、下、全て。』

そんな言葉が自然と口から出ていた。

「熱い……。」

服を脱ぎ捨てる。

部屋が、荷物が、服が、ベッドが濡れない様に風の魔法で薄く丈夫な膜を張り。それから水を少量生み出し身体を濡らし布で拭き取る。

魔法使いになり寿命が延びた。成長を置き去りにした身体から汗と汚れを拭き取るが。

老廃物、垢は出ない。

私は彼を観察し、彼は調理に没頭する。生き生きとした表情で調理し味見を繰り返す。いきなり「毒だ！」等と当たり前の事を叫んだ時は思わず吹き出してしまった。

そうして2匹目が終わった時、一端作業を切り上げ帰るらしかった。

まだ彼の出す答えを見ていない。

私も歩いて彼に付いて行く。歩幅が大きく置いていかれそうだったので、途中から風の魔法を使用して浮遊し追従していった。

やがて、小さな食堂にたどり着く。

2階へ行く彼を見送り、私はカウンターの1番端座り回りを見渡す。いたって普通の調理場だ。蠍の魔物以外は。

そうして彼が清潔な服に着替えバンダナを頭に巻いた姿で現れた。先程の解毒の魔法の時にご飯で釣られた訳ではないが、どうやら彼は本当に料理人だったらしい。

そうして料理に入るのかと思った時に、ピタッと彼が包丁と蠍を持ったまま行動が止まった。こちらを凝視している。

不思議に思い私も彼を見ていると、突然すつとんきような提案をしてきた。

曰く、毒そのものを無害な物に変質させられないか？との事だった。私は自分では決して至れないであろう提案に思考が停止。

まずそもその発端、魔物を食べようとすら私では思い付かない事だが。

再稼働するの間に間が出来たが、理解してみると。成る程面白い考えだと、知らず知らず笑みが漏れる。

そして、私は新しい切り口で魔法の実験を行う機会と発想を得た。思い付く限りの魔法を片っ端から試す。解毒、解呪、付与、解除、減退、強化、増幅、軽減、無効化、解析。時にはそれらを組み合わせる。

体内の魔力がゴリゴリと音を立てて減っていくのが分かる、だが構うものか・・・！

魔力を練り上げる身体が怠い。

それを行使する手が震える。

なんとも労力に見合わない。

応用の可能性が全く見えない。

身体が熱を持ち、脂汗が滲み出る。

だが、辞めない。止められない。

こんなに楽しいのは。

こんなに愉しいのは。

久しぶりだ。

そうして、私は作業を終え新しい魔法を編み出した時には。魔力がほぼすつからかんの状態だった。

対象の毒、ひいては身体の構造をほんのちよつとだけ弄る、新しい魔法の完成。

それが、今回成功し得られたもの。

なんとまあ努力と労力に見合わない成果だ。軽く自嘲気味に笑う。

苦笑いを浮かべながらも、決して悪くない気分だった。

「寝る……。」

身体から水分と汗を完全に拭き取り綺麗にしたあと、部屋を覆う風の魔法で作った膜を解除。ワンピースとローブを適当に畳み。その上に帽子を乗せる。

どうでもいいが、私は寝るときは裸派だ。他にそんな人がいるのかわからないがとにかく楽で良い。

ベッドに倒れる様に潜り込み、掛け布団をすっぽりと被る。自分以外の人の匂いに包まれた。

今日初めて出会った彼の匂いは不思議と不快ではなかった。

ああ、世界はまだまだ未知に溢れている。

そんな心地好い倦怠感を全身で感じ。

自分以外の人の匂いに包まれながら、私の意識はあつという間に溶けていった。



うーむ、成り行きを思い出せたんだが。

間違いなく俺が寝に行く彼女を止めなかった事が原因だ。で、昨日の俺は弱めて貰った魔物の毒抜きと料理を完成させたのが夜が明けかけている頃。

終わった後の俺は部屋に戻るや否や、着替えもせずに床に着いたのだった。

「うん、思い出した。よし完全に俺が悪い。彼女が起きる前に脱出し

よう、そうしよう。」

今の自分の姿を見やる、昨日からそのままの服だ。ただでさえ熱いのに調理で流石に汗がヤバイ、最低限の着替えを持って脱出。

ドアを開け掛けた所で、モゾモゾと布団が動く気配

あ、ヤバ。間に合わ

「ううん。」

布団が捲り上がる。身体のラインが透けて見えるぐらい薄いシートで辛うじて隠れる身体。目覚めた彼女は暫くの間、うとうととしていた。

ボーっとしていた彼女は、ゆらゆらと身体を揺らし視線を泳がせている。やがて大きな欠伸と共に伸ばされる身体。そして隠れていた魅力的な身体が露になり目が奪われる。

そうしている間にバッチリと目が合った。視線が絡み合う。動かない俺の身体。

「……。」

「おはよう。」

そうして、彼女は揺らしていた身体をこちらに向けて挨拶をしてきたのだった。

まったく隠していないせいで、色々と丸見えになっている。その行動に俺は固まってしまい。何も言えなかったのだった。

3話 店長とラミア

（05）

お腹空いたー。お腹空いたー。



「ふあ．．．。」

あまりの緊張に動かない俺の身体を尻目に、呑気に欠伸をしながら身体を伸ばしている彼女の身体は実に扇情的だった。

「あ」

きらきらと朝日が反射するかの様に煌めく金色の長髪が動きに合わせてさらさらと身体の表面を滑る様に流れていく。

綺麗だ．．．。

ただその感情を赴くままに、自然体でくつろぐ彼女に近づく。

昨日初めて知り合い契約して仕事を1度頼んだだけの相手。親しい間柄でも、頭を触られるのは苦手な人が多いと知っていながら。俺はその髪の毛に触れた。

「？」

彼女は抵抗もしないし、嫌がるでもなく、ただ不思議そうにこちらを見ていた。

手櫛入れる様に触れると手をすり抜ける様にサラサラと流れる髪。

俺は無意識の内にもう一度手を伸ばして

「てーんちよー！おっはよー、今日の分のトマト持ってきたよー！ー！」

止まった。

「って、あれー？いない。まだ寝てるのかな？ 珍しいー、久々に新メニューでも作ってたのかなあ？」

階下からの声。正氣に戻った俺は慌てて彼女へ伸ばしていた手を引つ込める。俺の手を見ていた彼女は相変わらず目立った動きがない。

近付いてくる1階からの声。

気が動転している俺。

なにを考えているのか分からない彼女。

ノックもせずに勢いよく開かれる扉。

「てーんちよー！朝ですよー、おつはようございまあー………」

そつ、と閉じられた扉をただ見ていることしか出来なかった。



「んで、店長。この子誰？」

あの後に取り乱した彼女を宥めるのに骨が折れたが、やっと落ち着いたらしい。

ラミア族。上半身は女で下半身には蛇の身体を持つ、人間と一緒に暮らしてはいるが、体温は変温動物のそれだし、成長すれば脱皮もする、生態としては蛇に近い魔人。

ミラが、ドアに視線を向けたままの俺の背後から訪ねてくる。

ちなみに魔法使いのお嬢ちゃんはミラに手伝って貰いながら着替え中だ。

「昨日偶然知り合った魔法使いだよ」

聞こえない聞こえない、衣擦れの音なんか俺には聞こえない。極力意識しない様にながら答える

「昨日？ってか、魔法使い？何してたの？」

「いやー、毒持ちの蠍モンスターいるだろ。あれを食べるのに解毒の魔法やらで手伝ってくれてたんだよ。」

「はあ!?アレ食べたの?」

まあ店長の悪食癖は知ってるつもりだったけどさー、なんて呆れたような声が聞こえてくる。

悪食とはなんだ悪食とは、ただ味が気になるだけだ。全部この好奇心が悪いんだよ、俺は悪くねえ!

「はい、かんせー」

「ありがとう」

その声から察するに着替えが終わったらしい、俺は二人に向き直る。

「そもそも俺が1階にいないからって、独り身の男の寝室に女が1人で来るなんてなに考えてんだお前は」

「へー。店長って、こんな見た目の私でも1人の女として扱ってくれるんだー?」

蛇の下半身をいつもより大袈裟に、そして必要以上にくねらせ這って近付いてくる。

「町では遠巻きに見ている人なんかも未だにいるだろうが、元々俺はそんなの気にしない。何回言わせんだよ、そもそももう長い付き合いだろうが」

この町に定住しているような人からは当たり前だとしても、やはり外から来る人には魔人の身体は物珍しいらしく、未だに視線を感じることもあるらしい。

世の男性諸君、女性は男の視線には敏感だぞ!気を付けろよ!

と、さつきまで魔法使いの身体をじっくりと観察してた変態が世の男性に対して心の中で偉そうに語っている。

どうやっても俺だった。

「えっへー」

そしてミラは満面の笑みを浮かべ尻尾の先端をゆらゆらと左右に揺らしている。

本人は気付いていないんだろうなあ。俺が昔指摘してからは気をつけているみたいだが。今でも尻尾に感情が現れていることがある。

「よいしょ」

ぽすん、と俺のベッドに座る音が聞こえた。二人でそちらに視線を向ける。

そこで今まで黙っていた。彼女がお腹を触りながら

「それで、あんなに私を使っただから出来たわよね」

爆弾を落としたのだった。

◆
時は少し遡る。

「おっはよー。はー、今日はいい天気だなー!」

部屋の窓を勢いよく開け、思わず声を上げる。

天気が良いのは本当に素晴らしい、ラミア族である私の体温は変温性なので。天気が良くて暖かい。

もうそれだけで気分も体調も機嫌も良くなる。

「おはよー、母さん!」

「あらあら、今日は早いわねミラ。」

移動の邪魔にならない程度の短めのスカート、体温を維持しやすい長袖のシャツに着替え。顔を洗い肩に掛かるくらいの萌える様な翠の髪の毛。そこに出来た寝癖を直す。

そうして身だしなみを整え、外に出ると既に起きている母さんが麦わら帽子を被って野菜の手入れをしていた。

「うん、とつてもいい天気だね」

「ええ、暖かいと助かるわね」

そんな母さんに近寄ると、いつも使っている宅配用の袋が既に置いてあった。どうやら中身も既に見繕ってあるみたいだ。

「あ、もう今日の分もう出来てるんだね」

「ええ、後は届けるだけよ。ミラ、お願いね」

中身を改めると、相変わらずの真っ赤なトマトをメインに色々詰合せられた野菜の袋。

「うん、おっけー」

「ええ、頑張つてねミラ」

中身を確認し外へ、見送りに来てくれた母さんがウインクをしながら私の肩を叩く。ううむ、ただ配達をしているだけだったのに母さんは何を期待しているのだろう。

私達ラミア族には男性は居ない。だから他所の人間や他種族の魔人に相手を見つけてくる他無い。

私ももう結婚出来る年齢になったが、私には男つ毛がなかった。それが拍車を掛けているのか、最近は何となく私用の恥ずかしい服とかを買ってくる母さん。なんでも誘惑するための勝負服、らしい。

恥ずかしすぎて1度も着てはいないが、最近更に増えていっている気がする。

「もう！いつもの店長さんのところに行くだけでしょ！」

「ええ、そうね。昔から忙しい私の代わりによく貴方の面倒見てくれたわよね。ずっとあの人にベツタリで母さん悲しかったわ」

「ちよつと、母さん！」

よよよ、と分かりやすい泣き真似をしながら過去を蒸し返している母さんの言葉に顔が熱くなる。

「ミラがあのお店に居るのが当たり前になって。お礼も兼ねて隣の実家に招待して。そしたら・・・。」

「あー、帰り道の道中で野生のトマトを見つけたときの店長のテンションが凄かったね」

「ウチの特産品よりも喜んで、少し残念だったわよね」

二人でその時の男の様子を思い出し、呆れながらも笑う。

「それで、帰ってきて早々にトマトの生産出来ないかって始まって」

「自分の店で辛いだらうに資金援助までしてくれて」

「本当に」

「ええ．．．。」

「変な人だよな」

そう言つて二人でカラカラと一頻り笑いあつた後、私はいつもの野菜の配達に出発した。

いつもの荷物、いつものコース、いつもすれ違うおじさん、朝から活気溢れる大通り、少し大通りから逸れて毎日配達に来るお店、仕込みをしながらいつも笑顔で出迎えてくれる店長は

「てーんちよー！おつはよー、今日の分のトマト持つてきたよー！」

今日はまだいまいましいだった。

稀に。いや、たまにこういつた出来事はある。何せあの店長だ、おかしなもの食べて体調不良起こしたり。

新メニューを夜通し作つていて寝過ぎたりなんかは、たまに．．．いや、そこそこの頻度で起きる。

その場合だと私のお昼が質素になる。店長の身体を気遣つた私は、彼を起こさずに1度自分で料理をした事があつたが。

その日私は決意した。

あの惨状を経験し、傷心した自分は他の何を置いても朝にきちんと店長を起こすと心に決めたのだった。

勝手知つたる他人の家。

昔から面倒を見てくれていた店長のお店兼自宅の構造は完璧に把握している。

2階へ上がつて、一番奥の部屋。

どうせまた得意の創作料理で寝不足なのだろうと決め付け、彼の寝ぼけ眼を思い出し勝手に笑みが漏れる。

ドアの前で軽く身嗜みを整える。

ステンバニー ステンバニー

よし！

ゴー！！

「てーんちよー！朝ですよー、おつはようございまあー．．．」

「……。」

「……。」

「……した。」

私の頭は部屋の中の出来事を把握出来ずに、理解することを放棄し何も見なかつた事にして退室したのだった。

それから部屋から出てきた店長から色々と言明された気がするが良く覚えていない。

まあ、とりあえず彼女とかではなく、知り合つたばかりで昨日一緒に仕事をした。だけ、らしい。

うーむ……。

今日は天気が良い。

暖かくて体温だつてそこまで下がつてない、活動しやすい状態を維持してる。

けれど、何故かモヤモヤする。身体の動きに違和感が残る。上手く動かせない様な、そんな気がした。

その後、二人で部屋に戻ると未だに裸の魔法使いさんがいた。

朝が弱いのだろうか？一向に着替えようとしなない彼女の着替えを私が手伝つてあげた。

「はい、かんせー」

「ありがとう」

今の今までほぼ全くの不動のまま動かない彼女の着替えを終え、最後の仕上げに彼女にとんがり帽子をポスンと頭に乗せる様に被せて完成を告げると。こちらを見上げ真つ直ぐに視線を会わせたままお礼が言われる。

大人になると感謝の念を真つ直ぐと人に向けることも向けられることも減る。

そんな中、どこへも逸らさずにこちらをじつと覗き込み。ただひたすら真つ直ぐに伝えられる感謝の言葉に私は面食らつた。

「かわいい・・・。」

「？」

思わず漏らしてしまった言葉と、変わらない態度でいる魔法使いの彼女を見ていて気恥ずかしくなった私は、いつの間にかこちらを見ていた店長から掛けられる声にそちらに寄って行く。

「えっへー」

そこでまるで保護者みたいに色々と注意してくる店長。まだまだ子供だし、って前は良く言われたけど最近は私を一人の大人として扱ってくれる。

昔から私の事を知っている人が自分の事を一人の大人として扱ってくれることに自然と顔が綻ぶ。

「よいしょ」

魔法使いさんが自分のお腹を撫でながら、ベッドに座った。

「それで、あんなに私を使っただから出来たわよね」

え・・・？

◇

空気が凍った気がした。

顔をそちらに向けておらずとも、隣にいるミラが固まっているのが手に取るように分かる。

あー、なんか本来は暖かいはずなのにこの部屋寒すぎない？冷房効きすぎだよ、ミラの体温下がって動けなくなってるじゃん。

もちろん冷房なんてこの世界にはない。

が、気分的には絶対零度だ。

「一夜を共にして付き合ったのに出来なかったの？」

あ、また下がった。

こてん、と首を可愛らしく傾げているがその威力は計り知れない。

「ててて店長?」

「いや、ちよつと待て!何もしてないぞ!」

「あんなに頑張ったのに出来なかったの?」

ちよつと黙って!いや何も喋らないで下さいお願いします!!

「裸で店長のベッドに……。そうだ……。私も同じことすればもつと大人に」

ミラはなにやら呟きながら、ごそごそと荷物をひっくり返している。

「さつき、中身の確認してたら母さんが勝手に荷物に紛れさせたのが。」

取り出したのは向こう側が透けて見えるくらい薄いネグリジェだった。え?なにそれ?服の意味なくない!?

ミラが体温を簡単に下げないために暖かくても、肌を極力露出させない長袖の服を愛用し、着用している事が多い。それらは今、本来の役目を放棄され投げ捨てられている。

「お前はちよつと落ち着け!」

薄手の上着を脱ぎ下着が露出される。スカートはそのままだが、その豊かな肉体を覆うブラっぽい下着に手を伸ばしている。

それ以上いけない!それを必死になって止める。

「ねえ」

「なんですか!?!今手が離せないんですけど!」

「てんちよー離してー!」

そんな目がグルグルになって視点が定まって無いような、混乱しきつてるやつ放っておける訳ないだろ!

「お腹すいたわ」

「そんな状況ですか!」

はーなーしーてーとか叫びながら暴れるミラを取り押さえ、抑え

て・・・。

つええ！抑えられん！魔人強すぎるだろ！！

あつ、ブラに手が掛かっている

第2防衛ラインも突破されましたー！

脳内もうるせえ！

「あー、もう仕方ない！」

頭を抱え込むように抱きすくめる。

いくら種族の違いによる地力が敵わなくとも、上半身だけとは言え、身体は俺の方が大きい。

ミラが子供の頃、愚図ってしまった時に良くやっていた手段だった。昔は良くアイツにもやったものだ。

彼女が大きくなって、所謂第二次性徴を迎えた頃からやらなくなつた。抱き寄せ、頭を固定すると最初は暴れていたが。次第に大人しくなつていった。

未だにむーむー唸ってはいるが大人しくはなつた。なんか俺の身体に、蛇の部分が絡み付いているけど気にしない。多分気にしたら負けだ。

落ち着いて来て動かなくなつたミラを抱き締めたまま、俺の頭も徐々に冷えてくる。

「夜中まで眠気を押して、あんなに魔力使つたの久し振りだったもの。あの新作でもいいから食べたいわ」

「なあ」

そしてその言葉を聞いて、一つ思い当たつた。

「なに？」

「さっき何て言つてたっけ？」

「お腹が空いた」

お嬢ちゃんが自分のお腹を撫で擦りながら問い掛けに答える。ちようど俺が今ミラの背中にやっているみたいに、ゆつたりと撫でていると腕の中の抵抗は更に小さくなつた。

「その前」

「それで、あんなに私を使つたんだから出来たわよね」

腕の中でビクリと跳ねる身体をより強く抱き締めて密着させる事によつて動きを封じ、拘束する。

気にしない気にしない、抱き締めて俺の腹辺りに当たつて。尚且つ変形している膨らみなど気にしない。

だが。うん、把握したわ。

「あんなに私の魔力を使つたのだから、新作料理出来たのよね？」

で、合つてる？」

「最初からそう言つてるわ。」

「主語が足りねえよ……。」

はあー、と大きく溜め息を漏らして脱力してゆく俺。

その脱力した俺を振り解く事なく、茹で蛸の様に真っ赤になつたままのミラは俺の胸に顔を埋めたまま暫く動かなかつた。



「うん、美味しいわ」

「ねー、見た目悪いけど」

あの爆弾発言を処理したあと、ミラが落ち着くまで結構な時間が掛かつた。

俺の身体を締め付けていたのも本人は気付いてなかつたみたいで、我に帰つた後の取り乱し方は筆舌に尽くしがたい。

まあ、具体的に少しだけ例を挙げると。俺の腕の脱臼と一部家具の破損とだけ言っておこう。

まあ、どっちもお嬢ちゃんに直してもらつただけど。魔法使いつて凄い。

「そりゃ、元は魔物だからな」

で、治療魔法使いながらも繰り返される。「お腹すいた」コールに若干呆れながらも。お嬢ちゃんとミラに朝御飯を提供していた。

昨日作ってた新メニューだ。

蠅の素揚げ。試行錯誤してた中で結局一番最初のここに戻ってきた。

食感がポテトチップスみたいにパリパリでどこまでも食べられる様な感じだ。毒抜きされた事によって旨味成分に似たものが残ったらしい。

処理されたベニテングダケみたいな感じなのだろう。

「トマトスープ？」

「作れる？」

そして素揚げが半分減った頃に突然告げられたものは、なんでも昨日の昼に売り切れてしまつて食べ損ない。それからずっと気になつてたスープの事らしい。

「そりゃ、メインの付け合わせとかで隔日でほぼ毎日作ってるけど」「作って！」

ガタツ、と、椅子を倒しかねない勢いで立ち上がって詰め寄ってくる魔法使いのお嬢ちゃん。

それを横目で見ながらむくれているミラ。パリパリパリパリと、手と顎は止まっていない。

そんな彼女から野菜の詰め合わせの袋を受け取り、料理の準備を進める。

まだ開店前だと言うのにもうひと悶着ありそうである……。

4話 店長と大好物

（0）

ふっふっふっ。

やっただ・・・。

やっど手に入れた・・・。

待ちわびていたぞ！この瞬間を！！

◇

今日は金曜日だ。

いや、この世界には曜日とかそういうったものはないのだが。金曜日と言ったらアレである。

そう、俺の大好物のアレ！

それを作るに当たって、まずうちで使ってる一番大きい鍋を取りましたが。

久しぶり、実に24年ぶりだ。

前の世界で定期的に作っていた大好物。それを食べられる機会を前にテンションが怒髪天並みに急上昇。それを作るためだけに、一度町に出だし。更にでかい鍋を購入してきてしまった！

このその場の勢いだけで大なり小なり暴走する癖を俺は自覚はしている。悪いところを矯正するにはまずは自覚することから始めるのが一番だと聞いた事がある。

つまるところ、俺のこれは直らない。自覚し悪いとは思っているが、反省はしていないのだから直るわけがなかった。

話が逸れた。

なにやら町では一度ここを通った有名な奴が帰って来るとかでパレードの準備やら、特売品や、セールやらで多数の人間、魔人がこの狭しと駆けずり回っていたが、正直今の俺は其れ処ではなかった。詳しい話は聞かなかったし、聞いてもいない。熱心に語る店員の言葉

も話半分に、右から左へと受け流して早々に帰ってきてしまった。

まあ、セールのせいで安く手に入った鍋分くらいは感謝してるよ有名人様！

さて、やりますか・・・！

まずはうちに既にあつた鍋に水を張り馬鈴薯^{ばれいしょ}。まあジャガイモだ。それに湖蘿蔔^{こらう}。うん、どう見ても人参だね。

そして、レッドオニオン。何でいきなり英語なんだよ、紫玉葱。皮を剥き、4等分くらいに切つていくジャガイモと、それより一回り小さいサイズに切つた人参を次々と鍋に投入して火を付ける。

そして、ミラに頼んでいつもより多目に持つてきてもらったトマト。これの皮を剥き半分に切つて。先程買ったデカイ鍋の底に沢山敷き詰め、こちらも火に掛ける。トマトは驚くほど水分を含んでいる。火に掛けて鍋の中で煮潰していくだけで今回のベースとなる汁物が出来る。

そしてそこに、さつき取り出した玉葱はジャガイモの倍の数をざく切りにして投入。玉葱は加熱すると出る甘味がいい感じにマツチする。

更に更に鶏肉も追加だー！ヒヤッハー！さあ、脳内が盛り上がって参りましたー！！

玉葱には肉を柔らかくする働きがあるので、こちらは肉と一緒に煮詰める。

「今日はいつもより沢山トマトスープ作るのね、鶏肉もいっぱい入ってる・・・。」

そこで不意に声が掛かった。

鍋を買うために勢い良く走り去り、デカイ鍋を抱えて帰ってきた俺を華麗にスルーし、開店前だと言うのに既に定位置の端っこに陣取り、分厚い書物を読み耽っていた常連が初めて声を掛けてきた。

キミ本当に食べ物以外に興味無すぎじゃないですかね？

例え治安が良くても、前の世界とは価値観を含め何もかもが違う世界だ。魔物の存在だけではない、街道を外れると盗賊が襲い掛かってくる事がある。彼等も生きようと必死なのだろうが、襲われる側としては溜まったものではない。

俺は昔とあるメンバーと旅をしていたこともあって、そこそこ強い。だが寝ているときに襲われればお仕舞いだ。いくら身に付けようとしても面倒事が起こったときに即座に反応できる様な、浅い眠りを習慣つけられなかった。

だから戸締りはしっかりとしている。開店になるまで基本的に合鍵を持っている、ミラぐらいしか入れない店内に、転移魔法使って入ってくるのだから。俺にはお嬢ちゃんは止めようがなかった。

朝起きて一人で仕込みをやって居る時に、背後の野菜を手に振り替えたたら、誰もいないはずの部屋の中、しかも自分の背後に突然人が現れる。

初めてそれをやられたとき思わず二度見するわ、変な声出るわで我ながらみつともなかった。

ホラー苦手やねん、辞めてよ。

で、この前の蠍事件の後。うちのトマトスープを飲んだ彼女はコレを大層気に入ったらしく、最初の時は蠍の素上げを3人で完食した後で、三杯くらいおかわりしていた。

あれ以来、最初は1ヶ月に1度くらいの割合で通ってくれていたが、段々と間隔が短くなっていた。

1ヶ月が2週間に、2週間が1週間に、そして今では週に2回くらいの頻度で顔を出すまでになっていた。

「ああ、今回はこれをベースにするんだ。だからトマトスープは出ないぞ」

「!!」

あ、めっちゃ凹んでる。

普段あんまり表情が動かないけど、最近は少しづつ分かるように

なってきた。

まあ、これは露骨に表情に出てるから誰でも分かるだろうが。普段は動かないけど眉根が下がっているし、完全にシヨボーン状態である。

「そんな殺生な・・・。」

「あー、わかったわかった。途中までは作るの一緒だから特別に一杯だけ出してやる」

「ほんとに？マスター、ありがとう」

なんかこつちが悪いことしてるみたいな気がしてきてそう提案する。すると、先程までの残念そうな顔は既に微塵も面影がない。

そして、こいつが感謝の言葉を出すときは決まって相手の目を真っ直ぐに見詰めてくる。

じーっ、とこちらを見つめてくる一対の視線を、いつも気恥ずかしくなつて、こちらから目を逸らしてしまう。

ミラも何度かこの視線に晒されていた事があるらしく、二人で笑いながらそんな話をしたことがある。

ところで、こいつが俺の事をマスターと呼び始めた件だが。

ここに通り詰めている他の常連達からいつの間にか伝播していたらしく、気が付いたらこう呼ばれるようになっていた。

決して餌付けしてご主人様になったとか、俺の趣味だとか、変な契約を結んだとか、俺の趣味だとかではない。

2回繰り返したが、大事な事なので仕方ない。

小さく咳払いをして、料理に意識を戻そうとする。すると読書を辞めた彼女が俺の手元を視ている事に気が付いた。めっちゃ見られている、少しやりづらい。

ジャガイモと人参を煮ている鍋の吹き零れが無いことを確認して、弱火にして。とりあえずトマトスープを作ることにする。

とは言っても、後は味を整えるだけだ。トマトを煮詰めて、その煮汁で玉葱と鶏肉を柔らかくなるまでじっくりコトコト煮る。

手が空いたので、簡単に今手元にあるものでサラダを用意して。ドレッシングを作るのも面白いかもしれない。

よし、やるぞー。

魔法使いのお嬢ちゃんからの視線を一身に、それらの調理に没頭し少し時間がたった頃。

「随分長く煮込むのね」

「あー、本当は1日とかじっくり煮込む方法のいいんだがな」

「それは、本当に長いわね」

「まあ、俺が我慢できないし今日はそろそろ終わりだがな。だが人によつては3日くらい煮込む人もいたな」

そんなに・・・！と絶句している彼女のレアな表情に自然と自分の頬が緩む。作業再開。

味見味見つと。鶏肉の柔らかさを確認。OK。玉葱。OK。塩を入れ少し薄味くらいのスープ。OK。

ブラックペッパー、黒胡椒だね。

これを粗挽きにしたものを鍋の中身に振りかける、塩とのバランスを取りもう一度味見をする。OK。

ほい、完成ー。

煮潰したトマトにコンソメを溶かして、ベーコンを入れればそれだけでそこそこの味が出た転生前と比べると、若干手間は掛かるものの、鶏肉から出た旨味でこれはこれで結構美味しい。

待ちきれないぐらいお腹が減ってるのだろう、妙にそわそわしてる目の前のお客様に少し多めに盛り付けて配膳する。

「さっきも言ったけど、今回はおかわりは無しな？こっから手を加えていくから」

「うん、わかった。」

あと今回は塩気も控えめだから、物足りなかったらこれ足してくれ。と伝えながら、塩と胡椒の入れ物を渡した。

これが後に少し残念なことを引き起こす事になるのだが、それを今

の俺が知るよしもなかった。

◆ 今日のマスターは変だ。

私は今やすっかりお気に入りになった出来立てのトマトスープを啜りながら彼を観察し思う。

いや、今の言葉の使い方では語弊がある。彼は変じゃなかった事がない。そう、いつも変だ。そもそも味が気になるとかで魔物やら毒物を食べる人が普通な訳がないのだが・・・。

しかし、今日はいつにも増して変に見える。なんとというか、楽しそう？

サツ、サツ・・・。

味がちよつと薄い、受け取った容器の中身を少し振り掛ける。

マスターが、細かいオレンジ色の豆をトマトスープの鍋に大量に投入している。聞いてみると、これはとてもよく水分を吸い膨らむ少し特殊でレンズ豆とか言うのだそうだ。

それを一緒に煮て水分を吸った豆を潰してとろみを付けるらしい。それをかき混ぜながら待っている間にもうひとつの鍋を確認しているのが分かる。

ほくほくになったジャガイモ、人参。そしてもう一方の鍋から玉葱、鶏肉を一口サイズに取りだし。

私が見たことのない調味料を使って味見してる。ずるい。

サツ、サツ・・・。

小さい方の鍋の火を消した。どうやら満足いく出来だったらしく、小さく頷いている。

それが終わると、見たことのない色々な種類の種子の様なものが大量に並べられ、それらを次々と潰して粉末状態になるまで細かく牽ひいてゆく。

すると、色々な香りが一気に部屋中に広がってゆく。独特な甘ったるいもの、香ばしいもの、香りはそれほどでもないがとても黄色いも

の、とても赤いもの、黒いもの。

様々な色、様々な香りが充満する。あの黒いものが胡椒だと言うのは手元にあるのと同じなので分かるが、他は何なのだろう？

サツ、サツ、サツ・・・。

ああ、でも、とつても良い。

それらの種子みたいなものを全て混ぜてフライパンで炒め始めた。それまでも十分に良い香りだったものが、炒めることによつて部屋全体に一気に広がった。

サツ、サツ、サツ、サツ・・・。

よい香りだ・・・。

「おい、大丈夫か？それ胡椒使いすぎじゃ・・・」

「ークシュツ!!」

部屋全体に広がった香りを吸っていると手元にあつた胡椒に粘膜を刺激され、暫くの間くしゃみが止まらなかつた。

◇

胡椒にやられたか、あれ結構キツイんだよなあ。

くしゃみが止まらなくなつたお嬢ちゃんは、状態異常回復の魔法を大盤振る舞いして、無理矢理治していた。治るんだ・・・。

すげえな、魔法。つてかあれ状態異常だつたんだ。

まあ、俺の好きだつたゲームにホームシックとか風邪とかの状態異常もあつたけども。ぽえーん。

「マスター、新作はまだ出来ないの？」

「や、もうすぐだよ。さつき炒めて香りを強くしたやつを豆でとろみを付けた鍋に混ぜていつて。別の鍋で煮たジャガイモと人参を入れれば、それでほぼ完成だ。」

さつきの胡椒が沢山使われたスープはしっかりと飲み干した後、まだお腹が減つてるらしいお嬢ちゃんから訪ねられる。

ふっふっふっ、よくぞ聞いてくれました・・・。

「さっきの・・・。スパイスだっけ？」

「そーなんだよ！このスパイス各種手に入れるのにどれだけ苦労したか！まずトマトみたい流通してるかどうかすら分からんし。そのトマトだつて最初の頃真っ赤つかだから毒とか疑われるし、果ては観賞用になつてたこともあつた。それに例え流通しても俺の知つてる名前と違う可能性とかあるし。人参見つけた時にも思つたね、なんだよ湖羅葡こらうつて名前は、どう見ても人参なんですけど!?馬鈴薯ばれいしょはどこかで聞いたことあつたけどさあ。色々苦労したんだよ。具は割りとなんでも合うんだが、やっぱ肉は外せないな！牛でも鳥でもいいね。スープカレーでも良かったんだけど、やっぱりカレーはとろみがあつてなんぼだな。レンズ豆に似た豆類を手に入れるまで待つて良かったわ。そんで出来るのが、カレーつて言う俺の大好物でさ。色んな具材から溶け出した旨味とスパイスの辛味が混じりあつてすげえんだ！一見合わなさそうな具材でも美味かつたりするし、残つたやつを一日置いといて寝かせるとまた味に深みが出て美味いんだよ!!」

ああ、本当にお久しぶりです、カレー様！

トマトをメインに作つたスープこれが既に旨味の塊みたいなもんだ、そこに肉の様な別の旨味の出る他の具材をぶちこんで煮る。これで美味くないわけがないのだ！

今回は名前的にはチキン豆カレーつてところかな。

よしよし、カレーももうすぐ完成だし。今日は俺も食うぞー！

暖かい飯をたっぷり食うんだ！

若干引き気味のお嬢ちゃん居るが、久しぶりの好物を前にした俺のテンションは些かも揺るがない。あんなに露骨な表情初めて見たかも分からんね。

それにしてもスパイスの香りつてのは本当に食欲を刺激するな。

よし、じゃ最後にアレを、用意、し、て・・・。

あ

「マスター、どうしたの？」

俺はとてつもない思い違いをしていた。今更ながらそんな考えに行き当たった。

確かにカレーは完成した、正直今すぐにでも口一杯に頬張りたいたい。だが……。

「足りない……。」

「？」

完成だと言っていたのに何を言ってるんだこの男はみたいな視線が突き刺さる。

俺はこの時、食べる準備をしているときになって初めて、決定的なミスを犯していた事に気が付いた。そう……。

「米が、なかった……。」

「コメ？」

この世界で俺はまだ米を見たことがないのだった。

5話 有名人と自称ライバル

く〇く

ありがとう、妹よ！お前のお陰で鍋が安く買えた！



1つの影が凄まじい速度で走る。

走る、走る、唯唯疾走する。

森を平原を丘を街道を、邪魔な障害物や湿原はまるで空中飛んでいくかの如く跳び駆ける。より速くより無駄のない最適解を模索し、ひたすらに最短距離を駆け抜ける。

こちらから奴の匂いがする。

最初はただの命令だったから戦った。そこに敵対心や執着心など微塵も存在せず、ただ仕事だったから。

そこに疑問も無ければ必要性も感じない、ただ言われたことをやっただけ。

そして、奴と出会い戦い。俺は負けた。

さして努力をしたわけでもない、だが同郷のもの達に負けたことがない。所謂天賦の才だった。最初から出来るわけではないが。見て、経験して、真似して、実践する。それだけで一定以上の成果が得られる様な。そんな能力だった。

そんな俺の初めての敗北。

否、完敗だった。

全力疾走した身体の疲れからではない。

こんなに胸が踊るのはいつ以来だ。

影は一点を目指し走り続ける。



話をしよう。

あれは今から36万年前の事。うん、冗談だ、そんな訳ない。

俺は今24だ。前の世界の分と合わせると初老ぐらいにはなるかも知れんが、今は24だ。そんな天文学的数字の年月を重ねている訳がない。

さて、ここで少しだけ昔話をしよう。

俺の生まれは割りと一般的な農家を中心に成り立っている、王国近くの小さな村だ。

そして、物心付いたときには村の家族同然の村人達と一緒に働いていた。井戸で水を組み、畑を耕し、時間が開いたら明るい内に少しだけ解れた服を裁縫で補修、その間に隣の家に住むアイツの相手をしたりにして、日が沈んだら寝る。

日の出と共に起きて、日の入りと共に1日を終える。実に健康的な生活サイクルである。

『兄さん、また美味しいもの作って！』

俺は生まれ変わる前から料理が好きだった。

働かざる者食うべからずを地で行くこの世界では、働くのが普通だったし、それ以外には当たり前だがネットやゲーム等の暇を潰す為の娯楽も少ない。

それらの農作業が嫌なわけではない。そりやあ自堕落に過ごせればそれが1番楽で素晴らしいのだろう。だが、まあ日々姿が変わってゆく作物の成長を嬉しく思い、自分達で育て上げたそれらを自分の手で更に美味しく生まれ変わらせる。俺の料理を食べて皆の、妹の綻ぶ顔が嬉しい。

元々は趣味程度だった料理が、娯楽が少ない世界で、それは没頭するには充分すぎる程の魅了を持っていた。

『美味しかったよー兄さん！』

『そうかそうか。』

収穫の時期の作物、それらを国に納め、近隣の村々と交換し、余ったものは城下町で売り捌く。そうして手に入れた食糧を調理して皆に振舞い、隣には常に屈託のない笑顔を振り撒く妹同然の存在。その

嬉しそうな表情を見るのは、ただただ楽しかった。頭を撫でてやり複雑な表情を浮かべる妹を見ていて満たされていた。いつしか、この生活を前向きに受け入れていた。

だからかも知れない。

ある時、アイツが俺の料理の手伝いをすると言い出した。それ自体はいつもの日常の一頁だ。いつもはアイツが用意してくれて俺が調理する。

だが、目を離れた隙に包丁に手にとっていた。あまり刃物に触わってほしくはなかったが、これも良い機会だと思い。その日は教えながら適当な大きさに色々なものを切ってもらった。

『痛っ！』

『お、おい。大丈夫か!?!』

『大丈夫だよ、兄さん』

そのときに不注意で妹は指先を切ってしまった。慌てて手当てをしようとする俺と不思議な程落ち着いている張本人。

その傷は小さな女の子が自分で治した。自分で魔法を使って直ってしまったのだった。道具を使つての治療ではなく、魔法を使用しての完治。傷口が逆再生でもしているかの様に戻っていく。

その日、年齢が近くて俺を兄と慕ってくれるアイツには、特別な力があると分かり村はちよつとした騒ぎに見舞われた。

そこからは激動の如く話がトントン拍子で進んでいった。時を同じくして、右手の甲に浮かび上がった紋章の様な痣、恐らく間違いは無いだろうが、念のために王国の鑑定士に見て貰う事になった。だから、なのだろう。

『兄さんのご飯。食べられなくなるなんて嫌あ！』

そう言って泣きついてきた小さな身体を抱き締めながら少女を、勇者を守ると決意して、王国に呼び出され登城する際に、回りからの反対意見を押し退けて同伴者として俺が付き添ったのは。

「なんだお前は！」

「登城を命じられたのは勇者候補だけのはずだ！」
そうして城の前で兵士達に、許可の無いものは通せないと。門前払いされそうになっていた俺達。正確には俺だけだが。

『おー、キミのその能力。興味深いね』

その騒ぎを見付けて寄って来たのは、城に常駐する1人の男。後に聞いた話によると、彼は物質から人材まで、ありとあらゆる物を調べることに関心した有名な鑑定士の人らしい。

その視線の先にいたのは14になったばかりの登城を命令された少女。

『は?』

『え?』

ではなく、俺だった。

「兄さん、お腹空いた！」

「ちよつと空気読んで！」

「マスター、私も。」

「増えた!?!」

◆
腹が減った。

凄まじい速度で平原を移動していた影が突然動きを止めた。慣性を無視する急激な制動。砂や埃を巻き上げる事なくそれは停止した。影の正体の男は回りを見渡し、近くに森を見付けると、木の幹にひよいつ、と飛び乗り腰掛ける。そして携帯用に用意した食糧を取りだし、それにかぶり付く。

別段手の込んだものではないが、酷使した身体に程よい塩気が口内に広がる。

美味い・・・。

だが、補給を済ませ次第すぐに追いかけてあげなければ。

俺は生まれて初めての努力をした。今までなあなあでやってきた戦闘訓練をしつかりと行い。

肉体改造を徹底して、身体を休ませながら知識や戦術を詰め込む。次は、負けない……。

その男は食べている間も、その指に付いた残りを口に含む間も視線は一点だけを睨む様に見詰めていた。

◇

街が有名人をもてなすためのパレードだかを行い、それを一目見るために集まる民衆。昼時を過ぎた頃、俺の店はまだまだ人が溢れ返っていた。

空腹の俺が昼飯を作っては、お客様に提供と言う名の強奪にあう。腹が減った俺にとっては拷問にも等しい行為がまるで無限に続くのである。作った端から奪われて行く、我が昼食。ぐぬぬ……。

うむ、皆の笑顔は嬉しいんだが、なんだこの人数は！

味見しかできねえ!!感謝で俺の腹は脹れない。まあ理由は分かっている……。

「うーん、いい香りー!ねえねえコレ新作!?新作だよね。嗅いだことないよ、コレ!!」

「カレーって言う、らしい……。」

目の前ではしゃぐ妹に、食べ物的事となると二重の意味で食い付きの良い魔法使いが囁し立てる。この初対面の筈の2人の動きは妙に揃っていた。

「あーあー、わかったわかった。だから騒ぐな」

まるで親鳥に餌をねだる雛鳥そのものだな。

目の前に居る魔法使い。そして家族同然の存在。だが、今は勇者として世界を旅している妹。前者は兎も角、勇者。勇者だ。

世界を救うための希望と言う名の重荷を背負わされて、1000ゴ

ルドと言う端金と松の棒を持たされて、長い旅へと送り出される勇者。

うん、ゲームと違って流石に実際にそんなことなかったけど。100ゴールドと松の棒ってゲームの中の王様絶対に頭おかしいよな、せめて兵士と同じ剣やら鎧ぐらい提供してやれや！

そんな世界を旅する勇者。

その凱旋パレードとやらを終わった後、町の立食パーティーを断り。そのまま脇目も振らずに来たお店だ、気にするなと言う方が無理だろう。腹減った。

「わー、食べたことないー！」

「辛かったけど凄く、凄く美味しかったよ。オススメ」

「本当ーさっきまで手伝ってたけどずっと気になってたんだー、私もお腹減ったよ、兄さん。私にもその、かれー？ちようだい！」

店の材料がなくなりかけたところで、外で待っている人達に謝りながら解散してもらい。今は目の前に並んで座っている2人。

なんか一部の貴族様が騒いでいたが閉店です。帰んな。声には出さないが準備中の看板を設置して店を閉める。勇者に名を売りたいんだろが知ったこっちゃやない。こっちは腹が減ってるのだ。

2時間くらい前に勇者である妹が駆け付けた後、それに続いて突撃してきた住民やら貴族様やら護衛の兵士等々。それはそれは沢山のお客様がこの小さいお店にやってきた。

それを見た彼女が、私のせいだからと店の手伝いをしてくれたのだった。勇者が配膳してくれるお店、と言うまた別の噂が広がり更に人が増えたのは誤算だったが。

2人でキッチンを忙しく走り回る姿は在りし日の記憶を呼び起こさせ、俺も勇者も終始笑顔が絶えなかった。

「あむあむ、からっ……。」

お嬢ちゃんはいつも通りである。

◆ 標的がいるであろう町へと到着した。

慌ただしい人の波を掻き分け、奴を探す。

魔法を使つて嗅覚を底上げする、種族ゆえか元々高かった嗅覚を更に上乗せさせる。

そして、確信する。すぐ近くに奴が居ることを……。

騒々しい人波を抜け、少し寂れた通りへ出る。

途中駄々をこねているお偉いさんがいたが気にも止めない。何か歩いたところにその店はあった。

口が歪み、その奥の牙が露出する。

トアに手を掛ける

◇

「たのもー!!」

ドアがバァン!と音を立てて思い切り開かれ、狼をベースにしたような獣の魔人が現れた。

「あつ、もう今日は閉店なんで」

「あつ、失礼しました。」

やっと自分の食事に手を付けようとしていた俺は、手短に伝えるとそのままドアが

「いや、ちよつと待て」

閉まらなかつた。

「なんだよ、こっちは腹減ってるんだよ。それに店の外の準備中の看板が見えなかつたのか?」

食事を目の前に準備して、さあ頬張るぞ。となつた瞬間に面倒事とか辞めて頂きたい。ただでさえ根性悪いのに更に悪くなってひねくれたらどうしてくれる。あんま変わんねえわ。

「勇者はいるよな！」

「ああ、そっち居るわ。お客さんだぞ。勇者様！」

「あつ、はーい！」

相手の話を聞いてみると勇者に用があるらしいので、適当にそっちに話の矛先を向けて食事を再開。なにやら2人でこちらへ視線をチラチラと向けながら話しているが気にしない。味見をしていて出来が上々なのは分かっているが、結局頬張るのを我慢していたカレー。米が無いのが残念だがパンでも充分美味しいからな。

さあ、いただきまー

「やっぱリアンタだったか！」

「・・・。」

再び魔人が話し掛けてくる。面倒臭つ！

「何・・・。」

「2年くらい前にあんた勇者と旅してただろ？」

そんなときにアンタにやられたんだよ、俺は!!」

「ほーん、で？」

我が妹の勇者が俺を見て挙動不審になっているが、今の俺にはそれに構っている暇も心的余裕は皆無だった。

長い付き合いの、それこそ生まれた頃からの縁だ。彼女は知っている。俺が食事中のおふぎげやらが大嫌いな事を。

「リベンジだ！俺と勝負あつ!?!ガアアアアア!!」

掴みかかって来る相手の右腕をいなして、腕を引き込み前へ屈ませる様にバランスを崩させる。

そのまま、横から腕を跨ぎ、相手の身体を倒す。頭を俺の足で固定して、十字に極める。

腕挫十字固ってやつである。

俺は食事中に絶対に許せないことがある、口に物を入れたまま喋ること。騒ぎを起こす、又は起こしそうな行動だ。

「もう少し待ってて下さいねー。具体的には俺の食事が終わるまで」

「あだだだだっ!!分かった!分かりました!!」

この世界は剣や槍の近距離、弓や魔法の遠距離。大きく分けて2つの攻撃手段がある。中には拳を使い技を掛けて無力化するものもあるがそれは少数派だ。

剣よりも更に近付き、尚且つ動く相手に技を掛けなければいけない。そんな行動をして無力化する前に、切りかかった方が単純に早いに簡単だからだ。

この世界の命の価値は低い。

人が人を殺す事になる争い事、その理由は様々だ。

生きる為に仕方がないから、愉悦を求めているから、ただ気に入らなかったから、家族の仇を取る為だとか。枚挙にいとまがない。

だが俺には人は殺せなかった。やらなければやられる。

頭では分かっているつもりだが、どうしても平和ボケした昔の俺の残滓に。価値観が引きずられるのだ。

だからこんな非効率的な徒手空拳を独学で納めている。記憶の中だけにあるサンボやらの間接技、柔道の投げ技、プロレスはただの趣味。

これらを命のやり取りの中で盗賊等の人の形をした相手を無理矢理に実験台に見立てて試行錯誤を繰り返した。

結果、お粗末ながら素手で多少の相手ならば倒せる様になった。

そういや、獣の魔人ってかなり身体能力も洞察力とか反射神経とか人間より高くなかったか?なんで俺如きに捕まってんだこいつ?弱いのか?

まあ、いいか・・・。

「アアアアア!!」

しばらくの間、店内には魔人の叫び声と、慌てている勇者、そして俺の分のカレーにまで無言で手を付ける魔法使い。そんな奇妙な光景が繰り返されていた。

うん、カレーって美味しいよね。妙に食欲が湧くって言うか普段より
沢山食べられるよな。でもそれ俺の皿じゃね？

「って、それ俺の分のカレーエー！！」

技を掛けながら思いつきり叫んだ後、変な力が入ってしまったらしく、鈍い音が部屋に響き渡ったのだった。

6話 昔話と能力

505

人生にはリセットボタンはあるけれど、ゲームオーバーはない。どこまでも続いてゆく。

どんなに悔やんで後悔しても夜が終われば朝になる、冬が終われば春になる。

無責任な終わりを決めるのはいつだって自分以外の他人なのだから



『は？俺に能力？』

『うんうん、今時珍しい能力だねえ。自分自身ではなく、周りのための能力だね。ここ最近ではとんと見なくなったよ。』

城の入り口付近で兵士と言いつ争いをしていた騒ぎを聞き付けて来たと言う、鑑定士の男が俺に話をしてる。

あとから聞いた話だが。この男、この国の王からかなりの信頼を得ている事を理由に城勤めの1人ではあるが、かなりの発言権を持っているらしい。

現に今の今まで俺に対して騒ぎ立てていた2人の兵士は鑑定士の男に挨拶をすると、端に寄り俺の行動に目を光らせ、見張りや警戒を平行させて行いつつも男の話を邪魔しない様に置物の様に直立不動の姿勢を保っている。

『そ、それで。俺は？』

『いいねえ、実にいい。身体は農作業で作られた足腰以外には特質するものはないが、その能力がそれらを補ってくれるだろうね。魔力はほとんど感じ取れないが少しだけなら伸ばせる余地もあるね。それに見た目の年齢とは違う落ち着きもある。まるで見た目の倍以上の年齢を重ねているみたいに見えるね。』

おおっと、なにやら警戒してるみたいだけど敵対行動は辞めてくれ

よ。その兵士だけじゃあなく、僕の直属の護衛が今もキミを見ているからね。』

矢継ぎ早にペラペラと、この初老の男はよく回る舌を持っているみたいだ。見た目以上の落ち着き、と言われて一瞬固まってしまったが。別段バレて不利になることも困ることもない。逆に話したとしても得られる物もないだろう、それに関しては黙秘する。

それに直属の護衛と言う割には姿が見えない。が、これに関してはハツタリでもなんでもないので分かる。

命の奪い合い等したことなどない、そんな俺にも理解出来る程の濃厚な、重圧な気配。殺気、なのだろうか？肌を這いずり回る様な視線を感じる。

『面白いね、実に面白い。最近は良くも悪くも自らの地力を補正して補う能力が多いんだ。』

間違いないその方が良いのだろうけどね、だって回りの状況によって実力が左右されない確定した力なのだから。それに比べるとキミの力はムラがある。だが限界を容易く飛び越えることも、その時の状況によっては可能だろうね。

可能性が広く持てると言うのは幸福だよ。幸福の定義は人其々だけれど。大事なのは認識だと僕は思うね、確定しない事象や能力、実に結構だね。年甲斐もなくワクワクするよ』

それにしても今も身振り手振りを加えて機嫌良く喋り続けているこの男は、未だに俺の能力について詳しいことをわざわざ暁しながら話しているように思う。全く自覚のない自分の能力。しかもこの男の言葉を借りるとそこそこレアな能力らしい……。

こいつを守る力なのかもしれない。

俺と手を繋ぎ、緊張からか指に力が籠っている。血を分けたわけではないが、ずっと一緒だった大事な妹の様な存在。

それを護る事が出来る。その可能性が示された事に密かに歓喜する。そしてこいつを安心させる為に握られた手を握り返し、鑑定士の男にこちらからも一度尋ねる。

『それで？俺の、いえ、私の能力とは結局のところ。なんなのでしょうか？』

直属の護衛と言う彼の言葉と、先程まで俺と一悶着を起こしていた兵士の態度が一変したことで、彼が相当な権力を持つっていると、足りない俺の頭で考え。事を荒立てないよう必死に苦手な言葉遣いで、たどたどしく話を進めようとする。

『ああ、すまない。僕はお喋りが大好きでね。』
知ってる

『それで、キミの能力だけどね』
『はい。』

機嫌良さげに詰め寄ってくる鑑定士の男と、隣で身体を強張らせている妹。手を繋いだ指に力が籠るのは彼女を少しでも安心させようとしているからなのか、俺が自分の高ぶった気持ちを落ち着かせるためなのか。

それとも、その両方なのか。

『守護者。僕はそう呼んでいるよ。』

◇

「なんなんだよ、あんた！」

「なんなんだよって言われても。料理人？」

腹が一杯になった俺は、その場に居合わせた魔法使いのお嬢ちゃんに頼んで、狼をベースにした魔人の男の腕。俺が勢い余って折ってしまった腕の治療してもらった。

ほんの15分くらい前に暴れそうな雰囲気を放っていた男は、先程よりは幾分か落ち着いて見える。

そんな彼と勇者、それに魔法使いのお嬢ちゃんがテーブル席に座

り。俺はテーブル席と調理台を挟んだ対面に座っている。

「マスターって料理人だったの!？」

「おう、お前は俺の何を見てそう思った。正直に言ってみろ。俺は心が海のように広いから許してやるかもしれないぞ、気は短いけどな」
そう、俺は優しいぞ。具体的には瀬戸内海くらい。広いか狭いか微妙なところだ。いやまあ、広くはないか。

言ったところで絶対に通じない駄洒落なので口には出さないが。それにしても、最早常連客と呼んでも差し支え無いほどにウチに入り浸り。そして未だに俺の作った料理を食べながら何を言ってるんだこいつは。

失礼なお嬢ちゃんだ。

「うん、いやマスターのご飯は勿論美味しいけど。前に蠍の魔物の複数体を一人で倒してたし。少なくともさっきの動きは間違いない料理人のそれじゃない。」

まあ、蠍のやつに関しては私は自分の目で見たわけではないけど。と補足の言葉を最後に口の動きを再開した。

若干むず痒い気分になりそうになるが、休まずに食いまくる彼女を見てみるとその気持ちも直ぐ様萎んでゆく。

「うん、兄さんの動き久し振りに見たけど前よりキレがある気がする。どうして?」

「どうして、って言われてもなあ……。」

俺の能力『守護者』

鑑定士のあの男曰く。

『守護者。これはね使いどころが難しいよー。ここのお城に詰めてる兵士や、近衛兵なんかは喉から手が出るほど欲しがらんじやないかな? 能力がもし奪えるもんだったら殺してでも奪い取るんだろうね。ま、僕も能力を奪い取る力。なんて寡聞にして聞かないけどね。』

で、能力の話なんだけど。これは発動条件自体は単純なんだ。自分が護りたいと心の底から思った対象を自分の身の回りに配置することなんだ。

これは他の地力底上げの能力に比肩するのも烏滸がましい程に効果が強いの。けれど、その実難しいよ。護りたいものの対象が場所ならいいけれど、尊敬する人間なら戦闘をする自分。戦争で例えるなら、進軍する時に將軍や王様を前線に連れてこなきゃいけないんだからね。

そしてそれは自分より弱い、守らなければいけない対象を危険な目に合わせることに他ならない。護る為に危険な目に合わせる。なんとも皮肉が効いてるよね？モラルって言葉がー~~~~~。』

云々、まだまだ喋っていた気がするけどカット。

要するに、護衛対象がいる場合のみ俺が強くなる。これだけだ。20文字も掛からない説明にあれだけ付属してあれこれと喋り倒す。あのおっさん喋るの好きすぎだろ。

「能力の守護者が再び発動してるって事なんだろうな。理由は、場所？」

「疑問系なんだ・・・。」

「ああ、お前と一緒に旅してて足手まといになったから、俺はここに残ることを決めたんだからな」

「私は一緒にいたかったけどなあ」

俺は勇者の、その言葉に苦笑いを浮かべながら、テーブル越しに手を伸ばして、その頭を髪をぐしゃぐしゃにかき混ぜる様に撫でる。

不満の声を上げながら笑う勇者を見ながら、その旅から脱退することになった出来事を。思い出していた。



鑑定士の男に出会い俺の能力が判明した。それを理由に王と勇者の謁見に俺も末席ながら参加の赦しが出た。

そうして、鑑定士の男との格式張った謁見の中でのやり取りで妹は勇者である、と鑑定士の男のお墨付きで確定のお触れが出された。

その日、妹の小さな肩に大きなものが。人類の希望と言う重荷を背負わされる事となった。

王様からの餞別として様々な物を譲り受けて、そして妹は勇者として旅をすることが決まった。特別に鍛えていた訳ではないが、能力『守護者』を説得の材料にして俺もこれに同行したのだった。

旅は最初は順調だった。

勇者としての才能を持っている妹と、それを護る事が出来る存在の二人旅。一言で言うとなんの能力。守護者はとんでもないポテンシャルを誇っていた。

そこらの魔物を、手練れの盗賊を、一瞬で無力化させる事が可能な力が手に入った。

そして勇者としての妹の成長速度もまた、とてつもないものだった。魔法による回復、攻撃。そして技術は付け焼き刃だが、戦闘を重ねる毎に研ぎ澄まされて行く我流の剣術。

近距離、中距離、遠距離。どこをとつても隙の無い化け物の様な成長を見せる妹。

誤算は彼女の異常すぎる成長速度だった。

最初は小さな違和感だった。いつもの様に敵の攻撃から妹を庇うためにバックラーを構えて、立ちほだかろうとして間に合わなかった。

思うように動かなくなっていく身体に苛立ちを覚え、妹が旅の宿で寝静まったのを確認すると、俺は多くの鍛練を重ねた。

次の日に疲れて身体が動かないのでは、本番で妹の命が守れないのでは話にならない。無茶な訓練は出来ないが、それでも俺は特訓を続けた。

ある時、魔物の群れとの戦闘中に、その時を狙っての不意討ちの攻撃を受けた事があった。俺達の行動が原因となって滅ぶ事になった

盗賊団の生き残りが仕掛けた、俺達への報復だったらしい。

距離の離れた遠くから射られた弓矢自体は防げた。だがそれは戦いの最中に魔物の攻撃と同時に放たれていたものだ。俺は矢は防げたが、その代償をすぐに払うことになった。

魔物の牙による攻撃を腹にモロに喰らうと言う代償を。

ズブズブと俺の腹に沈んで行く鋭利な牙。薄れ行く意識を必死に歯を食い縛り留める。これで出血した血が戻るわけもなく。妹の驚愕した声が俺の耳に響く。

『あ、これ。死ぬな』

まるで他人事かのように脳裏に浮かんだ言葉。

俺に噛みついていて魔物の口に両手を割り込ませる。

手に、指に、牙が食い込むが知ったことではない。力任せに口を抉じ開け。そのまま空中に放り投げる。空中にいると言うことは翼でもない限り回避は出来ない。

宙を舞う魔物に一息で距離を詰めて、その頭を蹴り飛ばす、文字通り魔物の1体の頭を吹き飛ばし絶命させた。

その行動を最後に俺の意識は、視界の暗転と共に闇へと沈んでいった。

そして、次に目を覚ました俺が最初に見たのはボロボロと両目に大粒の涙を貯め、泣きながらも必死に治療魔法を使う妹と。

魔物と盗賊。もはやどれがどの部位か、人間かモンスターか判別出来ないほどバラバラにされたパーツと血の海だった。

目の覚めた俺を確認した妹は、俺の胸に顔を埋めて大声で泣きじゃくった。

いくら勇者と。特別な存在だと持て囃されても。

例え、並の兵士ではもはや敵わなくなったとしても。

例え、この惨状を作ったのが彼女だとしても。

それでも

彼女は子供だ。

まだまだ幼ない子供だ。

大事な、大事な妹が突然背負うことになってしまった重荷を、一緒に背負う為に。

危機から護る為に同行した俺は、周囲を見渡してから、妹を強く抱き締める。

いつの間にか

護って助ける側から

護られる側になっていた事を

薄々とは自覚していた事実を

実感を持つて確信したのだった

そして、その時の俺には。

弱くなってしまった俺には。

勇者が泣き止むまで抱き締める事しか。

そんなことしか出来ないのだった。



「まあ、仕方ないだろう？」

途中で放り投げたみたいですまないとは思っているが、お前一人でなんとかこなっているんだろう？」

俺が付いていっても、もう助けてやれないしな。

過去の苦い記憶を振り払う様にそう呟いて勇者の頭を撫でる。もう成人したんだから辞めて、と本気で振り払うことはせずに軽い抵抗と共に言われるが知ったこっちゃやない、そのまま撫で回す。

「あん？じゃあ、お前さんはもう戦えないって事なのか？」

「うーん、まあ。そう、なるな。」

「マジかよ……。」

「御馳走様でした。」

勇者の頭を撫でながら、訪ねられた質問に憶測が混じっているが、その旨を伝える。

意気消沈した魔人の男と、そんな話をしているとやつと満足した魔法使いのお嬢ちゃんが食器から手を離れた。

食い過ぎだろ……。なんでそんなに喰えるんだよ、もしかしたら体積上回ってんじゃない？

なんて冗談半分で聞いてみると、お嬢ちゃんからとんでもない答えが飛んでくる。

「ああ、うん。この前の新しく出来た身体の構造をいじくる魔法あるでしょう？それを使って食い溜め出来る様にしたの」

「へえー……。」

「はあ!？」

なんだそりゃ？少しだけ話を聞いてみる、専門的な話とかは良く理解はできなかったし、まだ容量は少ないらしいが、それでも凄い魔法なんじゃね？それ？

人間が寝溜めと食い溜め出来る様になったら最強なんじゃね？とか昔思っていたが、食い溜め出来るのか。

と、とりとめもない話を続けていると。俺の撫で回す手から逃げ出した勇者が残念そうに、だがハッキリと口にしたのだった。

「兄さんが戦えるんなら、また旅に同行して貰いたかったんだけどなあ……。1人じゃ辛いよ」

「は？お前が手子摺る案件でもあったのか？」

「ううん、ただ寂しくて、ね」

美味しいご飯も食べられるし。そんな言葉と共に、どこか我慢したかの様な苦笑いを浮かべる勇者。俺が子供の頃から知っている天真爛漫な彼女の、見知らぬ表情。それを前に言葉が詰まる。

なんて言っているのか分からない。

「やっぱり納得できねえ！」

そんなしんみりした空気を破ったのは、動かないことに定評があるお嬢ちゃん。

ではない。そんな事あるわけがない。

視界の端にいる彼女は既に読書に戻っている。本当にマイペースな奴だ。

「アンタさつきはすげえ動きしてたじゃねえか！」

それがこの場所限定だっつーんなら、ここで俺と立ち合いやがれ!!」

随分と無茶苦茶な事を言い出す男だ。

ここは俺の仕事場件自宅だ。1人で切り盛りしている、それほど大きくない。むしろ狭い店内。

ここで決闘しろだなんて、言われても返答に困る。

俺の誇りを取り戻すには、云々言われても。そんなこと俺の知ったこつちやない。

大体俺に彼との決闘を受けるメリットがない。

疲れるし、店で暴れたくないし、戦闘にはブランクがあるし、そもそも戦闘の勘を取り戻したところで。それはもう俺には必要のないものだ。

それに疲れるし、うん。やっぱりデメリットしかないな。

「だったら戦ってあげればいいじゃない？」

なんだったら私が全部直してあげるからさ。あ、勿論報酬はいらないよ」

「ちよ、ちよっとー！」

と、読書を辞めずに煽り立てるそんな一言が届く。また無償で働くって言うのか、コイツは。相変わらず食欲以外には無頓着な変な奴である。

「よし。これで半数が納得したぜ！」

「さあ、俺と戦え!!」

半数って言っても4人のうち2人じゃん、血の気の多いやつだ。勇者はどうしていいか分からないみたいにお口お口してるし、魔法使いのお嬢ちゃんは楽しそうにこちらを見ている。

「でもなあ……。俺にメリットがないし」

「じゃあ、メリットがあればいいんだな!？」

「ここは飯を食うところで、アンタは自称料理人。ここまではいいよな?」

「失礼な奴だな。自称じゃない、歴とした料理人だ。」

「え?」

いや、そこに首を突っ込むなよ。それはもういいから

「で、俺のメリットって何よ? 自慢じゃないが簡単には動かんぞ俺は」
「ああ、俺に勝ったら。俺の故郷、森の奥深くにある集落。そこでしか収穫されない特別な作物を格安で卸してやるよ。」

「自慢じゃないが美味いぜ!」

「ほお?」

それはいいな、実にいい!

小さな声でチョロイとか聞こえた気がする。気のせいだろう、うん。

「良い目付きになったな。じゃ今手元にそれを握って携帯食料にしたものを持つているから見せてやるよ」

そうして彼が腰に括り付けたバックから取り出したものを見て、俺は一瞬でそれに釘付けになった。

彼が俺の前の調理台へと、それを置く。

「に、兄さん? 眼が怖いよ?」

「マスター?」

「これはな。うちの故郷では握りって呼ばれてる」
それはどう見ても、おにぎり。
米だった。

7話 side勇者

505

1人に・・・。

独りにしないで・・・！

◇

「また、あの夢だ・・・。」

落ち着かない、僅かに乱れたソレを深呼吸を繰り返して平時の物へと戻そうと勤める。

いつもならこの夢を見てしまった時は落ち着くのに暫く掛かるのだが。今日は驚くほどすぐに回復した。

理由はすぐに思い当たった。深呼吸を繰り返し、嗅覚に訴える懐かしい匂い。少し前まで当たり前の日常みたいに享受していた平和な時間と、この温もり。それに身を寄せる。

同じ部屋で良いって言ったのに、わざわざ別に用意された隣の部屋。夜の深まったのを確認してから、部屋を抜け出して兄さんの部屋に忍び込んだ。

例えば、頼んだとしても少し困ったみたいに苦笑いを浮かべながらも拒否されないのは分かっている。兄さんは優しいから。

だけど、回りに他の人達も居たから公然と頼むのは辞めておいた。ベッドに潜り込み、兄さんの身体に自分の身体を寄せる。何度も私を守ってくれた腕に自分の腕を絡ませ抱き付く。

「にしても、全然驚かないんだもんなあ」

自分の髪を。肩口までの長さの白髪を一房摘まんで顔の前に持つてくる。年齢を重ねたり心労が祟った結果ではなく、ある時期を境に色素が抜ける様に白くなっていた髪の色。

勇者は神様か女神様。その国々、または宗教によって言い回しが変わってくるが、それらの全てにおいて共通しているのは、それら遙か

上位の存在から、人間の味方だと遣わされている事。

勇者は人類の味方であり、ある1個の権力、そして権威によって行
使されるモノでは決してない。

その表れなのか。何者にも染まっていけないし染まる事があつては
ならない。勇者の物語の象徴的な言い伝えの1つとして。

蒲公英の綿。或いは、雪化粧の表面の輝きの様な白い

どこまでも透き通る綺麗な白髪だと言われている。

家族の様な村の皆と1日の仕事を終えて、道具を片付け帰宅する。
その折に見せる夕暮れにも似た緋色の髪。兄さんが好きだと言つて
くれた私の髪は、もう、ない。

能力を失い、ここに残ると言つた兄さん。

凄く、凄く悩んだのだろう。心底辛そうな表情で、でもそれを少し
でも悟られないようにと。目と顔を伏せ、俺はもうお前を助けられな
い、と。ハッキリとそう言われた。

鈍器で頭を殴られた様な。否、それ以上の衝撃が私を襲つた。で
も、兄さんの辛そうな、悲しそうな顔を見ていたくなくて。

孤独を嘆く、自分の心の中の叫びから必死に目を背け指を固く握り
締めて、それを了承した。

先に結論から言うと、旅。

兄さんが抜けた後の戦闘、それ自体は問題がなかった。2人から1
人になったことで敵の狙いが集中した事に、その捌き方に慣れるの
に時間は掛かったが。

私の成長速度はそれを解決し、悲しいことに大きな問題にはならな
かった。

兄が私と別れることになった、決して忘れられないあの日の戦闘
を、大好きな人の体温が失われ徐々に冷たくなっていく恐怖を思い出
す。

今、目の前にある温かい身体に安堵しながら。本当はすぐにでも忘
れたい記憶を、脳裏にこびりついたアレを私は反芻するのだった。

◆
「ぐあッ!？」

私の目の前で浅くだが食い破られたかに見える腹部。そこから流れ出る真つ赤な鮮血。最後の気力を振り絞ったであろう攻撃。倒れる身体。そこを中心に地面に拡がる血溜り。

時間を追う毎に拡がる赤い、紅い色。命その物が流れ出ているかのような錯覚。

その時の、その後の記憶は酷く曖昧なものだった。自分が自分ではなくなった様な感覚。泣き叫ぶ事ではか異常を報せられない、小さな赤ん坊みたいに喚き散らし、だがそれとは反比例して研ぎ澄まされていく神経。

魔物も、隠れていた盗賊も、血の臭いを嗅ぎ付けた新たな魔物も、兄の衰弱してゆく身体も。その全てが手に取るように分かった。

次に意識がハッキリと覚醒した時。

その時には両手が、全身の至るところが帰り血によつて汚れた私と、気を失った兄以外には、生きているモノがなくなってからだった。

拡大された意識の下、兄が生きているのは理解できたが、同時にこのままでは長くない事も解った。

すぐに横たわる体に駆け寄り治療の魔法を使うが、傷が塞がるよりも失血死するほうが早いだろう。焦る気持ちとは裏腹に、驚くほど冷静に現状を読み取る。

「ッ!？」

唐突に今まで使ったことのないレベルの。存在も知らない治療魔法の使い方が頭の中に乱暴に投げ込まれる様に閃いた。乾いた大地に雨が染み込むみたいに、新しい魔法を急速で理解し使える様になった。

今までも似たような事が何度かあった。子供の頃の指を治す程度の簡単なもの、兄さんと旅を始めてからも雷による攻撃等。指折り数

えられる程度だが確かにあった。唐突な事に気味悪く感じ、相談したこともある。

曰く、勇者とはそう言う者、らしい。納得出来る様な出来ない様な雑な説明だけれど。だが、今回ばかりはこの奇妙な事象に感謝した。

最初は傷付いた身体を見たくなかった。だが既にそうも言っていない状況になっている。コレは本来なら私が負うべき傷だったのだ……。

服を破り、破損した部位を露出させ、間髪いれずに新しい治療術を行使する。

皮膚が少し切れたものとは勝手が違う大きな傷口。その裂傷から自分の大事な人の生命。それぞれの物が流れ出ていくみたいで。酷い吐き気を催した。それを堪えながらどくんどくと溢れる命を、血液を両手で抑えると言う単純だが確実な止血を行い、魔法を持続させる。

真っ赤な血溜りは元には戻らなかったけど、魔法によつての治療には血液の生産を増す作用が少なからずある。あとは、あとは目を覚ましてさえくれれば。

「兄さん！兄さん起きて!!」

普段であれば、その寝穢い兄に微笑ましい気持ちにもなるのだが、今は状況が違った。ハラハラする、焦慮し、苛々する。焦燥感に苛まれ、頭の中がぐるぐると考えが纏まらず自分がどうしていいか解らなくなってくる。

一向に眼を覚まさない事に気持ちばかりが先行してどんどん取り乱していく。身体を揺さぶり大きな声で呼び掛ける。

起きて、お願いだから、独りにしないで。1人は寂しいよ。辛いよ。だから私を、置いて逝かないで……!

どれだけの時間をそうしていたのかわからない、ここは魔物の棲息地で、先程まで争いが起きていた。血の臭いは充満し、いつまた襲われても不思議ではない危険な場所だ。

魔物が、盗賊が、肉食の獣が、いつ襲い掛かってくるかわからない。大声で何度も呼び掛ける行為は、兄に声を届けるのとは別に。間違いなくその危険を呼び寄せているの事に他ならないのだから。

私が生き延びるだけなら、見捨てるのが最善の策だ。次点で声を殺して隣で回復魔法を使いながら大人しく待ち続ける事のだが、先程の様子。

血を流し動く事も億劫であろう身体を無理矢理に動かし、倒れるその瞬間まで私の為だけに戦い。

あんなになつてまで戦闘を続けて、そして、まるで事切れる様に前のめりに倒れた姿を見てしまった私には。

そうでなくとも小さい頃からずっと一緒だった。優しい兄さんを見捨てることなんて、絶対に出来ない。

どれだけの時間をそうしていたのか、時の感覚が無くなっていった私にはわからなかったけれども。日が沈み初め、私の髪の毛と同じ緋色の空。夕焼けで空が彩られる頃に、兄さんは目覚めた。

目を覚ました兄さんは泣き付いた私をただ黙って抱き締めてくれた。その両手は、力があまり籠って無くて。

失血死寸前まで流血したことが原因ではなく。

能力を発揮出来なくなっていた事が招いた弱体化の結果なのだろう。

私の髪が白くなり始めたのは
恐らくこの日が最初……。

◇

決して忘れられないけれども、憂鬱な気持ちを頭を左右に振る事で意識を切り替える。あんなことはもう起こらない。

大丈夫なのだから……。

「ぎゅー」

抱きついてみる。遠くの酒場で騒いでる声が微かに聞こえる程度の静かな夜。兄さんの胸に耳を当てて規則正しく、そして力強く鳴る心音に、安堵する。

あの時みたいなの弱々しい音ではない。確かに生きている証。

「どした？寝れないのか？」

「うん」

そんなことを続けていたら、起こしてしまったらしい兄に話し掛けられる。寝惚けているのか、旅に出た辺りからやつてくれなくなつた。私の頭ごとすっぽりと胸元に収容する抱かれ方。

頭に手が添えられて髪を手櫛で梳かれる。もう片方の腕は腰に回され、更に抱き寄せられる。胸元に耳を当てていた時みたいにハッキリとは聞こえないが、抱き締められて触れた事で。全身で鼓動が感じ取れる。これをやられると私は、昔から何も言えなくなってしまうのだった。

「ほふう……。」

あつ、と言う間に霧散した私の緊張感と孤独感。夢心地でされるがままの私は弛みきつた、胸の中が空っぽになるような深い深い溜め息が、無意識の内に漏れ出る。

「なんか、あつたか？」

まるで耳元で囁かれたみたい。そんな優しい声色で、先程とは別の角度から。同じ意味合いの質問が投げ掛けられる。

「兄さんはさ……。」

「うん」

「私の白くなったコレ。何も聞かないけどさ、どう思った？」

「どう思うも何も、お前はお前だろ？俺の大事な妹、それは何があつても変わらないよ」

連絡もせずに店に押し掛けて2年ぶりに突然現れた私の事を見て、兄さんは一瞬分からなかったみたいだけど。眼を合わせて数瞬もした時には、私の事を思い出してくれた。笑顔で迎え入れてくれて、とても嬉しかった……。

実際にはまだ見たことがないけれど、弓と魔法の扱いに長けている、エルフと呼ばれる種族。一般的に森の奥深くに集落を持ち閉鎖的な彼等の中に稀に白髪の者が生まれると言う。

そんな珍しい白髪に変わった私の事を。

まるで子供の時に戻ったんじゃないかと、錯覚するぐらいに、髪の毛をくしゃくしゃにするのが目的に思える、少し強引な頭を撫で方に。

そして、昔と全く変わらない扱い。

それが、堪らなく嬉しかった。

「ただ、そうだな……。」

「？」

さっきので、終わりではなかったみたいだ。

「髪もそうだけど、凄く、綺麗になったな。」

「っ……。」

息を飲む、身体が抱き締められているので既に動けないのだが、更に精神的にも混乱の渦に吞まれ、完全に硬直する。頬が紅潮するのが自分でも分かる。

「に、兄さんだって……。」

「……。」

「皆みたいに私が勇者だからって、態度変えたりしないところとか、誰にでも公平なところが、その、あの。あー、うん。ん？あれ、兄さん？」

「うー。」

あれだけ、あんなに私の心を掻き乱した張本人は話の途中だと言う

のに、既に夢の世界へと旅立っているらしかった。

恥ずかしさと嬉しさが混ざりあった。自分でもよくわからない気持ち、そんな私が何を言おうとしたのか、それはやっぱり、よくわからないけれど。

だけど、これはきつと心に留めておいた方がいいのだろう。

今回はここに来る必要があったから、来たのだ。私の旅はまだ終わっていない。またすぐにここを発たなければいけない。

その決意が揺らぐ様な事は勇者として許されない。

私の使命は、そんな不安定な状態で挑んではいけない。

私は死ぬわけにはいかないのだから……。

「だけど、勇者としての仕事が。全部終わったら、そのときは……。」
私も素直になろう。そう嘯き、ガツチリと抱き止められた身体を
振って、腕の中で私も兄さんの背と首に腕を回す。

今日はよく眠れそうだ……。

8話 自責と新たな火種

く〇く

後悔するという行為は心の休憩と昔聞いた事がある

それをしている間は過去の自分を自責している、その間だけは。自分を正当化出来るから、らしい

◇

チチチチチ。

部屋の窓の近くで何かを話している。

そんな勘違いを引き起こすぐらい、耳にこびりつく。妙にうるさい複数の鳴き声。

昼過ぎに買い出しやらで出掛け、道端で見掛ける鳥達はあんなに静かだと言うのに、朝はなぜこんなにも元気なのか・・・。

もしくは記憶に残ってないだけで、昼は昼で好き勝手囀っているのかもしれないが。

そんな鳥達の鳴き声で意識が浮上する。

1番最初に視界に飛び込んできたものは、勇者となってしまった、幼馴染の寝顔。心配事が何も無いと言うかの如く脱力しきった表情。わざわざ隣の部屋を用意したって言うのに、いつの間に潜り込んで来たのか俺の腕の中で呑気に、そして規則正しい小さな寝息を立てている。

「ふあああ。小さい身体だなあ」

欠伸と溜息が混じり合った息を吐き。一緒に寝ている姿を。2年程の空白で随分と女らしく成長した肢体を、顔を改めて観察し、呟く言葉。それは誰も見ている人が居ないからからこそ漏れでた言葉だった。

俺もコイツも、お互いが子供で。俺が少しだけお兄さんで。色んな世話を焼いてやって、尊敬されたくて様々な事に挑んだりもしていた。

元々好きだった料理もここまで俺を虜にし、今では生き甲斐にまでなつて、しまいには小さいながらも店を持つまでになった。

これだって元を正せばコイツの影響が大きい。

気紛れで作った俺の料理を食べて、眼を輝かせながら満面の笑みを浮かべたのを見て。もっともっと色んな表情を、笑顔を引き出すのが、堪らなく楽しくって。

「ふふっ、身体は成長したけど。中身は昔のまんまなんだもんな。」

久し振りに会った妹の顔を、白くなつてしまった髪を眺め、遠い過去を、昔の事を思い出していた。

生まれ変わる前までは、無神論者が大半で。それが普通で当たり前だった。逆に宗教と言うと過激な集団と言う括りで纏められる。そんな世界。

例に漏れず、俺も冷めていた。自分でもそう思う。

ニュースで、新聞で、ネットで、ラジオで、噂で、同僚との雑談であらゆる媒介から伝えられる人の死。それが見知った人でなければ何も感じなかった。

そう思い込んで誤魔化していたのに……。

いざ実際に親戚や、会社の同僚が突然不幸に見舞われてどうだった？

俺は本気で悲しめなかった。葬列に参加し久しぶりに会った従兄弟達が。毎日顔を付き合わせる同僚達が悲しんで、そして泣いているのを慰めながら、普段と変わらない心情の俺が、そこにはいた。

「だからこそ、こいつだけは……。」

世界は違うけれど、もう一度やり直す事になった2度目の人生。

後になって守護者とか言うレアな能力がある事がわかったものの。硝子の作り方なんか知ってる訳がないし、農業の知識だってない、内政なんて理解できるわけがない。

特別な知識を持たない平々凡々な1人の男。

そんな俺が生まれ変わったのは王国の近くにある小さな村。ここでは村の全員の距離が前世では考えられないほど近かった。

治安が良い村だとしても簡単に命が奪われる事がある。

災害で作物が無くなれば餓死、病に犯されての病死、疫病を蔓延させない為に王国の兵士に村を丸ごと焼かれる可能性もあるし、ならず者に襲われて理不尽に、そして唐突に殺される可能性もある。

そんな命の価値が軽い世界なのだから、協力が必須の世の中だった。

そんな中、子供なのに精神的には成熟した大人。

俺と言う異物が投げ込まれた。

実際に血が繋がっているのだが、俺自身が前世の親を思い出してしまい。どこか割り切れなくて。両親相手でも、1歩引いて、距離を置き、遠慮してしまった。

言われた事はきちんとやるし、誰にも逆らうこともしなかった。そして子供が子供足らしめているワガママ。俺はそれを言った事がない。

異常に聞き分けの良いだけの。見ようによっては気味の悪く、可愛いげのない子供だったのだろう。

両親相手にできえそれなのだ。

俺が孤立していくのも当たり前前の話だった。

『兄さん、何処行くの？ 私も行く！』

そうして生きて行く中、血は繋がってないが。新しく妹が出来た。

俺の方から避けても、気が付くと何故かいつも俺にベツタリな明るいやつ。

何をするにも一緒に付いて回って来て。誰にでも朗らかな笑顔を見せるこいつを通して、俺は村の皆と少しづつ付き合える様になっていった。

「最後まで・・・。」

本当であれば誰もが親や家族を通して学ぶことになる人との距離感。それを底抜けに明るい性格と周囲の者を笑顔にする事が出来る。

無邪気で血の繋がらないこいつから俺は学んだ。

大事なことを教えてくれた。

心から守ってやりたいと思える。

そんな稀有な存在。

「俺の手で守ってやりたかったんだけどな・・・。」

子供のような正義感を固持し、それを武器にして振り回していた自分が。もう何処にも居ないのだと、改めて思ったが故に、続いて漏れでる言葉。

朝から変に思考に没頭していたら、なんだか気が滅入ってきた。慣れないことはするもんじやない。

未だに寝ている彼女の身体から離れようとして、洋服を握られている事に気付き、笑みが漏れる。

弱々しく握られた俺の服から、彼女の手をそつ、と解いてやり。今度こそ距離を離す。

少しだけ寝惚けたままの頭で、寝間着から着替えを済ませる。今日は諸事情により店を開くのは夜。だから仕事着ではない。動き易さに重点を置いた、普段着だ。

寝ている妹に近付き、起こさないように注意を払いながら頭を軽く撫でる。

妹を、勇者の事を俺が助ける。

もう、その能力は俺にはない。

「すうー」

スイッチを入れる様に気持ちを切り替え、燻る気持ちを割り切つて、もやもやを引つ括めて受け入れ。意図的に1つ大きく息を吸う。

「はああああー……。さて、頑張りますか。」

肺の中身、陰鬱とした気持ち、ふとした弾みで漏れ出そうになる過去の愚痴。それら全てを言葉にはせず、肺の中身を空っぽにする大きな深呼吸で、息と弱音を吐き出す。

そうして2年前の気持ちに改めて踏ん切りを付ける。

もう終わった話だ。そうして新しい目標に眼を向けて、それを見据えて、今の生活とやりがいとを噛み締めて、次へと向き直る。

ここは、俺が俺の為に作った。

誰にも憚ることのない、俺の場所。俺の城だ。

そして、そこに前世の主食が加わるかもしれない。

パンも好きだし、ジャガイモだって大好きだ。

だが米は違う、あれがなければ日本人の1日は始まらない。

加わるかもしれない、ではない。必ずこのメニューに加えて見せる。

そうして、ここを、俺の作った食堂を盛り上げて。

ちよつと変わった常連達が仕事を終えた後や、嫌な事があつた時の息抜き。それを俺の料理とゆつくりできる場所を提供して、その手伝いをしてやるのだ。

そして、いつか旅を終えた妹を迎え入れて、旅の途中で抜けてしまった俺の無力感も、余力も、もやもやも、何もかもを込めて。全力で労つてやる！

そうして、抑えようと意識を向けても抑えられない。

先程の勇者に向けたものとは別物の笑顔を浮かべながら、俺は寢室兼自室から出るのだった。

◇

「店長ー、おはよー!」

「おお、おはよう」

階下へと降りると、既に今日の分の野菜を配達しにきたであろうミラ。

「おはよ。」

いつもの席を占領したお嬢ちゃんが居た。合鍵を持っているならともかく、魔法を使つての不法侵入。

うん、これに関してはまだ諦めた。言つても聞いてくれなさそうだし。これのおかげで助かったこともあるのだから、強く言えなくなつた……。

一ヶ月くらい、だったか？

そのくらい前に見たことない新しい魔物肉を食材として調達してきた事があつた。

で、1人朝飯を食べてたら。その処理をミスったらしく倒れた。そこに何食わぬ顔で転移してくるお嬢ちゃん。いや、魔法使い様。

あの時は本当に助かりました。そして普段と違う慌てた表情が凄くかわいかつたです。はい。そして、回りを見渡して食事の形跡を見つけた後の

『またやってるよ』

的な。特殊な趣味を持つている紳士達なら、反射的にありがたうございます。とか言い出しそうな、そんな冷たい視線に晒されながら治療してもらつた。

ちなみに、俺はそんな趣味は持っていない。

危なかつた……。

まあ、そんなことがあつたので何か不満等を言おうものなら。そこから辺の出来事を持ち出されて黙らせられる。お嬢ちゃん曰く酩酊状態に近い症状だったらしい。肉食つて酩酊つて凄いな話だ……。

治療中に意識が朦朧としたままの俺は、色々と喋つてたらしいし。

『へるみーぷりーず』とか言つてたらしい。

多分『help me please』なのだろう。

この世界の言葉ではなく、何故か俺の口から出た言葉は前世の英語。理由は自分でも分からん。それにしても呂律が回ってなかったからか。hell me とか。

記憶にないとは言え、自分の言葉とのすれ違い、そこから派生した勘違いで死ぬのとか流石に理不尽すぎて勘弁してもらいたい。

好きなように生きて、理不尽に死ぬってレベルじゃねーぞ！意味通じなくて良かった……。

コンコン！

とか、なんとか。ミラとお嬢ちゃんが二人で何かを話してるのを他所に、とりとめもなく色んな事を考えていながら簡単な朝食を作っていたら。

扉からノックする音が聞こえてきた。

「うーい」

あの狼の魔人来るの早くないか？約束は昼だぞ？

あー、でもアイツならノックなんかせずにはドア壊すぐらいの勢いで開けるな。じゃあ誰だ？

カランカラン。

そんな考えを口には出さずに、妹が旅の途中で買ってきてくれたベルを取り付けた扉。それを静かに鳴らしながら少しだけ開けて覗き見てみる。

「おはようなのじゃー！」

右、左と見渡してみるが。誰も見つからない、声は聞こえど姿が見えず。

「悪戯か？」

あまり深く考えずに小声で文句を漏らしつつ、ドアを閉めようとドアノブを掴んだままの手を引くと閉まらなかった。

下に視線を向けると、自分の腰ぐらいの位置にある眼と視線が交

わった。なにやら見たことある様な無いような、紅い髪の毛のちっこい少女が扉を閉められないように、足を扉のへりに引っ掛けてそこにいた。

いや、見た目だけで少女と決めつけるもの早計だし、場合によっては失礼な話になる。

この目の前にいる、一見少女に見えるこの娘は。下半身には鉤爪を持ち、腕に当たる箇所には翼を持つ魔人。

ハーピイ族。

彼等は人に近い身体を持ちながらも、その体軀に不釣り合いな大きな翼で、空を自由に舞うことが出来る種族。

その様な進化をしたからなのだろう。空を飛ぶために、その身体は人間で言うところの12〜14くらいで成長が止まってしまふ。

確かに小さい事には小さいが、ハーピイ達は正直見た目ではよくわからない。合法ロリの可能性がある以上、あからさまなお子様扱いは不味いだろう。

なるべく普通に、普段通りに接する。

「お腹ペコペコなのじゃ、朝食を用意せよ！」

「あー、今日はちよつと用事が出来ちゃって夜までおやすみなんだ。ごめんな」

「えー、やじゃー！」

あ、見た目通り子供だわコイツ。イレギュラー要素は排除しなきゃな。大きな声で抗議する小さな身体を抱き上げて小脇に抱え込む。軽っ！

扉の外へ、呆気に取られてマネキンの様に大人しくなったハーピイの子供を店先に設置。

ドアを閉めて。鍵閉めて。戸締まり、よし！

「おい、2人共。朝飯にすんぞー」

「はーん」

「うん」

そうして何気ない朝食の時間に

「お腹空いたのじゃー！ご飯ご飯ご飯ー！！」
なるわけがなかった。

◇

「空腹な我を鹿十するなど酷いのじゃー！」

あまりにも激しくドアを叩かれるので仕方なくドアを開けると、同時に中に入って来たハーピーは。

今は俺の膝の上で俺の朝飯を食べている。うちは小さい店なので子供用の椅子などないのである、だから身長が足りない彼女にとつて、これはどうしようもない事なのだ。不可抗力である。

俺が仮に幼児性的な特殊な趣味を持つていたとしたら、とても危険な構図だ。大人とは違った薄い臀部、もといお尻の肉……。
ふう、危なかった……。

「大体我を誰だと思ふぎやつ!？」

そんなちみつこの頭に、俺は無言で拳骨を落とす。無論手加減はしている。

「父上にも殴られたことないのに！」

「あー、そうかい。初めての卒業おめでとう、だけど口の中に飯を入れたまま喋るな」

「だつてえ！」

「マスターの言うことは聞かなきゃダメ。」

尚も言い返そうとしてくるちみつこの口元に添える様に指を当てて、お嬢ちゃんが止めてくれた。珍しいこともあるもんだ。

「はい、どーぞ。」

「んん。わかったのじゃ……。」

そして、俺からの打撃の衝撃で落としたフォークを、ミラが洗って綺麗にして手渡してくれている。良くできたコンビネーションだ。

相手に反論させる隙を与えずに、複数の存在で場を進行させて行けば、大概の物事は有耶無耶にできる。

うん、俺も何度かやられている。

効果は身を持って実証済みだ。

そうして、静かになったちみっこ含む4人で朝食を取っている。町の方が朝だと言うのに少々騒がしい。自警団達の声が聞こえる。

まあ、俺には関係ない事だろう。そう当たりを付けて食事を続けていると、妹の目が覚めたらしく。2階から足音が近付いてくる。

「おはよー、兄さん」

「ああ、おはよう。良く寝れたみたいだな」

「お陰様でね」

着るものを用意してなかったのか俺の上着を羽織った姿の妹と軽く挨拶を済ませると。皆も続いて挨拶を返していく。

「おはよーなのじゃー!」

「あれ?町長のところに泊まってた商人さんとこの娘さんじゃん、どしたの?」

「朝から父上達が難しい話してたから抜け出して、町の探検してたのじゃー!」

そして最後に話し掛けたちみっこ妹は知り合いだったらしい。頭を撫でていたり、実に親しげだ。

それにしても、町長のところにお呼ばれになる商人ね。

ふーん。あれ?

それって確か……。物々しい傭兵やらの護衛を引き連れながら、世界各地を自分自身で回ってるって言う相当に力のあって、なおかつ変り者だって言われてるあの豪商人、ですかね?

「なあ、ミラ」

「うん?なあに店長?」

勇者とちみっこが会話しているのを聞きながら

「うちの町長のところにいる商人って、もしかしてあの人の事か？」

「うん、そーだよ。」

あの親バカで有名な。と続けて確認を取ろうとしたところで俺の背後から、狼の魔人とタメを張るくらい大きな音と共に扉が開かれた。

らめえ、わらしのおみしえのドア壊れひやうのほお。

「勇者様！勇者様はいますか!?!」

「お手を煩わせて申し訳ありませんが、緊急の案件が」

「お嬢様が、お嬢様が行方知らずなのです!」

俺は振り向かない、だって呼ばれているのは勇者様なのだから。そんな俺の僅かな抵抗は、やはり無駄になった。

店の中に入り、各自勇者様、勇者様と、話し掛けながらこちらに近付いてくる複数の足音。膝の上に乗って笑顔のちみっこ。固まる自警団と商人の私兵達。

走り回るのに邪魔になりにくい革を鞣して作られたレザーアーマー、木製の非常に軽い防具、各自バラバラの装備で見た目に纏まりは無いが。

その動きは正確で一糸乱れぬ、良く訓練された動きだった。場が動き出したと思ったら、一瞬でちみっこを俺から引き剥がし、抜刀し俺を取り囲んだ。

俺は両手を上げ、お手上げのポーズを取る。

食事を終えたとは言え、うちのお店でこういう事は本当に辞めて頂きたい。

さつき飯を食ってたときくらい気楽な日常を謳歌したいものだ。

9話 大乱闘と事後処理

505

人間関係と食べ物は何似ている。

とりわけセンスが必要なところが酷似していると思う。

センスが乏しいと人は、その関係には悩まされ続ける。相手側の思惑によって嫌が応にも捲き込まれることが少なからずあるから。

◇

「どうしてこうなったんだろうなあ」

床を、テーブルを、椅子を、調理台を、人を、その身を守る鎧も。そのいずれもが赤い液体で、その所々が染まり汚れていた。

そして、その目の前に立つ1人の男の両手もまた、紅く彩られている。

「・・・」

「うわぁ・・・」

彼の後ろには、普段は移動の為の小さなステッキしか持ち歩かないハズの常連の姿。しかし普段の彼女を知っている者ならば、その姿は平時のときと違うのが一目で理解できる。

先端に大人の男性の握り拳大の大きな蒼い宝石の嵌め込まれた、その小さめの身の丈を越える立派な杖を持った。魔法使いの少女と。

寝間着の代わりなのか、男物の服を羽織った。民衆から兵士等の様々な人から勇者と呼ばれている凛々しい女性の緩い普段の姿。そんな2人。

「あわわわわわ」

「あはは・・・」

前に視線を向けると、各自其々の纏まりの無い、物々しい武装をした屈強な男達が幾人も折り重なるように倒れ伏し粗雑な山になっている。頂点には狼の魔人が倒れ伏している。

その積み上げられた山の反対側にもう2人。腰が抜けて自分で立てなくなつたのか、床にぺたんと座り込み驚きと恐怖の感情が見え隠れしているハーピーのチビと、その頭を撫でながら慰めているラミアのミラ。

これらの状況を説明するには、少し時間を遡ることになる。

◇

「お嬢様！御無事でしたか!？」

「き、貴様あー！」

「動くなー！」

口々にいろんな事を喚きながら素早い動きで俺を取り囲み、次々と抜刀ないし戦闘体制に移っていく男達。お手上げのポーズを続ける俺から保護されるちみっこ。

なにもしてないです、はい。俺の膝上に座ってたのだから、お子様の椅子がなかった為の苦肉の策だ。普通の椅子に座らせると食事が覚束無いつぼいのだから仕方ない。決して小さい娘っ子の感触を楽しんでた訳ではない。

うん、本当に。

それに一斉に喋られても困る。聖徳太子じゃないのだから数々の言葉を同時に投げつけられても聞き取れない。会話はキャッチボールが基本だと言うのに、これではまるでサンドバッグだ。まあサンドバッグだって普通は個人用であって、断じて多人数で使うものではない。

「そのちみっこの腹が減ってたみたいだから飯を作ってやっただけだよ、変な言い掛かりは辞めてくれ」
「・・・。」

あ、ダメだこれ。全く聞く耳持っていないわ。

さては俺の事ロリコンか何かかと勘違いしてるな。視線が険しいし、武器握る手に力籠ってるみたいだ。これは俺が何か言った所で警

戒を解いてくれなさそうだ。

それならば。ここはこの町の流儀に則って、その場に居合わせた第三者に説明をしてもらい・・・あれ？

なんか魔法使いのお嬢ちゃんが出て見える。半透明な彼女をしげしげと監察してみると、右手には指揮棒の様な小さいステッキを持っているのが分かる。

あ、なるほど。いつもの転移魔法かー。じゃねえ！アイツ逃げやがった!!

1番説得力がありそうな、うちの勇者様は戦闘時の反射神経とかをどこかに置き去りにしているのか、日常生活は緩いし咄嗟の出来事に弱い。

ついでに朝もすごぶる弱い。ちなみに低血圧と朝は何も関係ないらしいな。

「うおあつ!?!」

「ちよつと！店長に何するのよ!」

と、この状況をどうやって打破しようかと考えていた俺の視界が急に横へと吹っ飛んだ。その吹き飛んだ勢いのままの壁に追突する事はなかったのだが滞空時間がいやに長い。未だに俺の足が床に着かない。

うん、改めて身動きの取れなくなった自分の身体を見下ろし、状況を理解する。ミラの下半身でぐるぐる巻きにされて吊り下げられている。

どうやら下半身の蛇の部分を延ばしたミラが、包囲されてる俺の事をそこから引摺り出した事で抜け出せたらしい。

状況的に動けない状態から、物理的に動けない状態になったぞ、やったね。

「お嬢様に危害を加える可能性があれば、それがどんな些細なことであれ。我々は見逃すことは出来ん!」

「ここは食堂で、この人はこの店長！そして私はこの仕入れのお得意様！だから大丈夫！」

「し、しかし……。」

尻尾で捕縛した俺をプラプラと揺らし。ムンツ、豊満な胸を張って説得力があるんだかないんだか、よく分からない理論を展開しているミラ。

しかし、あまりにも自信たっぷり言い切るもんだからなのか、男達はその勢いと場の雰囲気呑まれ、言い淀み始めた。

それでいいのか自警団。

「食事で危害つてことは、毒が心配？」

「おあつ!!？」

突然男達の背後から肩に手をポン、と乗せながら魔法使いのお嬢ちゃんが声を掛ける。それに飛び上がりんばかりの驚きの表情で、叫び声にも似た声を上げる最後尾の男。

「おお、うむ、ま……。そう、だな」

彼が驚愕により不安定な状態になったところに、間髪いれずに投げかけられた質問。それに身体はそのままに、視線だけを向けて答える。

命のやり取りから、小さな争いを幾度も経験してきた手練達だからこそだろう。気配を全く感じさせず突然死角に滑り込む存在。その登場によって彼等の勢いは更に削がれたのが見てとれる。

あー、お嬢ちゃん面倒事避けるために、俺の事見捨てて逃げたのかと思つてたわ。疑つてごめんよ。

改めてその姿を見ると服装は変わっていないが、その手に持つ物がいつもと違っていた。身長が低めのお嬢ちゃんの背丈よりも1回りは大きいサイズ。大きな宝石まで埋め込まれている物々しい杖だ。

魔法関連の知識の乏しい俺でも、一目で高価な物だと、何かしらの特別な効果を持つ一品と理解できる。あれを回収して来たらしい。

「あ、それなら絶対大丈夫だよ！兄さんは食べ物や雑に扱ったりすると本気で怒るから。異物混入なんてありえないよ。」

「は？え？」

「はい？今。兄、と仰ったんですか？」

勇者と言う大層な肩書きを持ちながらも、咄嗟の機転が効かずリリースし、場を静観するしかなかった我が妹。絶好の機会を見つけての援護口撃。

こうかは ばつぐんだ!!

流石は有名人である。その絶対的な知名度で下手な権力者よりも容易に、また絶大な効果を持つての民衆の扇動もお手の物。

民衆に強く、権力者にも強く、そしてもちろん魔物にも強い、だが朝には滅法弱い。それが俺の知る勇者。

「隊長殿よ、我はただ朝食を馳走になっただけじゃ。

全く。お主と父上の宿痾にも困ったもんじやの！」

「う、はい……。」

「副長も副長じゃ！こんなときこそお主が隊長を止めんでどうする。」

「は！すみません、お嬢」

ちみつこの言葉を最後に緊張していた場が緩み始める。

ミラの説得で困惑し、お嬢ちゃんの言葉と行動で勢いを削ぎ落とすし、妹の言葉で決まった。ちみつこのは死体蹴り。マナー違反やね。

ナイスコンビネーション！

さて、と事態が終息に向かった事によって俺も別の事に思考が向き始める。そう、今現在、俺の身体は割りと洒落にならない状態である。節々がミシミシと音を起している気がする。普通に痛いですが、はい。とある騒動のせいで力では勝てないことを身をもって理解しているので、無駄な労力を使って暴れる様な真似はしない。が、そろそろ本気で息苦しくなってきた。ミラの蛇の部分をポンポンと軽く叩き解放を促す

「あつ、店長ごめん。痛かったよね？」

「大丈夫だ、ありがとう」

それで察してくれたらしく、拘束を解いて地面に降ろして貰った。助けてもらった事は事実なので頭を撫でてお礼を言うと、それを皮切りに抜刀し戦闘態勢の男達から緊張感が抜けていき、武装を解除してゆく。

「しっ！失礼しました!!」

「勇者殿の兄とは露知らず数々の無礼を！」

「申し訳ありませんでした！」

「そう畏まらずに。私自身はただの一般人ですから。ああ、もし良かったらこちらをどうぞ。あそこの魔法使いのお嬢ちゃんが持ってきてくれた物を使っただんですが。馬鈴薯をスライスして油で揚げたんですよ」

慌てながら口々に謝罪の言葉が飛び交う中、それをやんわりと制止。俺の出した料理を皆でパクつく。

これは美味しいですなあ、なんて言葉を聞きながら俺もパリパリに揚がったチップスモドキを味わう。

うん、平和な食堂である。

そんな騒動が終わりかけた事で、俺も気が抜けていたのだろう。場を掻き乱す事においては右に出る者がいない彼女。

揉め事が終わり、もう自分の役目は終わったとばかりに固定席に座り、中断されていた朝食を再開していた魔法使いのお嬢ちゃん。

そんな彼女への警戒を疎かにしてしまっていたのは失敗だったと言わざるを得ない。

「マスターは毒物とか魔物の肉とか平気で食べるし、客にも提供する変わった人だけ。ここは良いお店よ。」

「・・・」

ちよっ

「ちなみに、私が持ってきた馬鈴薯モドキは実験で育てた作物で。微

量だけれど毒も持っているわ。

まあ、普通の馬鈴薯も発芽すれば毒持っているし大した問題ではないわね」

「……。」

「……。」

。 。 。 。 。 。 。

「確保おおおおおおお!!!」

「ちよ、違うんです! 本当に違うんですよ!!」

「何が違うんだね!」

「だから違うんですよおおお!!!」

「勿論解毒は済んでいるけれど……。」

最初にそれを宣言して欲しかったが、再び興奮し始めた彼等にはその言葉は届かなかった。

なんかもう泣きたい。



「畜生! せっかく丸く収まるかと思ったのに!」

そうして始まった取っ組み合いだったが。

これだけであつたならば、そう大きな問題にならなかつたのだらう。たまたま、偶然にも、いくつもの現象が運悪く、偶発的に重なりあつて起きてしまったことだつた。

「くっそ、捕まらん!」

「なんて素早さだ！」

勇者との関係者である俺に深手を負わせないために、彼等は武器を使わず素手で制圧しようとし、現役時代の俺が徒手空拳をメインに戦っていた事により状況は膠着気味。

数の力に頼ろうにもこの建物はそこまで広くなく。背後に壁を背負われれば数の利点が活かしきれない。

そして、それを最大限利用する為にドアを背負った俺は。ちよこまかと避け、捌いて説得を続けた。

だが、仮にも戦闘中なのだから攻撃を捌くことに必死で上手い言葉が思い浮かばない。結果あまり効果はない。

スーパーなロボットに乗って大戦中に接触回線とかでドンドン説得を繰返し、仲間を増やしていくのって生半可な事じゃないんだなあ……。

と、現実逃避したところで都合よく何かが変わる訳がない。彼等との相手を長時間出来る訳がない、戦闘の最前線から離れてブランクがある俺と、今なお前線に立ち続けている彼等では最終的な結果は火を見るより明らかだ。

だが、俺には心強い味方がいる！

いくら種族的に強いと言っても一般人のミラを除外する。だとしても、魔法使いのお嬢ちゃんに勇者の2人がいる。こちらを取り抑えようと必死な手を掻い潜り視線をそちらにやる。

視線が交差する。アイコンタクト、助けてお嬢ちゃん！

そうして、ゆつくりと立ちあがり杖を振りかざしたお嬢ちゃん。小さく呪文か何かを口ずさみ。すぐにその効果が現れた。

「ひゃうー！」

「きゃんー！」

まず、俺の手助けをしようも機を窺っていたミラ。次いでちみつこ。彼女達が小さな悲鳴と共にその身体が浮き上がり、魔法使いのお

嬢ちゃんの居る反対側の端へと運ばれる。続いて勇者も含む4人、それぞれを覆う光る膜のような、透き通る壁で包みこまれる。

「ふう……。」

それで終わりらしい。私のやることは終わったとばかりに再び着席。そしてサムズアップ。基本的にあまり表情の変わらない彼女の貴重などや顔である。

あ、ダメだこれ。アイコンタクト。ダメなんじゃない！

横に視線をスライドさせ、恐る恐る妹の方を伺って見ると。俺が負ける筈なと言わんばかりの謎の信頼感を抱きながら見守っている。つまり動く気配がない。

いつもアイツの前では格好付けてたからなあ……。

お兄ちゃん頑張る！と、言いたいところだけど。

ぶっちゃけ、もう限界つす……。

「兄さーん。私も回復魔法使えるから、大丈夫だよ」

うん。なんでそんなに信頼してくれてるのか理解できないよマイシスター。怪我させない。ではなく、怪我しない様に頑張る、にーに頑張るよ……。

さて、場の主導権を握るには先程のちみつこととの会話から把握した隊長。短期決戦で尚且つ効率を求めるならば彼が1番いいんだろうな。よし……。

うおおおおおおお!!

お前大将首だろ!?首置いてけやああああ!!

相手さんの腕を避けたと同時に、半ば自棄を起こした俺の足払い。これ自体は綺麗に決まった。倒れる隊長さんはなんとか踏ん張ろうと腕を伸ばし、あるものを掴み取った。だが、それは人を支えるには軽いものだった。

そのまま転倒してしまう。

ダウンした隊長さんを人質に捕って話をしようとした俺は、そのま

ま飛び掛かろうとした。が、その溜めの挙動に気付いたらしく、手に掴んだ物を俺の顔面に投げ付けてきた。

それを弾き飛ばそうとして。

「ちよ!?」

出来なかった。

それはミラが毎日持つてきてくれる、トマトをメインに見繕った色んな野菜の入った袋。食糧だった。

朝食を作るのに多少使ったとは言え、顔目掛けて飛んでくる袋は咄嗟の判断でキャッチするには重く、そして角度が急すぎた。脚を纏れさせ、罫を踏みながら背後のドアに体重を預けることでバランスを取り、なんとか受け止める事が出来た。

ふう、良かった・・・。

犠牲になった食い物はなかったんだね。

その安心も束の間、壁に背を預けた上に荷物を持った事によって鈍った俺の動き。この隙に取り抑えようと目の前の男達が動き出し

「デメエー！なんの騒ぎだこれはあ!!」

その前に、俺が背を預けたドアを蹴り飛ばす勢いで思いっきり開けた大馬鹿者が乱入してきたのだった。

衝撃。

バランスを崩しながらも、やつとの思いで受け止めた食べ物を持つ俺。蹴破る勢いで開けられたドアに吹き飛ばされる身体。

同時に手に持つ大事なトマト達も宙を舞う。動き出した私兵達に、自警団達の顔面に、腕に、鎧に、テーブルに、至るところにトマト爆弾が炸裂する。それを見ていることしか出来なかった俺。

自分が引き起こした事態に困惑し、どんな状況なのか理解できていない狼の魔人。そんな奴の顔を見ていると、まるで自分のブレーキが壊れたかのように利かなくなる感覚。顔面蒼白の妹。

俺はゆっくりと立ち上がり目の前のトマトの、野菜達の残骸を見

る。潰れてしまい形の崩れたトマトを手に取り、大股でズンズンと歩みを進める俺を吹き飛ばした張本人の唾前に立つ。

「うおっ!!?」

そして、ドアを蹴破った俺より身長も体重も大きいであろう、大馬鹿者の胸ぐらを片手で掴み、壁にそいつの背を叩きつけ、そのまま軽々と持ち上げる。

「おっ、おい！こりゃあ一体!?!」

「俺のトマトを台無しにしやがって!!」

◇

そこからの記憶は若干曖昧だ。まあ目撃者が4人いるので聞けば全てを教えてくれるだろう。自分のプツツンした際の実況なんて、あまり聞きたくないけれど。

まあ、とりあえず俺から1つ言わせて貰えば。

倒れ伏している皆の口元には、全員漏れなくトマトを中心に様々な野菜が炸裂していることだろう。狼野郎に関しては全力で1発だけ殴った。顔、と言うか牙かな？それが予想以上に堅くて手がいてえ……。

だがまあ、農家の皆さんや、ミラ親子の苦労は無駄にはならなかった。1つも漏れることなく、形が崩れたからと言う理由で廃棄されずに、その全てを食させたのだから。

改めてミラの持つてくる袋を見やると、小さな膨らみが見受けられる。中を見てみると1つだけトマトが完全な形で残っていた。それを手に取り塩を軽く振り掛けて齧り付く。うん、美味い。

最後の一口になるまで食い進めたところで、魔法使いのお嬢ちゃんに近付いて来て、俺の手を引いてきた。

朝食にトマトがなかったのがお気に召さなかったのか、手に残っていた食いかけのトマトを自分の口元に持つてくると、そのまま食べ

た。後ろで2人の声が聞こえるが、これ以上面倒な事はごめんだ。なのでスルー。

強奪した彼女はそのまま、手を合わせてご馳走さま。と言ってきやがった。

事態をややこしくして、後始末が面倒になった事に関して少し文句でも言ってみようかと思っていたが、実に美味そうに食べる姿と顔を見ていると、なんかどうでも良くなってきた。なし崩しな形にはなつたが無事に米も手に入りそうだしな。

お嬢ちゃんの頭をガシガシと少し乱暴に撫でてやる。何故頭を撫でられたのかわからないのか、目を白黒させている。

普段のあまり表情筋が仕事をしていないお嬢ちゃんの、そんな姿を見るのが最近の密かな楽しみになってきていた。

キッチンでは負けたことがないんだ。

まあ、ここで戦ったのも始めてなんだけど。

そして、初黒星はこの5分後。

トマトの水分で汚れた手で頭を撫でたのに気付いたお嬢ちゃんにめっちゃ怒られた、実に短い無敗記録である。

10話 蜘蛛と試験

く〇く

やりたくないことを無視して逃げるのは簡単だ。

しかし、そうすると。自分のやりたい大概のことが出来ない状況になるけれど。

◇

つんつん、つんつん……。

ぷるっぷるっ……。

俺の対面の席に座った女性が皿に乗ったものを、手にしたスプーンで何度も何度もつんつんと突っついている。

ぐぐっ……。

むにゆうー。

飽きもせずに繰り返されたそれが、ようやくと終わったかと思えば、次は倒れないように慎重に。

然りとて弱くはなく、まるで押し退けるかの様にスプーンで横から圧を掛ける。

ぱっ。

ぽよよんっ！

倒れそうになる限界ギリギリまで形を変形させたそれが重力に引かれるまま、崩れそうになる前に一気に圧から解放させて元の形へと戻る。これらの行為を繰返し、一向に口へと運ぼうとしない。

「……。」

「……。」

本来であれば食べ物で遊ぶなー。とか、そんなお小言めいた事を言

う所なのだが。今回ばかりは、そう事は単純にいきそうになさそう
だ。

アレを作りながら、配膳する時、そして現在。

何度も盗み見ている彼女の事をもう一度眺める。

その女性。妙に肌面積の大きい扇情的な服。

そして、その背中が大きく晒された服のせいで余計に強調されてい
る。肩甲骨辺りから腰に掛けてに存在する。黒々とした6つの鋭利
な脚、臀部には蜘蛛の腹に当たる部分がある。

そして個人的にもっとも特徴的なのは。視覚の邪魔にならないよ
うピンを使つて、淡い紫色の前髪を横に流した顔。そこに8つある大
きな目。8つ4対の複眼。その構造上、瞳孔の存在しない、くりくり
とした紅い瞳。

「私つて。やっぱり気味が悪いのか・・・?」

それら全てを大粒の涙で濡らし泣いていた。

◇

「邪魔するぞー!」

そんな声と共に1人の女性が、ドアに付いているベルを鳴らしなが
ら、入店する。

時間は既に日か沈み、気持ち良さそうに寝息を漏らすハーピイのち
みつことそれを背負う私兵の隊長さん。

そんな最後の客を見送り、まだ閉店するには少し時間が早いのだ
が、食材をほぼ全て吐き出しての食事会。

正確には、色々あつて気が立つていたとは言え、先日の俺と狼野郎
の勝負に巻き込んでしまった事に対する俺の謝罪の気持ちを込めた
宴会。

食材が痛む前に使いきりたかつたと言うのは、彼等には内緒だ。

途中にトマトを使ったサラダを出した時には、隊長さん含めた何人
かの顔が引きつっていた。どうやら前回の騒ぎで、一部の人達のトラ

ウマになつたらしい。

本当に申し訳ないことをしたと思つている。悪いとは思つている、だが反省はしていない。食い物を粗末に扱うことは許されることではないのだから。

そんな会食を終え、疲れていたこともあり。そのまま閉店の準備を推し進めていた。

そんな、タイミングでの来店。

「ああ、すみません。今日はもう食材を使いきってしまったんですよ。」

「それなら問題ない。こちらが用意した。これで何か作つてくれないか？」

だから帰つてくれ、と椅子を退かして床掃除を継続、視線をそちらに向ける事なく言下にそう伝えたのだが。俺の早く休みたいと言う欲求は軽々と吹き飛ばされた、くそう。

そうして、掃除を中断し視線を声がる方へと向ける。そこには……。

肩や足を露出させた、薄く軽めの普段着に使えなくもない。だが、その蜘蛛脚を出す為だったり、種族柄仕方がないとは言え。背中やら太腿だったり肌の露出が大きく。実に視線に困る服装。

黒と紫を基調にした和服を改造した様な物を身に纏つた蜘蛛の魔人が居た。

それは、女郎蜘蛛と言う種族に分類される魔人。アラクネと呼ばれる蜘蛛の身体に人間の上半身が生えた様な種族とはまた別種の。一目見ただけでは小柄な女性を思わせる。

だが、その顔にある8つの複眼や、背中側にある脚や腹は歴とした蜘蛛の身体。そんな魔人。

「私は、さる御方に護衛としてお仕えになっているもののだが、今は雇い主の我儘な任務中だな。様々な料理屋を探しているんだ」

うん、なるほど。わからん。

護衛が必要なくらいのお偉いさんなら、こんなチンケな店に来るまでも無く。まるで贅沢と言う言葉を形にしたらこうなる、そんな品々を扱っている高級店に行けば済む話だろうに。

「ああ。いや、我が主人ながら困ったものなのだが。ただ高級なお店より、色んな場所で様々なものが食べないと勿体ない。と、そう言うんだ。」

俺自身は何も言っていないのだが、悩むそぶりを見せた事で察してくれたのか、人差し指で自らの頬を小さく搔き、苦笑いしながら答えてくれた。こちらの表情一つで、そこまで考えが至るぐらいには繰り返された行為らしい。

「そうか、わかった。何が作れるか見てみよう」

「ああ、頼む」

そう短めのやり取りをした後、彼女から手荷物の食材を受け取り、中身を拝見し眼を見張る。うちの様な小さい食堂ではお目にかかる事のないであろう高級食材達が犇めきあっている。その中でも1番に眼を引くもの。

どうやら肉料理をご所望らしい、その重圧な存在感ですぐに理解した。あらゆる付け合わせが作れそうな色々な食材達に囲まれていて尚存在感を放つ食材。

「ドラゴンの肉、か。」

「出来そうか？」

「生憎とうちではドラゴンの肉は取り扱ったことが、指折り数える程度の回数しかない。」

「ふむ、なら辞めるのか？他の店であった事なのだが、下手な調理で食材を駄目にされるのは、こちらとしても困るんだ。」

「試す前に辞める？とんでもない。」

「ほう？なら見せてくれ。」

それが、彼女との出会い。

それからと言うものの、彼女は何度かうちに来た。毎回閉店間際の最後の客が出ていったのを狙ったかの様に。

いや、理由は思い当たらないが、実際に狙っているのだろう。来店する度に趣向の変わる食材を持ち込み。俺が出した料理を完食、そして最後には合否の結果を呟き帰る。

フルコースの、肉料理や魚料理、メインディッシュやら色々を作った。

そして、現在。

彼女の前にはデザート。手作りのプリンが置かれ、スプーンで弄ばれている。思えば今回の食材。正確には砂糖を持って現れた時から様子がおかしかった。

口数は少なく、いつもの食材を差し出すときも二度目からは中身を説明してくれたりもした。それがなかったのだった。無言で食材入れの袋を渡して、出来るか？

この一言のみ。

「あまり菓子類は得意じゃないんだがな」

魔法の粉があれば俺でも結構色々な菓子が作れるんだがなあ。使いは知っているが、構造や作り方は知らないものなんて世界には溢れている。携帯電話なんかその最たる例だろう。大概の人は持っているし使いこなしている。だが構造や仕掛けはわからない。世の中そんなもんだ。

ちなみに、魔法の粉と言うのは、危ないものでもなんでもない。ホットケーキミックスだ。あれは牛乳入れてフライパンで焼く、そして瓶詰めの蜂蜜。あれだけでも小さな幸せを感じるくらいに美味しい。

サツマイモを茹でて、潰して生地を作って、それに板チョコを小さく刻んで、オーブンで焼き上げればチョコチップクッキーに。ふむ、久々に食べたくなってきた。ないけど。

「菓子は苦手か？」

そして今度は、俺の先程の言葉に食いつき、身を乗り出してくる目の前の席に座る彼女。なんで嬉しそうなんですかね？

それにしても、おおう……。開いた胸元が絶景です。御馳走様。「いや、なんとかやってみるよ」

「そうか……。」

なんか見るからに気落ちしている。背景にガツカリとかズウウンとか文字が幻視出来るくらい。

「まあ、貴方の腕前は少しは知っているつもりだ。美味しい、だろうなあ……。」

「久しぶりに作るから形が上手くいくかはわからないだが……。まあ味は、そこそこだと思うぞ？期待しすぎないで待っててくれ。」

大体この世界のお菓子は甘過ぎるんだよなあ。初めて高い金払って食ったときは絶句したもんだ。

砂糖が高級品なのは分かるんだ。だが、甘ければ甘い程良い、そして高い。だから食う。みたいな思考停止した貴族達のアレ。

あの砂糖たっぷりな物と砂糖を掛け合わせ、更に練乳を付けてどうぞ。あんな冗談の様な物をお菓子。そう呼ぶことは、俺のちっぽけなプライドが許さなかった。

MAXな珈琲でもここまでやらんぞ、アレも大概だがな。なんだよ加糖練乳って、もう字面だけで甘いわ……。

「さて、と。」

程々に苦味を追加する方法で最も簡単なのは焦がす事。砂糖に水を少々、それを混ぜながら弱火でじっくりと煮る。これだけだ。

そして、いい感じの焦げ色が付くカラメルソースが完成するまでの間に本体分の作業に入る。

こちらが一方的に巻き込んだ騒動ではあるが、勇者の血縁者に在らぬ嫌疑を掛けた、と。その謝罪の気持ちとして、ハーピイのちみっこから貰った卵。見たことない品種ではあるのだが、あの金持ちの豪

商人の娘が持ってきた物だ。安物な訳はないだろう。実際に今日の宴会で何品か使ったがコクが強くとても美味かった。

まあ、正確にはアイツが兄さんと呼んでくれているだけで、血縁者ではないのだが細かいことはいいだろう。

俺は貰えるものは何でも貰う人間だ。

その卵を3つ程取り出し、もう一つの鍋の淵にカツ、と当てて殻を割り投入。いつの間にか出来る様になっていたが、初めて片手で卵の中身を割り入れた時は感動したものだ。

それに牛乳、砂糖を混ぜる。多少面倒でも砂糖は玉にならない様にしっかりと混ぜる。

カラメルソースの方に視線を移すと、既にいい感じの茶色になってきていた。蓋をして退かしておく。同時に更に追加で鍋を用意して水を張り、それを火に掛ける。

混ぜる、混ぜる、混ぜる。ひたすら牛乳、卵、砂糖を混ぜまくる。

お菓子作りは腕をイジメた分だけ美味くなる。それが俺の勝手な持論である。

カラメルソースを見ている必要がなくなったので、無心で混ぜる。意識してしまうと彼女の蜘蛛の脚を見てしまうから。

だが、必死に自分に言い聞かせ意識を反らしていても思わず見てしまう。観察してしまう。

先程の混ぜたものを何度がこして、砂糖を完全に馴染ませる。そうして出来たものを。内側に油を薄く塗った小さな容器へと、気泡が出来ないように注意しながらゆっくりと流し入れる。

3つ目の鍋の水も沸騰してきたので、これの中に小さな容器を入れる。あとは弱火で10分弱。この空いてしまった時間を使った器具の洗い物に当てる。

洗い物を無心で進める、女性の身体をジロジロと観察するのは失礼だからな。

そうして、全ての洗い物が終わった時には15分が経過していたので、最後の仕上げに入る。

ここで取り出したるは、お嬢ちゃんが自作してくれた魔法の道具。一見すると取っ手の付いた小さな箱。これを開けて中に、先程の火が通った容器を入れて閉める。

ガヒョー!!

と、変な音が部屋の中に響き渡る。30秒程してから中の小さな容器を取り出すと、それはいい感じに冷えていた。

『暑い日に冷たい水が飲みたくなつて作った』

お嬢ちゃんがそう言っていたこれは、コップ1つしか入らないくらいに小さいし、1度使うと空気中の魔素を取り入れる為だかなんだかで、数時間は使えない。

新しいのが出来たからあげる、と旧式を譲り受けたものだ。正直言うとうちの勝手はあまり良くないのだが、先程も言った様に俺は貰えるものは、何でも、貰う。

皿を用意、小さな容器を逆さにしてその上に乗せる。

薄く塗った油で滑りが良くなった中身を、容器の底をペシペシと叩き、落とす。

うん、プッチン出来ないけど、プリンはこうすると美味さ3倍だな。見た目が大事なんだろうな、きつと。

そうして、カラメルソースをたっぷりと掛けて完成。

出来上がったものを彼女の前にスプーンと共に配膳。

スプーンを手に取り、平時であればすぐに食べ始める彼女は、今日は何故か食べようとしなかった。

いつまでたつても食べ進めない事を不思議に思った俺は、無意識とは言え、再び彼女の身体を眺めてしまっていた。

大きく開いた胸元、和服、そして……。

「ッ……！」

意図せず再び脚を眺めていると、その脚が小刻みに震えているのが

わかった。その変化に気付いて彼女の顔へと目をやると。ポロポロと大粒の涙を流していた。

え、ちよ!?

「私って。やっぱり気味が悪いのか・・・?」

俺が大いに慌てているのを尻目に、虫の鳴くみたいな小さな声で彼女は、そう漏らしたのだった。



私は捨て子だった。

今時そう珍しいことでもない。

だが、場所と種族が問題だった。

私が。魔人である私が捨てられていたのは、人間が納めている人間の為の王国。そこに程近い森の一角だった。誰かに保護してもらわなければ生きられない赤子。

運良く発見されたとしても、この身体には人とは違う。

しかも、他の虫を駆逐し補食する、分的には益虫と呼ばれるものの。その見た目で嫌われることの多い蜘蛛の身体を持って生まれた。

そんな私が生き延びたのは幸運だったと言う他ない。

王国の一等地に家を持つ物好きな人。あの人が野生の動物や魔物の狩りの見学に来ていた時に見付けてもらったのだった。

血こそ繋がっていないが、私は彼を本当の親だと思い慕っている。いや、本当の親処ではない。私を捨てた人達の事など最早どうでもいい。

あの人の役に立ちたい。

これが私の行動理念の根底にあるもの。

私がやれることは何でもやるつもりだった。だが、私の身体がそれを許さなかった。

耳が尖っている等の、単純にフードを被ったりして隠し通せるものではない。それで複眼は隠せるかも知れないが、私の背中から生えている脚は、真っ直ぐに伸ばせば自分の身体の倍はあるのだ。

だから私が、彼に何か恩返しをしたくとも、魔人に理解の無い王国では人前に出ることは出来なかつた。外に自由に出れない分、屋内で出来ることは何でもやった。家事だって人並みにはこなせるし、役に立てたと思う。

でも、それだけじゃ嫌だつた。

家の事だけでは、どうしても暇で何もすること事がない、無為な時間が出来てしまう。それが堪らなく嫌だつた。もつともつとお役に立ちたかつた。

そんな私が。今まで以上にあの人の役に立ち、恩返しするには。考えに考え抜いた・・・。

そして護衛を連れて外出するあの人を見て、戦いしかないと思い至つた。そう思つてからの私は、家事をこなしながら、開いた時間を使つて身体を作つた。

私以外に家族がいない。詳しく聞いたこともなかつたけど、少なくとも。この家には彼と私の2人。あとは私の事を隠して育ててくれた為、表向き独り暮らしのあの人の家には護衛の兵士達が交代で詰めていた。

日々沢山の来客があつたし、様々な腕の立つ護衛の人が訪れる。その人達を相手に、模範的な隠密行動を繰り返し、稚拙ながら技術を磨いた。

大概の人に気付かれなくなつたから。その何の根拠も無い自信を理由に。大事な仕事が出来たから。そう言つてお城に向かつたあの手に勝手に着いていつた事もある。

何故か、あの人にはバレて怒られたけど・・・。

「私しか出来ないことをやる・・・！」

蜘蛛の身体を生かして、天井を、壁を、どんな場所でも動き回れた。

人間には出来ない事も軽々と出来る。人間じゃないと出来ない事が沢山あるなら、私にしか出来ないことを最大限やる。

そうして、数年がたった頃。

私の隠密行動は誰にも気付かれなくなった。

表向きの護衛達の取り逃がした刺客を、私が捕らえた事もあるし。不穏な動きがあつたらそれを独自に調べて黒幕を始末したこともある。

危険な事は辞めてくれ、と1度だけあの人に言われたこともあつたが。これだけは譲れなかつた。断固として譲らない私に、苦虫を噛み潰した様な渋い顔をしていたが、彼公認の護衛の役目を手に入れた。その日からは、大手を振って役目に没頭した。まあ隠密行動が基本なので、実際には目立つことはしていないのだけど。

私も彼も大きな怪我をすることなく、何も問題ない充実した日々だった。

今日この日までは。

「……。」

私が用意した砂糖を使い、実に手際よく作ってくれた目の前の男。ここ最近、私が定期的に通っているこの店主だ。

「私が閉店間際に来るのだからってそうだ。ここは魔人と人が共存している珍しい町だ。だが、ここでも私は人の視線が堪らなく恐いんだよ。だってそうだろう？」

私の身体はこんなにも醜い、人間とは似ても似つかない。いや、基本的に同じものだからこそ異形の部分がより際立つ。店主だってそう思うんだろう？」

蜘蛛の身体をわざとらしく蠢かしながら、私の事が恐いんだろう？と、本当は聞きたく無い言葉を、自らの誘導する形で訪ねてしまう。

私が今まで無視する事が出来ていた店主の、人の、他人の視線を、今日だけは我慢出来なかつた。答えなんか決まっている。卑屈な笑みが漏れる、笑った端から悲しみに崩れて行く歪な表情。

『今回の私のこの我儘を最後に、キミには暇を出そうと思う』

脳裏に今尚、鮮明に焼き付いているあの人の言葉を反芻し更に涙が流れる。食事の最後の締め、デザートを突つつく。

目の前の彼が作ったデザート。これもきつと美味しいものなのだろう。途中変な箱が妙な音を上げていたのが少し気になるが……。彼の作るもので美味しくなかったものには今のところなかった。だからこそ、これを食べて合格だったら。私はあの人に捨てられてしまうのだろうか……。

「なあ。」

今まで黙っていた彼の言葉が部屋に響く。

蔑むだろうか？嘲るのだろうか？

怖い。辛い。血の気が引く。

具体的な言葉が何も言われていないのに、心が不安定で簡単に折れそうになる。

そして紡がれた言葉で

「蜘蛛の脚、触っていいか？」

私の頭の中は真っ白になったのだった。

11話 未知と困惑 ★

505

異端の者は疎外感を味わう。

そして、その弊害でごく当たり前の事を
知ってて普通の事を知らない場合がままある。

◇

「は・・・？」

先程の俺の一言は聞こえてなかったのだろうか？

お互い向き合って夜も遅く、閉店間際の静かな空間。

そこで一対一。聞こえていないわけが無い。

だが、此方を見ながら一言声を上げ、それきり固まり、全く動かなくなってしまう。

そんな状態の彼女を見ると、不安にもなってくる。

俺は昔からずっと蜘蛛が好きだった。ネットで巣を張る蜘蛛の動画とか頻繁に見ていたし、ウイキ先生の情報だって何度も読み返していた。

詳しくは分からないが、どうやら彼女は自分の異形の部分にコンプレックスを持っているらしい。

自分の身体を醜いとか言いながら泣くもんだから、蜘蛛が好きな俺はついカツ、となってしまう。

言葉で説得出来ればそれが1番なんだが、俺の足りない頭では上手い言葉が思い付かなかった。故に、触らせてくれー。なんて言ってしまった・・・。

マズいな。これはやっちゃったか・・・。

いきなり脚を触らせてくれ。なんて、女性相手にこれは失礼なんじゃないだろうか？

ちよっと常連のお嬢ちゃん、想像してみる。

『マスター、そこ。触らせて……』

うん、不安しかない。なんか怪しい実験に使われたりしそうだ。そもそも俺が触る想像しようとしていたのに、自然と俺が触られる側に回っている。

俺の妄想の中でさえ思い通りにしてくれないし、ならない。まして動かせない。魔法使い、強敵である。

「私を、触りたい、と。そう、言ったのか？」

あ、よかった。ちゃんと聞こえてたのね。思考が変な方向へと迷走し、収集が付かなそうになった所で、あちらから返事があった。

先程は脚をワキワキと蠢かせてこつちを挑発してたのに、今は所在なさげに縮こまっている。そんなことで隠れるサイズじゃなからうに……。

だが、一度言ったことは撤回しない。蜘蛛に触れるかもしれない、折角のこの機会を逃がさない。逃がしてたまるもんか。

「おう、確かに言ったぞ。」

「いや、でも……。ほら、気持ち悪いだろう？」

ふうむ。彼女が何を言っているのか俺には理解できそうもないな。価値観の違いだろうか。もしコレが違う場合は何を討論したとしても、大抵は徒労に終わる。

それが一番浮き彫りになるのは、食生活だと俺は思っている。こつちではペット、あつちでは食料。とある国での害虫が、遠い国では食料で。どこかの国では悪魔の使い、宗教の関係で食べられないものが。

自国ではブランド物だったり、庶民にも親しまれる立派な食べ物に料理されたり、と。まあ、この辺の話はもういいか。

価値観の違い。完全に線引きされているものを、理解して貰うのは難しい。言葉だけでは何処まで行っても平行線のままだろう。

強引な、あまりいい手段とは言えないが、俺の頭では他の方法が思いつかなかった。なので、このまま行動で押しきらせて貰おう。

「いいや、むしろ綺麗じゃないか？」

「っ……!?!」

確か蜘蛛は凄く綺麗好きだ。暇さえあれば猫の毛繕いみたいに、無菌の消化液とかで身体の掃除をしているらしいからな。蜘蛛の魔人である彼女も身嗜みはキチンとしているだろうと。若干安直な考えの気もするが、これは僅かな確信も持っている。

お互いが触れる為に手を伸ばせば、手の届く距離の調理台から出て、逸る気持ちを抑えつつ彼女へと歩み寄り隣の椅子に腰を下ろす。

「あーあ、こんなに泣いちゃって……」

未だに涙の痕が残る顔に左手を添えて、顎を上げさせる。次に右手でその8つの複眼の目尻に残る雫を順番に指で掬い取り拭ってやる。驚いたのかビクツ、と身体が跳ねているが、努めて無視する。

「やて……」

「え、あの？店主？」

彼女の目から新たな涙が出ていない事を確認した俺は、顔から手を離し、解放する。次いで、今まで盗み見ていた蜘蛛の脚を、顎に手を当て至近距離でじっくりと観察する。

近くで改めて観察する彼女の脚は、見るからにツヤツヤと光沢があるように見える。手入れが行き届いているのだろう、それを証明するかのように、黒い脚は店の光源を鈍く反射している。

「ふむ、やっぱり艶かしいな……。それに、店の光を反射するぐらい磨かれてるようにも見える。」

「そ、そんなに褒められても……。糸くらいしか出ないぞ？」

そう言っつて、こちらからは見えないが。糸疣から1番下と2番目の蜘蛛の脚を中継として使い、蜘蛛で言う触肢の部分となるであろう。

こちらも肘辺りから黒い外骨格に覆われている、人間の部分の腕へと移動させる。

そして、目にも止まらぬスピードで手際よく糸玉みたいな、蜘蛛糸の玉を作り始めた。

なんだあれ、超欲しい……。

「うん、糸を貰ってもいいんだが……。」

先程から気持ち悪いとか、そういうこちらの嫌悪感やら感情論でのみで反対してくる彼女。うん、俺は微塵も嫌じゃないし、あつちも嫌とは一言も言っていない。

じゃあ、もう触ってもいいよね？

勿論、一言でも嫌と言われたらその時点で辞めるけど。

よし。自分への言い訳完了。

「触るぞ?」

「え、う……。」

おもむろに、彼女の手首を掴み、こちらへと持ってくる。結構つるつるしている。

手を掴んだ拍子に蜘蛛糸の玉がテーブルへと落ち、コロコロと転がる。それを空いたもう片方の手でテーブルの端へと寄せて放置。彼女の指先に、俺の指の腹を当てて押し付けてみる。

すると。プツ、と音がして彼女の指先が沈む。俺の指先が小さく裂けて血が滲み出した。



「えっ、ちよつと！なににして!?!」

「へえー結構鋭利なんだな。」

なんだこの人!?!本当になんなの!?!

理解が追いつかない、気が動転させられる。そんな状態のまま好きに弄ばれている。落ち着こうとしても、次から次へと起こされる行動に翻弄されっぱなしだ。

そして、あの人以上寄せ付けたことがない距離、隣へと座られた。そのまま流れる様な動きで、手を引き寄せられるのを抵抗する事ができず、ただ見ていることしかできなかった。

かと思えば剥き出しになった、私の鋭く尖った指先に。

彼の柔らかく脆い指先を沈める様に押し付け、結果当然の事だが傷つけた。焦る私を置き去りに、自分と私との身体の違いを楽しんでいるのか、唇の端を吊り上げるように笑っている。本当に訳がわからない。

「ひゃっ！」

「うん、やっぱり良く手入れされてるな」

私を心を掻き乱す出来事が、私の脳内で処理され平静を取り戻す。その前に、更なる衝撃に襲われた。

衝撃、と言っても勿論殴られた訳ではない。強くされた訳でもなく、その逆。ただただ優しく。

自分以外の他人に1度も触られたことの無い私の異形の部分、最も人間と違う部分。蜘蛛の脚。

そこを、まるで壊れ物でも扱うみたいに優しくゆっくりと撫で擦ったのだった。

「あつ、ちょ、つと・・・！」

心臓が先程から激しく脈を打っている。一向に収まる気配の無い心音は、脚を通して彼にも聞こえてしまっているんじゃないかと思うくらい激しい。

蜘蛛の脚の先端は、両手程は鋭利ではない。その尖っていないことを確認するように、先っぽをちよんちよんと軽く触れられる。

指が裂けないことを確認した、彼は。今度は臆面もなくぐりぐりと掌を押し付けるように触れてくる。

ああ、これはいつまで続くのだろうか？

この人はどこまで私の心を虜り、犯し、蹂躪すれば気が済むのだろう

うか？

私には分からない。だけど、このまま彼が満足するまで身を任せても、いい、かな……。

そう思った。

間違つて思ってしまった。

その瞬間だった。

「ひいっ!!?」

「ふうん、関節つてこんな感じなのか」

生まれて初めての感覚、背筋が粟立つつとでも言えばいいのだろうか。自分では出すつもりが無い声が漏れる。

我慢しようとしても到底出来そうもない。はしたない。恥ずかしい。次々に沸いてくる羞恥の感情と、声を抑えようと、両手で口元を塞ぐ。

「そ、こはあ……!」

関節部分を撫でられ。身体中に電気が走る。ゾクゾクする。私の心臓は本来の役目を放棄したらしく、更に強く大きく脈打ち、その存在を最大限主張する。それに合わせて呼吸も荒くなる。

「はあっ、ふあ、はっ……。」

先端も、第二関節も、第一関節も、その中間も、散々いじり回された。その彼の手が関節を通り越し。

行ったり来たりする。何度も何度も撫で擦り。その行為を繰り返しながらゆつくりと、だが確実に根本へとせり上がって行く。

そして、それを心の何処かで待ち望んでいる自分がある。

「ツツツ……!!?」

そして、脚の付根を。背中と肩甲骨の間をなぞる彼の手を感じた瞬間。私は今まで生きてきて1度も感じたことのない感覚が全身を襲った。

今まで口を塞いでいた両手を離して、目の前で興味津々に私をいじり倒す彼の胸元を掴み。私の知らないこの波に意識を持っていかれ

ない様に、身体を縮こまらせて耐える。

「ツーーーーー!!?」

身体が独りでにビクンビクンと跳ねる。

自分で自分の身体が思う通りに動かせない。

激情の波が引いても自由にならない。

身体のみみが抜け、次いで身体が弓なりにしなる。

せめて、声は漏らさないように。

ゾクゾクする身体を、荒い息遣いを、歯を食い縛って必死に抑える。

「さて、と。あとはー。」

私の身体の異変に気付いていないのか、気付いていて無視しているのか分からない。彼の心境は分からないが。

だが、これから何をされるのか。それだけは背筋を這う掌の動きで理解できた。

肩甲骨と腰の間。脚の付け根をマッサージするみたいに強くはなく、されど弱くない力で私の緊張感を解きほぐすみたいに揉まれた。

その手が下がっていき、行き着いたのは

「ひゃ、そ、こは。だめえ・・・!」

私の腰の更に下。そこは蜘蛛にとっての大事な器官が沢山詰まっている。呼吸器、生殖器、蜘蛛の代名詞である糸を作り出す糸疣。

魔人である私と、通常の蜘蛛とは違うにしても。そこには必用不可欠な臓器が無数に存在する、蜘蛛の腹部だった。

そんな急所に彼の指が伸ばされる。

その手が近付いてくるのを、声だけで拒否し、身体は、私の意思は、拒絶しなかった。

もう少し、この未知の感情に翻弄されてる。

何もかもが初体験の、この時間を少しでも引き延ばしたかったから。

はね除けようと思うことすらしなかった。

。 。 。

◇

「すまん。」

「.....別に.....」

これはやっちゃったわ。

だって、蜘蛛って飼育すること自体は出来るけど、犬猫みたいなペットと違うじゃん！観察する事しか出来ないじゃん!?

そんな蜘蛛好きな俺の前に合法的かつ、お互いの了解ありで、お触り可能な蜘蛛の身体があつたら触るに決まってるだろ。

「調子に乗りすぎました。深く反省しております。」

「っ、別に.....」

あれからたつぷりと蜘蛛の腹部に当たる部位を堪能した。他の外骨格と同じなのだろうが、とても不思議な柔らかさだった。

俺が満足するまで触りまくり、解放した彼女は息も絶え絶えで、呂律も回ってなかった。途中身体が何度か硬直したり、痙攣していたのはわかったんだが。初めて触る蜘蛛の身体に感動して、それ以上に夢中になってしまい、気遣ってやる事が出来なかった。

多分くすぐったかったのだろう、悪いことをした。

「.....」

あれから彼女は、テーブルに肘を立て頬杖を付き外方を向いたまま一言も喋らない。

ん？そーいや、お互いの了解。

あ。そーいえば許可とってなかった。

押しきつたんだっけ……。

でも、仕方ないじやろ？うん、仕方な

「店主。」

「はい、なんででしょう！」

声が聞こえた瞬間。ビシツ、と彼女の前に直立不動の姿勢で答える。やっと口を開いてくれた。

「その、どう、だった……？」

「あんなに自由にさせて貰えて至福の時間でした。」

「そ、っか……。」

いやもう、本当に嬉しかった。感無量ってのはこうゆう事なのだろう。初めての来店してくれた時から釘付けだったものを、思う存分に、余すことなく堪能出来たのだから。

「うん、正直また触りたいくらいだ。」

「勘弁してくれ……。」

あんなのが何度もあつたら私が変わってしまった。と、小さく呟く声を最後に再び場が沈黙で支配される。

暫くして。

「あ……。」

「どうし、ありゃ」

気不味い空気の中、2人共ずっと合わせずに泳がせていた視線が、同じ場所へと落とされる。

そこには、床へと落としてしまったプリンが残骸があった。

さっきの出来事の中に、脚か何かに引っ掛かったのか。

全く気が付かなかった……。

「店主。折角用意してもらったのにすまない。試験の合否はまた、今度にしてもらっていいか？」

「ああ。俺は別に構わんよ。あくまでそっちが決める事だしな。」

まあ、確かにこちらが勝手に始めた事だったな。と再び隣り合って座り2人で軽く笑いあった。

と、俺が少し大袈裟に座った拍子に、テーブルが少しだけ揺れた。それによって先程彼女が用意した蜘蛛糸玉が転がる。

「あ、そう言えば蜘蛛つてき。巢を片付ける時に貴重な栄養を再利用するのに、糸とか食べる事があるって聞いたんだが、そうなのか？」
転がる糸玉を手に取り、両手で弄びながらなんとなくて、ウイキ先生聞きかじりの情報を話題に雑談。

「ほお、良く知っているな。」

「ま、好きだからなあ。」

「すっ……！」

「ふむ。」

硬直している彼女の前で、糸玉を少しだけ解きほぐす。

指で少しだけ摘み、手を伸ばして調理台の包丁を手取る。

小さく糸を切り、本体をテーブルへと転がす。

俺の手には長さ10cmくらいの蜘蛛の糸。

「で、味は？」

「辞めッ……!!?!」

その日、俺の意識は彼女の不可視の一撃によって容易く刈り取られたのだった。

◇

「店主！おはよう。いい天気だな！」

「お、おお。おはよう、朝からどうした？」

次の日、同じベットで寝ていた妹共々、ミラに朝から叩き起こされ。当たり前のように食堂で待機している魔法使いのお嬢ちゃん、ミラ、妹の4人で朝食を取った。

どうしても気になって、開店前の掃除中、何度も辺りを見渡してみたが、蜘蛛糸玉は影も形もなかった。

彼女が回収していったのだろう。残念である。

そして何事もなく開店し、俺が洗い物を片付けている。そんな時間に彼女が姿を現した。

「いや、なんだか悩んでいるのが馬鹿らしくなってな。私は私なんだ。そう悲観することはない、と考えられるようになったら自然と視線が気にならなくなってな。」

「そうか、そいつは良いことだな。」

俺の対面のど真ん中の席に。

ドカツ、と勢い良く座る。悩みが吹っ切れた彼女の笑顔はとても魅力的で、こちらにも自然と笑顔になってしまう。

「あの蜘蛛の人、誰・・・？」

「さあ？私も見ただことない魔人さんだ」

「増えた・・・。」

朝食を終えた3人は、席をそのままに雑談していたみたいだが。話題の矛先が俺達に向いたらしい、話に混じっては来ないものの、こちらをチラチラと伺っているのがバレバレである。

「さて、店主。もう一度アレを作って貰おうか。」

「はいはい、砂糖預かりますよー、つと。」

何度か繰り返した行為は、淀みなく荷物の受け渡しを済ませて。早速調理に入る。

作っている間にちみっこが勝手に厨房に入ってきたのを叱り飛ばしたり、少しだけ面倒な事があったが。

まあ、軽く説明すると厨房はバイ菌が一番の敵だからね、勝手に入る奴には拳骨1発だ。

そうして、けたたましい音を出しながら動くお嬢ちゃん作の急速冷

蔵庫で出来上がったプリンを出す。

先程まで遠巻きに見ていたメンバー全員が、距離こそ離れているものの、いつの間にか俺達2人を取り囲む様に陣取っていた。

「ふふっ、この感触が楽しいな。」

「おう。プリンはツルツ、と食べられる菓子だ」

「では、頂きます・・・。」

スプーンで一口大に掬い取り、チュルツ。つと音を立ててプリンを口に含み、目を見開くのがわかる。

「甘い、が。甘すぎない。ちょっぴり苦味が効いたソースがいいアクセントになっている。正直に言う甘い菓子類は苦手だったんだが。これは美味しい、ああ、美味しいなあ。」

「そりゃあ、よかった。」

ニコニコと笑顔のままプリンを食べ進めている。そんな姿。心底機嫌が良いのか、ゆらゆらと揺れる蜘蛛の脚を眺める俺。気のせいかピッカピカに磨かれている気がする。

昨日は夜で暗かったから、わからなかったただけか？

そんな事を考えていると、ガタンツ。と音を響かせて立ち上がる気配。

妹、ミラ、ちみっこ。

俺達を取り囲む様に移動した3人。ではない。

朝食を取った席から動かずに居た魔法使いのお嬢ちゃんが、まるで椅子を蹴るかのような勢いで立ち上がって此方へと距離を詰めてきた。お嬢ちゃん固定席のカウンター席の端っこに座る。

「私、これ食べたことない。作って」

「いや、でも」

「作って」

有無を言わず、つて、感じた。正直に言う、恐い。

相変わらずお嬢ちゃん表情筋は仕事を放棄している。動いては
いない。いないんだが、なんか滅茶苦茶不機嫌っぽい？

「しかし、材料持ち込みだからなあ。砂糖とか高級品はうちに常備し
てないし。」

「・・・。」

おもむろに懐から杖を取りだし、構えるお嬢ちゃん。

一瞬だけ身構えてしまったが、数秒もしない間にお嬢ちゃんは転移
魔法で消えていった。

「マスター、私にも同じの。」

そして、ものの数分で帰ってきたと思ったら、大量の砂糖を持参し
てきた。即調達とか行動早すぎませんかね。

「あー、作ってやりたいのは山々なんだが。」

「今度は何？」

「お嬢ちゃんから貰った、冷やすコレ。大気中の魔素取り入れで充電
に二時間くらい掛か」

「魔力、充填・・・。」

急速冷蔵庫に両手をかざし、無理矢理魔力を送り込んでいるらし
い。俺でも視認し理解できる程の魔力が迸っている。実際に声に出
して言ってるしな。

「もう、これで何も問題ないわ。」

「アツハイ」

そうして、魔法使いのお嬢ちゃんに作ったのを皮切りに。妹、ち
みっこ、ミラ、と結局全員分作ることを約束させられた。

暫くの間、店内には急速冷蔵庫の独特な。

ガヒョー！という音が響き渡り続けるのだった。

余談。

ちみつこ、ミラと2人分作り、卵が無くなったところでちみつこが無精卵生んでくる！とか言い出した時は、休憩中で水を飲んでた俺は、中身を思いつきり噴き出し発射してしまった。

12話 勧誘と旅立ち ★

505

人間は大まかに別けて二種類に分類できる。研究し、追求する者と、新たなものを創造する者。

◇

「お願いします！」

時間は昼下がり。

場所は交易都市ハーフ。その大通りから少し外れた所にある、俺の仕事場兼住居の小さな食堂。

ここで勇者として、近隣のトラブルを解決しながら、過ごした妹の旅立ちの日だった。

たった3日とは言え、勇者がここら一帯で活動した結果は凄まじく。妹が寝泊まりする、ここにも色々な人達が訪れた。

「彼の娘を……。いえ、私の家内を助けて下さり、本当にありがとうございます。ありがとうございます！」

「ありがとうございます。」

「勇者殿感謝致します。だが、聞き捨てならんな。だれが貴様に娘をやると言った？ 私はまだお前を認めた訳ではないぞ。」

「いえいえ、彼が時間を稼いでくれたから間に合っただけですよ。無事で良かったです。」

俺は、一緒に戦ったりは出来ない。だから、これらの言葉に籠められた意味や、実際にどんな騒動があったのか、届けられた言葉から想像することしか出来ないし、詳しい事情を聞き出すわけにもいかない。それはわからない。

だが、まあ勇者としてあらゆる事をこなし、結果を出し続けている事に対して届けられる数多くの感謝の言葉。

それらの報告を行う皆の顔は朗らかで、例え泣きながらだったとしても。それはどこか安心した雰囲気だ。

それらの事件の終結をカウンター越しに見届けていると、俺も嬉しくなってくる。

「魔物の討伐、お疲れ様です！」

「感謝の極み」

「結婚してください！」

「是非私を弟子に!!」

感謝、勧誘、労い、顔を売る。

各人様々な思惑を持ち、妹を目当てに殺到する人達。その多くがそのままうちで食事を済ませていった。一部の奴はその場で放り出したが、あらゆる層の人達から感謝されている妹の姿を見て。

『ああ、こいつは一人でよくやっているんだな。』

そんな感傷をたつぷり含んだ一言を思い浮かべながら、周辺地域での活動を終え、うちで食べる最後の昼食を取り、旅立ちの準備を整えた妹へと視線をやる。

「一緒に来てください!!」

身体を直角に折るかの様な綺麗な姿勢と共に発せられた言葉は旅の同行依頼。

胃が消化のために身体の血液を集めて働き、心地よい眠気が襲い掛かってくる。そんな気だるい空間に、良く通るハキハキとした勧誘の音が響き渡る。

「嫌」

そして、その誘いの言葉は。たった一文字の言葉で事も無げに切り捨てられたのだった。



「そんな事言わないで、お願いー。ねえねえ魔法使い様ー!!」
「やー」

お嬢ちゃんの肩を両手で掴み、前後に揺らしながら繰り返される勧誘の言葉。と言うか懇願。その答えは先程と同じ一文字。

同じ一文字ではあるものの、言葉にすると更に短くなっている。取りつく島もない。

今日も今日とて、持ち込みの分厚く重みがありそうな書物。それがかっくんかっくんと肩を揺すられながらも、読み進めているらしく、体制を変えようとしな。あれでちゃんと読んでいるのだろうか？

「この前の乱闘事件の時の防御魔法凄かったんだもん、お願いーお願いしますー。」

「やー」

お嬢ちゃんが身体を揺さぶられた結果、本を手放し落とした。と思いきや、小さな魔方陣を展開し、それに乗つける様に本を浮かべて、空中に固定した。

人差し指を右から左へとスライドさせる事により頁が捲られ、読み進めている。少なくとも身体の揺れで本が揺さぶられなくなった形だ。身体は今も揺すられているが、意地でも読書を辞めようとはしない。

「研究都市まででいいからさー。王様に頼んで作って貰った、そこにある秘蔵の書庫の入場許可書あげるからー!ねっ、道中だけでいいからー!」

「.....」

若干悩んだのか、集中が乱れたらしく、宙に浮いている書物が床へと落ちる。ゴトツ、って言ったぞ今。あれはそのまま普通に鈍器として使える重さの音だ。

ってか、それ勝手に譲渡していいのか妹よ。なんて頭の片隅で考え

ながら、助け船を出してやる事にする。

「あそこって滅多に入れない場所なんだろう？いい機会だし、少しでも助けてやってくれないか？」

「んー……。」

「特製のお弁当作ってあげるから。」

「兄さんのお弁当!?!」

同行者を釣ろうって時の餌にお前が食いついてどうすんだよ！

「帰ってきたら、なんでも作ってやるし」

「ん、わかった……。」

「いいの!?!」

「その代わり道中だけ。書庫への許可書も欲しい。」

「うん！ありがとー助かるよ!!」

魔法使いが仲間になった。

さて、俺が研究都市への道程を同行して、飯全てを担当する訳にはいかないからなあ。お弁当少し気合入れて作ってやるか。



「やったっ！久しぶりの同行者がいる旅だー!」

旅への同行を承諾した事により、勇者は両手を挙げて喜びを全身で現している。

彼女の手から解放された私は、床に落とした本を指先から発現させた魔法を使って回収する。

魔法。と、一言で言っても、それは奥が深い。

1人1人が体内に持つ魔力に自分の使いたい効果に近いものを想像し練り上げる。そして、体外に放出する際にキーワードになる言葉。

呪文や、魔方陣で特定の指向性を持たせて行使する。

体内に練り上げた魔力と、トリガーとなる呪文の種類が異なる物だったり、噛み合わないものであった場合、それは顕現せず、なんの効果も持たずに霧散。或いは粗雑な効果しか得られない。

過去行使された魔法で、一定以上の成果が得られたものや、理論上確立されたもの。それらの呪文、魔方陣が書物として残されている物がある。

それらは魔道書と呼ばれている。

簡易的な魔法については写し。

原本を見た誰か、或いはその魔法を使える誰かが書き移した物が、比較的安価で出回っている。

そして、研究都市。

魔法、もしくはそれに準ずる物の研究、発展を目的として作られた場所で、都市とは名ばかりの小さな所だ。

今では基本的に住民のほぼ全てが何かしらの研究者の町でもある。実用性の高いものから、何のために作られたのが全く分からない魔法や道具が大量に溢れている。らしい
実に興味深い。

が、私はまだ研究都市には行ったことがない。

そこに行かずとも、交易が盛んなハーフ。ここでは色々なものがある。未だに買うだけ買って手付かずのまま積み上げた未読の書物が沢山残っている。

需要に供給が追い付いている事は大変喜ばしいことだが、それを消化するまでは、ここをメインに活動するつもりだったのだから。

うん、まあでも。ここでの活動が終わったとしても、マスターのご飯食べられないのは寂しいから。たまには来ようかな・・・。

あの都市までの旅の同行。早急に済ませたい案件だったが、一度訪れた場所でなければ転移魔法は使えない。

場所を知らないのだから、そこに跳べる筈もない。

見ればいい訳だから、遠見の魔法を使えばいいとも思ったが、実

際に使つての実験は結果的に失敗だった。

距離が離れれば離れるほど精度が下がってしまい、靄が掛かったような映像しか見れなかった。はつきりと把握出来ずに転移魔法を使つての失敗はしたくなかったので、実験はそこで辞めておいた。

まあ、使えたとしても転移魔法は多人数同時には飛べないのだから、結果的に久々の足を使つての移動になるのは確定事項だったけれど。

若干気が滅入るが。遅かれ早かれ、いつかは必ず訪れたいと思つていた場所だ。

ああ、そこには一体どんな魔道書との出会いがあるのだろうか？
今から楽しみだ……。

お弁当、なんだろう……。

◇

「ありがとー、兄さん！」

「これ、この前の？」

「そうそう、お米だ。ってか、受け取つた瞬間に開けんよ。」

2人分の弁当を用意して、手渡したと思つた次の瞬間には中身を確認していた。世界を縮めるのが大好きな兄貴もびつくりのスピードだよ、止める暇すらなかった。

今回の弁当はご飯をメインに考えられた物を作ってみた。

薄く平らにご飯を詰め、魚の乾物。鰹節的な物を薄目の味付けをして均等に敷き詰める。そこに海藻。うん、海苔だね。海苔で仕切りを入れる様に乗せ、そしてまたご飯を重ねる。最後に胡麻を振掛け、そうして出来るのが。

うん、そう。海苔弁つて美味しいよな。

おかずは蜂蜜を軽く塗ってから焼いて、俺特製の甘辛タレで仕上げ

た、柔らかい豚肉。蜂蜜には分解酵素がどうたらで、お肉が柔らかくなる効果がある。仕組みは知らん。

それにサラダと、先日お嬢ちゃんが大量に買ってきてくれた砂糖。あれはプリンを作っただけでは使いきれず。

「余剰分はあげる。」

プリンを食べ終えた後の、若干不機嫌なお嬢ちゃんがそう言って来たのでありがたく貰った。その譲って貰った砂糖を使った甘めの卵焼き。そして最後にカラツ、と揚げた唐揚げとポテトを少々。

唐揚げの衣には味を損なわない程度のお酒を混ぜて、尚且つ二度揚げをすることによってパリパリにしてある。

先程の豚肉を柔らかくしたので、こちらは歯応えを重視した。

うん、素晴らしい。

あとタコさんウインナーとかあったら完璧やね。

久しぶりに弁当を作るのが楽しくなって、つつい洗物やら若干面倒な揚げ物まで作ってしまった。

「じゃあ、兄さん。いってきます。」

「おう、気を付けてな」

まるで、そこらにちよつと買い物にでも行ってくる。

そんな気安さで発せられた言葉や、片手をあげる仕草。

それに答える俺も白い髪に手櫛を入れる様に、頭を撫でてやりながら軽く言う。気持ち良さそうに目を細める妹。

根元から毛先まで、肩に少し掛かるくらいの髪の毛を優しく撫でて手を離す。

「……。」

「ああ、お嬢ちゃんもありがとうな」

妹の頭から手を離れた所で、こちらを見上げる様な視線に気付いた。特に何も言う気配のない彼女に改めてお礼を言う。

「……。」

相変わらず無言のまま佇んでいたのだが、おもむろに顴の広い三角帽子を脱いで両手でそれを持ち、再びこちらを伺っている。

「うん、気い付けてな。」

直接言葉にはされないものの、ここまでされて分からない奴はいない。先程の妹にやった様に、今度は長く、その腰より下まで伸ばされた金色の髪の毛の表面を滑らせる様に撫でる。

お嬢ちゃんの髪は動きを阻害しない為、とかそんな雑な理由なのだろうが、毛先に程近い場所をリボンで結んでいる。だからそれを崩すことをしないように、強くは出来ない。

「うん、いつてくる。」

やがて満足げに帽子を被り直し、小さな声で返事の声がする。相も変わらず表情はあまり動いていない。動いていないのだが、確かな満足感を感じさせる雰囲気だ。

こちらが終わったと思ったら、今度は妹が若干寂しげな感じでこちらを伺っている。無限ループって怖くね？

ってか、いくら大通りから外れているとは言え店の前でこんなことやっていると嫌でも人目に付く。しかも相手は勇者様だ。そんな有名な人がいるのだから、それも更に増す。倍プツシュ所の話ではない。

もう一度、妹の頭へと手を伸ばし

「何を遊んでるのじゃー？我も混ぜよー!!」

「ぐほお!!」

台詞と同時に突然脇腹に重い衝撃を感じた。

どうやら騒ぎが飛び火したらしい。横っ腹に鈍痛を感じて視線をやるとハーピーのちみっこにタツクルを貫っていた。何度も辞めろって言っているのに全く聞き分けてくれる素振りが無い。

普通にジャンプして飛び付いてくるのならまだいい。体重も軽いし、若い女の子に飛び付いてもらって嬉しくない訳がない。むしろ合法的に触れるのだから、抱き留めてやってもいいくらいだ。

体重が軽い、身体も小さい。が、それを補って余りある破壊力。ちみっこの場合助走を着けて滑空して、それはもう。

文字通り飛び付いてくる。さながら砲弾である。

正直たまったものではない。身長が低いので運が悪いと鳩尾に突き刺さる。

「おおお・・・！」

そして、今日の俺は運が悪かった。ちみっこがくつついたまま、脇腹に手をやり、膝を折って呻き、痛みには耐えようと蹲る。

こんな痛みの伴う、今日の占いコーナーは早急に辞めていただきたい・・・。

「兄さん、大丈夫？」

一連の流れを見ていた妹が近付いて来て治療魔法を掛けてくれる。裂傷が逆再生で閉じていくみたいに、一目見ただけで分かる効果はないものの、鈍痛が引いて行くのがわかった。

「おう、ありがとう。さて・・・。」

「あ、主殿？顔が怖いぞ！」

やってくれた喃。ちみっこ！

その日、妹と魔法使いの新たな門出を送り出したものは、1発の拳骨が響かせた重く鈍い音だった。

13話 悪戯と開拓 ★

（0）

自分を 相手を 傷付けることを恐れるな
傷を舐めあつても前進し続ける 停滞だけを恐れて

◇

「貴様がこの店の責任者か。」

「ええ、まあそうですね。」

顔見知りでは無い1人の男がこちらを指差しながら話しかけてくる。年齢は40過ぎたくらいだったはずだ。

知り合いではないが、彼の事はこちらが一方的に知っている。

「娘が世話になっているそうだね。」

「父上ー・・・。」

彼は所謂有名人だった。

男の背には1人の小さな影。

俺がちみっこと呼んでいるハーピイの娘ツ子だ。

目の前に立つ彼は、この世界で広いコネクションを持ち、あらゆる事柄に手を出し。尚且つその殆どを成功させてきた商魂逞しい人間の男だ。

この交易が盛んな町に一時は根を下ろし、家を即金で購入し、家庭を持った。

時にはここに住んでいる家族と一緒に、仲睦まじく休暇を楽しむ姿を散見されているが、仕事に関しては未だに現役バリバリ。

あらゆる場所に赴き。自らの目で見た物を仕入れ、それを売り捌く。

普通に考えたらあまりにも効率が悪く、財を成すには難しい。だが、彼は結果的にそれをやってのけた。

寂れた寒村。捨て値同然で手に入れた、粗雑な紙の束。これが、ある治療薬のレシピである事を補修、解説によつて手にいれ。知識を独占、それを安値で市場へと卸ろし多数の冒険者の助けとなった。

誰も使い方のわからなかった古い魔道具の使用方法の解明及び量産による普及。

古臭い壺を露店商から結構な値段で買い付けてきたと思いきや、名のある陶芸師。その無名時代の作品であり、仕入れを遥かに越える利益を得たりと。

妹と一緒にしていた旅を終え、ここに居座つてからの俺は基本的に他の場所に訪れない。精々町中の店巡り、遠くても徒歩での移動が可能な隣町ぐらいである。

そんな半引きこもりの俺でも、このぐらいは知っている。実際に旅してる間には、幾度も治療薬で助けられたものだ

彼を昔から知る人や、冒険者達なら更に数多くの逸話の数々を知っているのだろうが。まあ、そんな豪商人と呼ぶに相応しい。

羽振りの良く、赤い髪の毛に合わせるかの様に、赤く輝く宝石の付いた指輪や、腰に巻かれた赤い鱗のベルト。全身の至るところに赤い装飾品で彩った。

そんな赤い男が目の前に立っていた。



「はー、暇だ・・・。」

妹と常連のお嬢ちゃんが旅立ち3日が経過した。

なんととはなしに呟いた言葉。

小さい店内、それに返事する相手は居らず、そのまま調理台へと突っ伏する。

あいつが居たときは、勇者様、勇者様ー。なんて声と共にあらゆる人が、店内に溢れていた。

その妹がいなくなった途端にお客様が激減した。まあ元に戻った

だけなのだが。

自分の昼飯にありつくのすら覚束無い日があった、あの忙しさの反動なのか、普段通りの来客数に戻った今。出た言葉が先程の独白。

「・・・。」

とても静かな店内。そのままの顔を、カウンター席の1番端へと向ける。

最近だと2日と開けずに週に3回以上。妹が居た3日間に至っては毎日うちに来てくれていた常連さんが来ない。

当たり前だ、今彼女は旅に出ているのだから。

朝飯より前の仕込み中に突然現れて朝食をたかり、書物を読み、昼飯を食い、うとうとと船を漕ぎ、おやつを要求し、何やら調べものを始め、晩飯を完食し、料金を払って帰っていく。

魔法使いと言うと、研究以外に関心を持たず、不健康なイメージが先行していたが。あの健康優良児を地で行く、お嬢ちゃんを見ていると。そんな想像は容易く破壊された。

まあ他の魔法使いとか知らないんだけど。

無人の店内にいても仕方ないので、適当に自分の食事を済ませ、準備中の看板を設置。町へと繰り出す。お客がいないので、自分の為に手間隙掛けるのも辞めた。

久々に手にいれたご飯でちやつちやつと卵かけご飯を作って食べる。

うん、手間隙掛からずに美味しい。最高だね。

卵を一度凍らせたり、混ぜるときにバターを混ぜたりしても美味しい。俺も魔法が使えたりすれば凍らせたりとか出来るのかもしれないが。

こればかりは才能が物を言うので正直諦めている。鑑定士のおっさんは、少しは使えるなんて言っていたが学んでいないのであれば、魔力があったところで宝の持ち腐れだ。

特に目的も持たずにぶらぶらと町を練り歩く。

そういえば、そろそろ包丁研いで貰わなきゃなあ。なんて無理矢理散歩の目標を決めながら、無理を言っただけで包丁を打って貰った。ドワーフが経営する武器屋へと足を進める。

少し小さい身体に存在感のある髭。

小ささに反して全身には筋肉がしっかりと付いたゴツゴツした身体。それでいて手先が驚くほど器用な魔人。

竹を割ったかのような真つ直ぐな性格で、とにかく頑固な職人気質全開な小さいおっさん。

そんな魔人が経営する武器屋へ向かって、歩いていると。こちらに向かつて走ってくる影が見えた。

「……うーじいーどおーのおおー!!」

奴だ……。

人間と言う生き物は、とかく慣れる生き物だ。

楽しいことも経験によって、心の処女性を徐々に失う。

大変なことは要領によって、改善されて余裕が出来る。

悲しいことは時間によって、風化し忘れることが可能。

「主殿おー!!」

滑空して飛び込んでくるちみっこ。

未だにこれには慣れない訳だが、今回の俺は運が良かった。今日の占いなら大吉貰えるかもな。風に乗り立派な鉤爪の付いた脚が、地を離れる瞬間を偶然視る事が出来た。

それによって以前からずっと考えていた対策を使っただけ、迎撃する為の準備の時間があつた。

利き脚である右足を半歩下げ、爪先に重心を据え踵を地面から離す。

左腕は肩の高さで地面へと向け、右手は脇を締めて構える。

「ふっ！」

猛烈な勢いで飛び込んでくる影。その人間で言う右腕。右翼のつけ根辺りを左手で掴み、左足の力を抜き、体当たりの衝撃を受けず、逆らわずに受け流す。

「おっ？おっ？」

重心を据えた右足を、コンパスの針の様に軸にグルツ、と半回転。回っている最中に右手を、相手の腹に添え角度を約45度に調整。

「W a s s h o i ! !」

「おおおおおおっ!!?」

その日、ちみっこは空を飛んだ。

いやまあ、彼女の場合。ハーピイなのだから飛ぶのは当たり前なのだ。だが。

カタパルトからの射出の如くの急な加速が加わったの飛翔。もとい投擲。これが初体験だったらしく。

結構な距離をすっ飛んで行った後、体勢を整えている途中で、その速度が癖になってきたらしく、思う存分飛び回り、戻ってくるまでに数分を要した。

「主殿、酷いのじゃー！」

「いや、確かに俺の想像以上にぶっ飛んだけど。何度言っても辞めな
いお前が悪い」

自分の行いを棚にあげて、俺の行動に対して文句を言い始める。やれ抱き留めろだのなんだの言っていたが、正直半分以上聞き流した。

「大体主殿は女子おなじの扱い方をわかっておらん。」

「いや、キミみたいなちっさい子にそんな事言われても……。」

「失礼な！我はもう少して16じゃー！」

子供じゃん。

ハーピイの身体的特長も相まって、完璧に子供じゃん。

まあ、そう思っても口に出したりはしない。身体的特長に関しては失礼な話になるし。実際にこの世界では15から成人扱いされる。勿論結婚も可能な年齢だ。

「だから、私の羽繕いを手伝ってくれんか？」

「何がどうなってだからに繋がったのか分からん」

「女子の扱い方の練習だと思えばよかろう？」

・・・

「んー、ぺっ。んっ、ぺっ。」

で、結局始まりました。羽繕いです。

ふふん、と得意気なドヤ顔全開の彼女の提案を蹴って、コロコロと良く変わる表情や反応を観察するのも楽しそうだとは思ったが。

今回の飛び込みに関しては実害はなかった。なにより暇を持て余していたところだ。

ちみっこは今、顔の前に右腕を固定し、そこに顔を埋めて羽根を揺らし、もぞもぞと顔を動かしている。羽根をその小さな唇で挟み、引っ張って抜いて吐き出したり、左腕で羽根の流れを整えたりして、綺麗にしている。

場所は、人の行き交う町の中心に程近い公園、の役割を果たしている広場。そこにある慰霊塔。実際に誰かがここで戦って没した訳ではないのだが。

この町には戦争孤児を多く引き取り、育てる政策がとられている。

「私達の自己満足になるだろうが、親を亡くした子供達の為に、何か出さないか？」

と、町の重鎮達によって作られたモニュメントだった。

ここに訪れる親族を亡くした多数の若い男女。

家族を亡くした寂しさを埋めるためなのか、それを支えてやりたいと思う気持ちなのか。

過去と未来。

見ている方向こそ違うものの、ここで結ばれ恋仲になる人が続出した。

最初こそ厳かな場所であったものの、今では若いカップル達の待ち合わせや、家族との憩いの場所として使われる事も多くなった。

人が多ければ、交易が盛んな町の土地柄。その近くにも露店が出る。連日賑やかな場所として町の皆に受け入れられる事となった。

どうしてこうなった。

そう呟く町長の声を、会議に集まった皆が聴こえないふりをしたのは仕方がないことだろう。

結果的には性行。いや、成功しているのだから……。

閑話休題。

モニユメントの台座。

ここが人が座るちょうどいい高さである。

その為、ここで様々な買い物した人達が休憩がてら荷物を纏めたりする事もある。

閑話休題と一度区切って置きながら、早速の余談になるのだが。前世の記憶がある俺としては、この荷物の整理を見ていると、年に2回ある大型同人イベントで座り込み禁止場所の近くで、戦利品の分別作業に精を出す光景を思い出してしまう。

で、だ。休憩や今回の羽繕いの時にモニユメントの台座部分に座るのも大いに理解出来るのだが……。

彼女は何故か俺の膝上にちよこんと乗ったまま、動こうとはせず行為を開始したのだった。

「なんでここでやってんの？」

「んう？別によふあろう？ぺっ。減るものでもなからうに」

いや、減ります。主に俺の理性とか。

太股に横座りする形で乗っかっている小さい身体。肌で直接感じるちみつこの軽い体重。

いくら小さいとは言え、やはり女の子だ。決して肉付きが良いとは言えない身体なのに、触る箇所全てが柔らかいとかなんなのこれ。

女の子って不思議。

「ほれ、はよう。はよう。」

「わかったわかった。」

羽繕いのやり方とかわからんけど、とりあえず羽根の流れに逆らわないように指で撫で付ける。うーん、どれが抜いていい羽根なのか、さっぱりわからん。

「あー、極楽なのじゃく。」

だが、加減が全く分からないのも、なんとなく悔しい。撫でて羽根の向きを整えているだけで満足そうだけど。

太股に感じるちみつこの身体の柔らかさから、意識を反らす為に、彼女の反応を探りつつ色んな場所を撫でたり、指を櫛に見立てて羽根を搔き分け地肌に触るか触らないかの力加減で繰り返し指を通す。

「むふー。魔人の、人ならざる部分を触るなんて主殿も始めてじゃろ？どうじゃ？」

俺が撫で始めてからは、自分でやっていた羽繕いを辞め、完全に俺に身を任せているちみつこが、笑顔で問い掛けてくる。

本当に体当たりとか、勝手に調理器具とか弄つたりとかするのを辞めてくれれば、満面の笑顔共々完璧なのに。残念な娘さんである。

そんな見ただけでは分からない、若干残念な娘っ子の笑顔。回りからの好奇の視線に晒されている現状が割りといたたまれないです。

「あー、いや？この前ちょっと機会があつてな。初めてではないぞ」

「なぬ？そうなのか？我は家族以外だと初めてなんじゃがなあ」

「そもそも家族同然に暮らしてたミラがいるしなあ。」

「ずるいー、とかむーむー唸り。横座りの状態から近寄ってきて座り直し、今度は背中を俺へと完全に預ける。人の事を座椅子にしなから身体を揺らすちみっこ。」

そんな風に背中をぐりぐりと押し付ける様に動かれると非常に困ります、ええ。なんとか羽繕いを続行してはいるものの。改めて客観的に見てみると、俺がこいつを抱き締めてるっぽくなっているし。

よし、色々和不味い事になる前に思考を変えよう。

「そういやあ、本か何かで得た知識だが。鳥類の背中は触らん方がいいって聞いたことがある・・・。」

ふと、気になってしまった。

魔人の場合はどうなんだろう？

唐突な自分語りになつて申し訳ないが、俺は何か気になつたら確認しないと、気が済まない性分である。

それ故に、悪いとは思つたが特に悩むことなく実行に移した。

「んう？急に辞めたりしてどうしたのじゃ？」

「いや、なんでもない。ちよつとな」

右手を翼から離して、こちらに預けられていた背中を少しだけ引く事で離し、隙間に手を滑り込ませる。

「ひっ・・・！！」

あつ、やつぱ背中が苦手らしいな。

さつきまで身体を揺すつたりしながら、全身で俺に触つてた時は大丈夫だった癖に、手で背中を触つた瞬間に小さい悲鳴じみた声と共に全身が跳ねた。

これによつて二人の距離が少し離れた、自由に動かせるその隙に滑り込ませた手で悪戯する。

「そつ、こはダメ・・・！」

「いつもいつも人の鳩尾に突撃してくる罰。」

「だからってー！そこ、はっ!？」

爪を立てた指先で、肌を傷つけないくらいの力で背骨をコリコリと搔いてやる。そうしてやると面白いくらいに大きな反応を見せてくれる。

身体が小さいながらも頬を紅潮させ、僅かに漏れ出る吐息は艶かしい色を含んでいた。

「あ、ふ・・・!？」

成人しているものの、普段はその小さな身体に似合った行動しかない。天真爛漫な子供そのものの、そんな彼女が。

女の、雌の声を出している。

背中を弄り回しているのとは別に羽繕いを平行して行い、その間も彼女の更なる反応を引きずり出そうと、背中への刺激を絶えず与える。その幼い身体と艶かしい反応のアンバランス差を存分に楽しむ。決して羽根と背中以外には触れない。我が家の中であればもう少し踏み込んでも、2人だけの問題だが今は人目もある。

「んっ、んんっ!!」

背骨を指先で引つ搔かないように逆撫でしていき、うなじへと到達。首筋を親指と人さし指で揉み込む。こちらは背中に比べると反応が大きくは無いが、それでも指を動かす度にピクピクと小さいながらも確かな反応が帰ってくる。

首筋から再び背中を撫で付ける。先程に比べるとお互いの距離が少し離れていて、敏感である筈の背中が俺1人へと晒されていた。

「うゝ、んうゝ！」

うなじから出発した俺の手は、肩甲骨を背中を触れながら下へと降りろして行き、腰付近を何度も何度も上下運動させる。

よし、これくらいで許してやるか。

人が行き交う都合上、絶えず人目もある、俺自身が変な気分になつて止まらなくなる前に終わらせよう。

「よし、終了。」

「はえ・・・？」

右手の指で背中をぐりぐりといじり回しながら、動かし辛かったものの、左手で続行していた羽繕いを完成させ悪戯と同時に辞めた。

目をパチクリとしばたたかせるハーपीー人。

彼女の腋の下に手を差し入れて抱き上げ、隣へと下ろし羽繕い終わったぞ。と一声掛ける。

「・・・。」

しばらくの間フリーズし固まっていた彼女は、我に返ったのか両方の翼を眼前に持ってきて裏へ表へ何度か返したりして確認。沈黙を保ったままたつぷり数十秒。

「我を弄んだな・・・。」

やっと理解が追い付いたのか、顔を茹で蛸の様に真っ赤になつていく。プルプルと震えながら、蚊の鳴く様な声で訴えかけてくる。

「さて、な。俺はお前が言い出した通りの羽繕いを終わらせたただけだぞ？」

「ーッ!!」

そこが限界が訪れたらしい。

「父上に言い付けてやるー!!」

その言葉を最後に飛び立って行ってしまった。

見た目に違わぬ実に元気なちみっこである。

さて、武器屋のおっさんのところでも行くか・・・。

周囲の冷やかな視線を努めて気にしない素振りで立ちあがり、急ぐ理由もない俺は、その場で身体を捻るストレッチを行う。

ぐっ、ぐっ、つと。しっかりと身体を捻り。そこそこの時間のし掛かられて不自然な態勢のせいで凝り固まったであろう筋肉をほぐしてゆく。

そして、ゆつくりとそこから立ち去るのだった。

◇

「……。」

「……。」

そうして、ドワーフ印の包丁が新品同様の切れ味を取り戻すまでの時間を、おっさんが鍛冶をやっているのを見学。うちで休憩を取ると言うドワーフと一緒に帰ってきた後、暫くしたら来客があった。

全身のあらゆる場所に赤い物で飾り付けた、パツ、と見新手のスタンド使いに見えなくもない特徴的な格好をした男。

ちみつここに父上と呼ばれている男がこちらを見ながら沈黙を守り続けている。

うーん。まさか本当に連れてくるとは……。

俺達3人を置き去りに、ちみつこの母親は俺の作り置きしておいたプリンを嬉しそうに食べている。

父親だけなら兎も角、母親まで来るのは流石に想定外だったよ。三者面談、ただし母親も同行。事実上の四者面談である。

つてか、やっぱりハーパイって小さいんだなあ。

あれで成人。と言うか子持ちなんだもんなあ……。

見た目は生き写しと言われても信じてしまいそうなぐらい、ちみつこと似通った姿。ただその艶やかな髪の毛は、娘や父親の赤とは違う輝きを持つ。プラチナブロンドだった。

「父さんが母さんの翼に触るのにどれだけの時間掛かったか……！」
暫くの間黙り続けていたのだが、いきなり口を開いたかと思いきや

何を言い出すんだこの男は。ちみつこの頭を撫でながら、こちらを刺す様な、鋭い視線で睨んでくる。

そんな姿を見ていた俺は。町の有名人に敵対視されるかもしれない。そんな状況に焦ってしまっていた、どうしていいか分からず。鋭い視線から少しでも逃れようと、目を反らした。

その先にいるのは小さいハーピイの母親。

プリンを食べている彼女を眺めながら、現実逃避するように、思わず独り言を呟っていた。

『ロリコンかぁ・・・。』

こう言う時に前世の言葉は便利だ。

医者がカルテに書き込む内容を患者に分からない様に英語やドイツ語で執筆するみたいに、何を言おうがバレる心配がないのだから。

『ロツ、ろろろロリコンちゃうわ!!』

その誰も知らないはずの日本語の独り言に返事があつた。

その返事は男の低い声で。今この店内にいる男は俺を抜くと、目の前にいる商人と奥の席にいるドワーフ1人だけで・・・。

でも今日の前から声が聞こえて。

つまり、どういうことだっただってばよ?!

14話 詰問と鬼嫁 ★

く〇く

世の中は理不尽である。

でも、不思議と自分がやったことの責任は取らなくてはならないように出来ている。

ただ、理不尽なのはやってないことでも責任を負う場合がある事。

◇

『山』

『川』

『月が綺麗ですね』

『私、死んでもいいわ』

『yes ロリータ』

『no タッチ』

『はいダウト。お前めつき触つとるやん。むしろ孕ませとるやんけ！』

『小さい女の子が好きなんじゃない、好きになった女の子が小さかったんだよ！』

これはひどい。

どうあっても目に余る発言だ。思わず頭痛に耐える様に額に手をやり、似非関西弁で突っ込んでしまった。

『ぬるぽ』『ガッ』

やべえ、こいつ想像以上にやべえー。もーだめだよ、あんたもー！文章を起こすとしたら、改行すらさせて貰えないぐらいの即答だった。

最初は当たり障り無いところから攻めて、ちよつと踏み込んだ途端これだ。お仲間確定。

こちらの世界に生まれてからは、インターネットに触る機会なんてある訳がない。それこそ目の前の赤い男の見た目の年齢から逆算し

て40年くらいは触ってないはずだ。

それだと言うのに、この反応速度。脊髓反射かな？

そして、言わせておいてなんだが、月が綺麗ですね云々の下りは知っていて欲しくなかった。男に言われるとサブイボが立つ。

「あなた？」

「父上？主殿？さっきから何を喋っておるのじゃ？」

そんな阿呆なやり取りを行っているのと、脇から戸惑った様な声が届く。2人でそちらに顔を向けると、頭に大量のクエスチョンマークを撒き散らしながら固まっている母と娘の2人のハーピー。

「あー」

俺の日本語によるロリコン発言の後、俺達はカウンター席とその反対側で顔を付き合わせながら、話し合っていたのだった。その父親の横に座りながら訪ねてくるのは、彼の娘であるちみっこ。

これはどう説明したらいいものか。

「いや、父さんとコイツはどうやら同郷の出身らしくてな。お互いに予期せぬ出逢いでタガが外れたらしい。思わず地元の言葉で喋ってしまった。混乱させてすまないな。」

お？流石に商人としての活動が長いだけはある。口が上手い。咄嗟にそれっぽい理由がさくさく出てくる。

『ほう、経験が生きたな……。』

『うるせえ』

そして、日本語で話している状況にテンションが変なことになっている俺は、古い記憶の中だけにある言葉を引用して煽る。そして、さっさと避ける商人。

「へえー。父上がプリンを見て驚いていたのも、それが原因？故郷の料理？」

「うん？表情には出さなかった筈だが？」

「何年間父上を見てきたと思っておる。それこそ生まれた時からずっとの付き合いじゃぞ」

「あーもう、お前はほんつとにかわいいなあー。『うちの娘マジ天使』親馬鹿全開のフルスロットルである。

もつと威厳のあるダンディな。それこそ出来る御方つてのを、形にしたらこうなるって感じの人だと。そう思ってたんだけど。今の緩みきった顔で、娘の頭ごと抱きすくめていた姿を見てみると、そんな俺が勝手に抱いていた印象が幻想の如く消え去ってゆく。

まあ、人間とは、多面性の生き方をする生き物だ。

俺の行動に限定したとしても、常連を巻き込み暴走し、実験中の料理で反応を試し、楽しんでいるのも。魔人の身体をいじり回し夢中になるのも。そして普通に料理を作り、お客の皆に提供し安らぎを与えようとするのだって、清濁合わせて紛れもなく俺の1面だ。

だから、商人のこれ。

緩みきった笑顔での家族との触れ合いも、仕事中の隙の無さそうな立ち回りも、紛れもなく彼の一面なのだろう。

「ふーん、あなたの同郷の人ねえ・・・。」

「どうした、母さん？」

そんな風に愛娘を抱き締めている彼に、プリンを完食した嫁さんが席を立ち、彼との距離を詰め。その背後に立っている。

「あなたの赤い髪と彼の黒い髪、瞳の色だって、あなたの橙色と彼の茶色がかかったものと違って見えるわ。肌だって違って見えるけれど？」

「そ、そんなの人それぞれだろう？」

娘を抱き締めた彼を、背中から娘と旦那の2人同時に包み込む様
に、抱き締める。

所謂あすなる抱きの形を取り、そんなふわふわの翼に包まれたまま、細かく詰問され、結果僅かにだが動揺して見える男。

おいさつきまでの流暢な言い訳の羅列はどうした。一瞬そんな非

難めいた考えがよぎったが、彼のその挙動不審な態度を理解し、考えを改める。

いや、うん。お母さんめつき恐いっすね。食べるのに夢中だった、ついさつきまではポワポワと回りに和ませる程の柔らかい表情してたのに。

今は、まるで獲物に狙いを定めた猛禽類を彷彿とさせる。それはそれは鋭い目をしていらっしやる。

「へえ〜。」

「いや、うん・・・。」

優しく抱き締めている、筈だ。

だが何故か万力で締め付けている姿が幻視できる。

小さく軽い身体。その筈なのに。

それと真逆の凄まじい重圧な存在感。

あー、これは完璧に尻に敷かれてますわ。

「まあまあ、お母さん。うちの故郷ではそう珍しい事でもないんですよ」

「あら、そうなの？」

久しぶりに。もう2度と会えないと思っていた同郷の人物。こちらの世界で生まれ、新たな人生を開始して初めて会った同郷の男だ。助け舟を出してやるのも流鏝馬ではない。間違えた、吝かではない。

別に誤魔化す必要とかないのだけれど。一度彼が説明した手前わざわざそれを覆し、撤回して更に状況を悪くし事を荒立てる事もあるまい。便乗して説明と言う名の嘘を重ねる。

「色々な種族の人達が寄り集まった事によって出来た、そんな故郷なんですよ。」

「ふーん。」

「私の様な黒髪の方が大半ですが、彼の様な燃える赤い髪の方もいる

し、桃色の方もいらつしやいます。萌えるような緑の方も居れば、お母さんの様な綺麗な金髪の方も存在します。

ここハーフの町並みも魔人と人間がいるように、ぶつちやけなんでもありな所なんですよ。」

そう、なんでもありだ。

画面二の向次この話だけどな！

嘘は付いていない、事実暖色から寒色まで、あらゆる髪の娘さんが存在していた。

商人の男を腕に掻き抱いた姿勢のまま、こちらをジイツ、と見つめるハーピイのお母さん。

凄く鋭い、とてつもない眼力を宿しているが、間違いなく嘘は言っていない。ただ単純に、文字通り次元が違うだけだ。疚しいことは何もない、その鋭い目を正面から受け止め頬笑み返す。

いや、本当に怖い。

鋭く、冷たい目線と表情。こちらの心の底まで見抜かれているんじゃないかと邪推してしまう程の迫力。

「うん、嘘は言っていないみたいね。」

「ええ、信じてもらえたようですねによりですよ。」

そして、どれだけの時間が経ったのだろうか？

ほんの数秒の気もするが、同時に数分は経っていたとしても否定出来ない濃密な時間だった。

なんか小説なんかで良く見る表現だったけど、体験したのは初めてだ。どうやら俺には恐怖と言う感情を飼い慣らす事は出来そうにないらしい。

「旦那がしどろもどろになってたから、誤魔化しているのかと思ってたけど。貴方の眼に免じて信じてあげる事にするわ。」

嘘は言っていないみたいだしね。つい先程言った言葉と同じものを繰返したのを最後に、ほにやり。そんな擬音が聞こえてきそうな程、急激に表情を崩す。

それと同時に、包み込まれる様な抱き方の腕に力が僅かに籠り、旦那相手に身体を寄せて密着する。

いくら店内に人が少ない時間帯とは言え、イチャコラするのは辞めて頂きたい。独り身の俺に見せ付けるのは勘弁して貰いたい物だ。

「い、いつもの優しい母上に戻ったのじゃ。」

「そう、だね……。」

「あら？2人共酷いわ。」

明らかに安堵している2人を、先程とは同一人物なのか疑うほどの眩しい笑顔で、ニコニコしながらくつついている母親の姿がそこにはあった。

◇

「むーん……。」

カウンター席の半分を占領した商人一家との話が済んだ所で、店のテーブル席の方からの唸り声に気が付いた。ずっと唸り続けていて、話が切れたタイミングで俺が気付いたのか。たまたま今漏らしただけの声なのかの判断は付かないが、兎も角そちらの方へと視線をやる。

今現在も店内は、休憩と称して俺と一緒にこちらに赴いたドワーフのおっさん1人と、商人の家族3人で。俺を含めて5人しか居らず、閑散としている。

既にお昼時を遠に過ぎていたので、飲食店としては当たり前前の姿なのかもしれないが。

こちらの話聞いていないのか、巻き込まれるのを避ける為なのか、単に興味がないのか。おっさんは一貫して我関せずの姿勢を保っている。1人で持ち込みの酒を煽りつつ、チマチマとつまみをついついでいる。

うちのテーブル全てに備え付けられている、木を細く削り出した棒

——武器屋で使用し、捨てるだけとなった木材の端材を使って製作してもらった——お箸を使用し、たどたどしく食事をしていた。

「むむむ．．．。」

大きく無骨な手を使い、華麗で無駄の無い手捌きで鍛冶をこなす姿は、今は見る影もなく、箸の先端は震えてさえいる。

ただの個人的な。ふと感傷的になった時の気分のまま、我が儘で用意してもらった物だ。

だから無理して使ってもらわなくても、こちらとしては構わない。実際にここに訪れるほとんどの客はフォークなどを使っている。

真剣な目で箸を操っている姿を見ると何故だか嬉しく、そして若干微笑ましくもある。

美少女だったら百点満点の光景。

だが現実には非情である、目を擦ろうが、2度見しようが、そこに鎮座するのはサイズは小さいが。確かな存在感を放つゴツツイおっさんである。

「ふむ．．．。」

あの酒の進み具合だともう少し飲んで行くのだろう、と推測しつまみの追加を用意する。

例えそのまま帰ろうと、それはそのまま俺の夕食のオカズに早変わりするだけなので、それはそれで構わなかった。基本的に酒に合うものは、須らくご飯にも合うのだから。

食材が保存してある裏の部屋から、鶏肉の股肉を用意し、鶏皮を、先程研いで貰ったばかりの包丁で剥がして行く。

金網を用意して、塩を使って少し濃い目の味付けをしたモモ肉を焼いていく。ジュワジュワと肉汁が金網を伝い火へと落ちた音が。少々の焦げた匂いが部屋に満ちる。

焼き鳥とは、何処かに焦げの存在感を残した物が1番美味しいと思う。食べた口内から仄かに、香りから僅かに感じる、そんな食べ物だと思っっている。

部屋に焼き鳥の存在が届き始めると、それに気付いたらしいハーパイ一家の3人が視線を向けてくる。

過去に、ハーパイ相手の商売で気を使って鶏肉を使う料理を避けていた事があったが。結果的にそれは全くの杞憂だった。

とあるハーパイ三姉妹が客として訪れた際に、私達にも肉を出せー、と苦情を貰った事があった。

内心、冷汗を滝のごとく流しながら出した鶏の料理は欠片も残さずに、旨そうに完食し。

私達は鶏肉の事を気にしたりしないよ。との事を言い含められ、帰っていった。

現に今、目の前で瞳を輝かせているちみつこと、ついでにその父親がいる。

残った皮は小さい鍋に、マーガリンもどきを油の代わりに投入し、パリパリに揚げる。揚がりたての鶏皮には、しっかりとしたマーガリンの香りが移り、実に食欲をそそる。こちらは塩と胡椒多目でピリりと仕上げる。

串を用意するのは手間だったので、前世の焼き鳥を知る俺から見たら少し不恰好だが完成だ。

そして、何を勘違いしているのか、出来上がったものを今か今かと待っている商人。

「ちよっ!?!」

を華麗にスルーして、ドワーフのおっさんの元へと配膳する。

彼は焼き鳥を持ってきた俺を一瞥すると、たどたどしくはあるが、箸でしっかりとそれを掴み取り、噛み締める様に味わって食べている。

そして、おもむろにコップに半分程残っていた酒を一気に流し込み煽る。口の中に残る濃い味を酒で洗い流し、大きく息を吐くと、普段

の仏頂面が僅かに和らいでいた。

「つぶはぁー!」

「美味そうに呑みますね。ぐゅっくりどうぞ。」

うむ、と返事をする彼に背を向け調理台へと戻ってくる。そこで改めて先程のテーブルを盗み見ると、再び箸の練習へと戻っているドワーフが1人。

そして……。

「主殿ー、お腹減ったのじゃー!」

「俺にも焼き鳥、あとなんか適当にお酒」

「あら?まだこれから仕事があるでしょ?駄目よ。」

「そんない。」

「ごーはーんー!!」

「貴方がこの子を慌てて連れて行くものだから、お昼ご飯も食べてないからね、ここで遅めのお昼にしましょうか」

「わかりました、では少々お待ちを。」

「やったー!!」

女が3人で姦しいとは良く言うけど、別に女じゃなくてもそれは変わらないらしい。そんな一家の姿に小さく笑みを浮かべ、もう一度先程の行程を繰返す事によって、焼き鳥をメインに据えた遅めの昼食を作り始める。

「あ、それと主殿?」

「ああ、はい。何でしょうお母さん?」

再び金網に乗せた複数の鶏肉達から肉汁が溢れ出し、僅かな焦げの香りが感じられる頃に、ちみっこの母親から話し掛けられた。

膝に愛娘を乗せた旦那から離れ、その隣の席に座り、こちらに視線を向けている。

「今回は知らなかったって事で特別に許しますけれど、ハーピイの背

中は鳥達と同じでとても敏感なの。」

「はい?」

そう言つて、ごごそと指の存在しない腕を使って器用に懐から1つの卵を取り出す。なにやら隣のちみっこが赤面し視線を反らしている。座りが悪いのか、もじもじしている様にも見える。

「特に女の子はね、背中を撫でられると色んな意味で高揚しちゃうの。これも貴方のせいで産まれた卵ね。」

「そうだぞ!母さんが夜にねだつゴハア!!」

横合いからとんでもないカミングアウトが飛び出しそうになった瞬間に、そちらをちらりとも見ずに脇腹に肘打ちを入れ強制的に黙らされる赤い男。

恐らく完璧に鳩尾に捉えられたのだろう。そんな苦しそうな呻き声が漏れだす旦那を尻目に、卵を俺へと手渡してくる。

「今回は初めてだし、この子もそんなに怒っていないから許します。けれど。だからと言って、くれぐれも、軽々しく、安易な考えや、軽率な気持ちで、触らないであげてね?」

「.....」

顔全体を見ていると、ニコニコと笑顔に分類されるであろう表情で、一字一句ゆっくりと、優しく注意するみたいに、俺に言い含めている。だが、その目だけは先程の詰問していた時の眼力を取り戻していた。

「返事は?」

「はい。」

その迫力に蹴落とされ言われるがままに返事をする。気合いを入れて相對するのならギリギリ耐えられる視線も、急に向けられるとキツイものがある。

そう。今は、これが精一杯。

脇腹に手を添え、痛みに耐えながら顔を青くしている赤い男に、顔全体を赤面させている娘、そして満面の笑みを浮かべる綺麗な金髪の母親。

なんとなく信号機を彷彿とさせる3人。

部屋にはドワーフのおっさんと、商人のおっさん。

2人の唸り声が重なりあい、妙な静寂が部屋を支配する。

焼き鳥の焼ける香りが部屋に充満し、僅か以上の焦げの香りを鼻が察知するまで、ちみつこが産卵したと言う卵を手には、俺は動けないのだった。

15話 雇用と主人 ★

505

人間誰であろうと大なり小なり苦勞している。
苦勞していないと言う人間は、努力をしている。

◇

「店主よ、私を雇ってくれないか！」

とある昼下がり、狭い店内。

そこに凜とした声が響き渡った。

声の主は、ここ最近になつて時間帯に頓着せずに来店してくれる様になつた蜘蛛の魔人。

その大きな特徴は、背中から腰に掛けての位置に付いている、自らの身体より大きい3対6本の、どこまでも黒く、無骨な、それでいて部屋の灯りを反射する程にキチンと手入れの行き届いてた、外骨格に覆われた頑丈な蜘蛛の脚。その脚と蜘蛛の腹を持つ女性。

そんな彼女が発した声は、先程店内に響き渡つたのと同様、とても良く通る。例えば人のごつた返す街中であろうと聞き逃すことはないであろう声だった。

事実、街中で雑談を交わすくらいには仲良くなつた彼女には、買出しの時や町をぶらついている時に何度か呼び止められている。

その声が。立ち振舞いが余りにも堂々としているからか、それに釣られて周囲の視線が集まるのは少々居心地が悪く感じるのだが、元氣な挨拶と言うものはそれだけで良いものだ。

顔見知りでもなければ、すぐに興味が失われ。各々が安売りされている物や、掘り出し物を探すと言う自分の目的に向けられ、反らされて行く複数の視線。

それらに僅かな間だけ晒される事等、些末な事に思えてくるぐらい

には良いものである。

「さあ店主よ、返事を聞かせて貰おうか！」

「いや、何の前触れもなく急にそんなこと言われてもなあ……。」

バツ、つと。蜘蛛で言う所の触肢に当たる部位。人間で言う手。それを前へと勢い良く突き出し、声を張り上げている彼女。

少し前までは試験がどうかと言って、色んな料理を注文していた彼女だが。

最近だと、その日の朝市や、野菜を持つてくるミラの宅配物から多目に入っている物から見繕って作る、日替わり定食を好んで注文していた。

なんでも、自分では最低限しか出来ない料理。それを近場でーと、言うか目の前の席でー色んな工程を見ているのが楽しいらしい。

今日の場合であれば。朝市で安く手に入った魚。それをメインに据えた焼き魚定食。それを捌いている所から焼き上がるまでを目の前の特等席で観察し、完食。

最後に必ずデザートのプリンを食べてから帰っていくのが通例になりつつあった。

あつたはずなのだが……。

今回はその通例が適応されず。食後のデザートを完食後。いつも通りであれば、すぐに席を立つはずなのだが。今回はそうはならなかった。

あまり長居をする事のない彼女の、そんな行動を怪訝に思っていると、ひと息付いた後、出たのが先程の雇用に関する話だった。

「第一うちはそんなに繁盛してる訳でもないし、狭いから1人でもそこそこなんとかなってる。従業員を雇う程の店ではないぞ?」

「そうか。ちなみに私は今、住所不定無職だ!」

ちよつと待って。何でちなんじゃったの!?

しかも、そんな大声で誇るように言う内容ではない事を、何故、今、ここで、ちなんでしまった!?

「店主よ、私は今。貴方のせいで住所不定の無職だぞ。」

「は？俺なの？」

「そうだ、責任取ってくれるだろう？」

「ええ……。」

そんな立板に水の如く、知らない知識を立て続けに暴露され続けた事から始まる騒動は、いつものような毎日が、普段と少し違った事が関係あるのだろうか？



「お魚お魚ー。 やつきぎっつかなー♪」

ハーピー一家の騒動を終えて数日後。最近では少し珍しい、ミラと2人で朝食の準備をしていた。

彼女は今、こちらに聞こえるか聞こえないかの小さな声量で、小気味良いリズムの自前の歌を口ずさみながら魚の準備を手伝ってくれている。

ミラから、簡単な下処理を済ませて貰った魚を受け取り、円を描く様に包丁を入れて頭を落とし、背びれの側面から骨に沿うように包丁を入れ、身を開く。

手を止めずに包丁を動かしつつ、そんな彼女の上機嫌な姿を眺める。

少し前までは俺達、二人での食事が当たり前だった。

だったのだが、今では魔法使いのお嬢ちゃんやら、小さいハーピーだったりが乗り込んでくる為に、2人で落ち着いて食事をする事が、ほぼなくなっていた。

もちろん、賑やかなそれが嫌いな訳ではない。おふざけも行きすぎると俺が怒ったりもするが。1人で食べる食事とはどれだけ凝って

いても味気のないものだ。

「おっさっかなー♪おっさっかなー♪」

種族の性質上、母親1人によつて育てられた彼女にとつて、俺という存在は。ここの交易都市ハーフに住む、年齢の離れた兄。それと若い父親を足して2で割つたら3余つたみたいだな、そんな存在。

自分で言つてて良く解らなくなつてきた。

お父さん嫌いとか、兄さん臭いとか言われる事なく。

洗濯物を分けたりとかもされず。真つ直ぐに育つてくれた、可愛い魔人の女の子。

ただ、ちよつと。いや、少し。いやいや、だいぶ距離が近すぎる、そう思うことが事が最近ちらほらと・・・。

例としては、今朝。

そんな彼女と2人で朝市の買い物をしている時。

「はー、寒いねえー。」

唐突に横から白々しい声での訴えの聲が上がった。

この世界には、かつての俺が生まれ育つた日本の様なハッキリとした四季は存在しないもの。確かにここ最近は秋から冬に移り変わる頃の肌寒さがある。

その気温の低下も、朝にもなれば更に増す。

もちろん変温動物の。人よりも蛇に近い体質を持つラミア族の彼女が、その低気温を相手に何の対策も取っていない訳がない。

むしろ、身体のラインが余裕で隠れるほどに色々な物を身に纏いふわふわのもつこもこだ。

そんな着膨れした彼女が、体温低下を防ぐためとか、人が多いからはぐれないようにするため。とかなんとか矢継ぎ早に言葉を重ねてくる。

上半身だけなら普通の成人女性と変わらない位置にミラの頭が来

る。だが、いくら人が多いと言ってもラミアである以上、避けられないのが下半身の大きさと、移動した軌跡に開く人の波。

その開ける現象だが、何も見た目やらで忌避され避けられて出来ない訳ではない。ラミア族の移動後の尻尾を踏まない様に周囲の人達が気を付けながら移動する為に、人の流れにちよつとした指向性が出るのだ。

物理的に人の流れを変える程に存在感のある、そんな彼女を簡単に見失うわけがない。

「ほら。」

「んふ〜♪」

実直な良い子に育った弊害なのか、こいつは嘘が下手だ。

苦手な嘘で必死な姿を微笑ましく思い。わざわざ無粋な指摘する事をせず、こちらから手を取ってやる。

すると、パツ。と花が咲いたような笑顔になり、繋いだ手をにぎにぎと確めるように握り返してくる。

その繋がった手を周囲に誇示する様に、移動している間、少し大袈裟なくらい前後に振ったりもしていた。

そんな微笑ましくも少し恥ずかしい買い物の様子を思い出しながら、捌き終わった魚を焼いてる。

そんな時だった。

「あー、良い匂い。」

匂いに釣られたらしい、ふらふらと何処からともなくやって来る口リコンンツ!!

相も変わらず全身の至るところに、赤い装飾品を身に付けた商人が来店してくる。扉の前にはきちん準備中の看板を設置していたにも関わらず、だ。看板を無視し、さも当たり前かのように席に着いた。

「まだ開店前だよ、看板見えないのかよ。」

『こまけえこたあいいんたよ!』

その乱入に対する軽い不満を訴え、返ってくるのは朝イチから元気ハツラツなジェスチャー込みの日本語による返答。

不毛な言い争いと、形ばかりの抗議を終えた彼を加え、俺は一匹多く焼くことになった魚と、その準備に取り掛かる。

「こう色々作つてると醤油が欲しくなるよ。」

「塩も悪くはない。いや、素晴らしいものだ。だが、そうだな、魚の種類によつては欲しいな。」

「なんか近いもんとか知らないのか?」

「いや、生憎だが俺も作り方とか知らない。そもそも原材料の大豆がそれに近いもんを見つけないと。俺の仕切つてる流通範囲内では、まだ見た事もないな。」

「ん〜?」

余り接点の無く、前回の騒動の場に居なかつたミラは。俺と彼の仲良さげな会話を見ていて暫くの間、不思議そうに首を捻っていたが、朝食が完成に近付いた辺りでどうでもよくなつたらしく、盛り付けの手伝いをしてくれた。

皆の前に食事が出揃い、手を合わせ。異口同音で「いただきます」をした。俺と商人はともかく、こちらの世界ではあまりこういう習慣は無い。

教会に勤めている方々なんかは、お祈りとかするのもかも知れないが。少なくとも俺の交遊範囲内では教会関係者の人が居らず、その真相は分からない。

だが、俺が育ての親代わりで一緒に暮らしていたミラは。幼い頃に、俺がしていたこの行為を不思議そうに見て、初めは理解を示さかつたものの。

幼い子供が意味も分からず親い人の真似をして、それを見た親や、家族が喜ぶ。そうしたら、子はその笑顔と雰囲気で、それを良いことだと思い、繰返す。そして、やがて定着する。

ミラもいつしか、この挨拶を進んで真似し、この習慣はいつの間に

か彼女の母親にも伝播していた。

「あー、油の乗った魚はいいねえ。」

「全くだ。」

箸を使い骨を次々と取り除き、食べやすい様に身を解していく赤い男。俺は個人的な好みだが、骨を取り焦げ目を付けた皮を一緒に頂く。その苦味とパリパリの触感が好きだからだ。

「ん〜・・・。」

そして、むんむん唸りながら魚の骨と格闘しているミラ。昔に比べると格段に上手くなったミラの箸捌きだが、まあ魚の骨は難しいのだろう。ドワーフのおっさん程ではないにしろ、たどたどしい箸裁きで骨を取り除いている。

「今度見掛けたら、あの骨いっぱい魚買ってきてやるからな。」

練習の為にな。そんな一言を付け加えながら言い放つてやったら、気分を害したらしく、ムスーツ。つとした顔で頬を膨らませた後、残っていた魚を、大口を開け骨もそのままに放り込まれ。

わざわざこちらに聞こえる様にバキバキと音を起てながら噛み砕かれたソレは、彼女の胃袋へと消えていった。

オレサマオマエマルカジリ。

うん、魔人って凄いなあ。ぼくにはとてもできない。

「突然すまなかつたな、ごちそうさん！」

「まいどありー、二度と来んな。」

そんな少し意地悪をした朝食を済ませ、忙しそうに取引へと向かう男を送り出し。母親の所へと戻っていくミラを送り届けた。

「ほれ、いくぞ。」

「ん〜・・・ん。」

暫くの間ぷりぷりと不機嫌だった彼女は、一緒に歩いている時に、

どちらともなく自然と手を繋ぎ。家まで距離が残り半分には差し掛かる頃には、いつもの笑顔に戻っていた。

そんな少し慌ただしい朝の時間を終えて、昼飯には早く、朝飯には遅い。

「邪魔するぞー!」

「おう、いらつしやい。」

そんな微妙な時間に彼女は訪れた。

うん、わざわざ今朝の記憶を持ち出しといてなんだが。今回の訪問と今朝の出来事全く関係なかったな。

◇

「相変わらず見事なものだ。魚を扱う店は他にも見てきたが、ここほど手際の良いところはなかったぞ。」

蜘蛛の魔人である彼女が訪れる度に行われる行為。

まず特等席。調理台を挟んでの対面に座る。そして、日替り定食の献立を細かく尋ね、全てを聞き終えたと注文する。

そして、その4対8つある複眼でジイツ、と。こちらの調理風景を飽きもせず眺めている。その姿に、つぶらな瞳をしたあの蜘蛛を幻視しながら作業を続ける。

そう、獲物に飛び掛かるタイミングを見計っているハエトリグモだ。じいつー、つと。俺の手元や調理器具に。穴を開けようとしているんじゃないかと思う程に凝視してくる。かわいい。

「へいへい。」

そんな内心を悟られないよう、素っ気ないおざなりな返答になってしまうが、勘弁してもらいたい。つぶらな瞳に捉えられており、割りと余裕がないのだから。

幸い、あちらも気にしていないらしく、突っ込まれたことはない。品質管理の問題が付いて回る為、火を通したりする事でしか安全に

提供出来ない。よって生では商品にはなりえない、これは腹痛とかその他諸々のダメージを含めて身を持って実証済みだ。

である以上、生で店に出す事は出来ない魚だが。

S U S I の発祥である日本出身の身としては、魚の扱いには負けていられない。ただの個人的な意地だけだ。

大体米だって少し前に、狼の魔人と一悶着起こした結果、やっと手に入った物だし。

「うむ、美味しい。」

「口に合ったようだなによりだ。」

軽い日々の雑談を交えつつ、出来上がった日替り定食を直接手渡しによつて配膳する。彼女が食べ始めたのを確認してから、完成に時間の掛かるプリンの下準備を平行して進める。

器を用意し、卵を混ぜる。

「今回の魚の出産地域はーだっただったか？」

この味付けはーだな、付け合せはーだ。」

こう、味がどうか、焼き加減が良いとか、こちらの意図した事を事細かに拾い、説明されるのは少々むず痒いものがある。

魔法使いのお嬢ちゃんよろしく、黙々と脇目も振らずに食べ進めている姿を眺めるのも好きだが。少々話が長いしても、喜んで、なにより笑顔で食べてくれているのだ。邪魔はすまい。

そんなこんなで、食事が終わり。

デザートを完食した後、発した言葉が先程の雇用に関するもの、と・・・。

「と、言うか俺のせいってどうゆうことなんだ？」

「いやなに、私の主が HALF に訪れた際に、食事をする為の場所を探す事。これが私の、実質最後の仕事だったのだよ。」

「ふうん。あー、なんか合格とか不合格とか色々やってたな。あれって結局どこに決まったんだ？」

俺の知っている店ならもう一度訪れ、知らない店であれば名前と場所を聞いておこう。独りで店をやっている以上休みは簡単に作れる。

後で常連に文句を言われる可能性があるが、食べ歩きが好きなのは、好奇心で休むことがザラにある。気になるんだから確かめないと落ち着かない。仕方ない事なのだ。

「うん？何を言ってる、ここだぞ？」

「COCO？ふうん、聞いたことな・・・ん？」

カレー、いや。カレーは俺がこの前作ったのが生まれ変わって初めて食べたものだ。美味かった。とか何とか想像を巡らせている途中で違和感に気付いた。なんか彼女と俺のイントネーションが違うな。

「こ→こ←？」

「なんだ、その変な鈍りは。そうだ店主よ、ここだ。」

「いや、少し待ってくれ。確かあんた相手に出した料理の半分くらいは不合格判定じゃなかったか？」

そう、彼女とのいざこざがあつてプリンを振る舞った時以来何度も来てくれた彼女だが。その実、その判定は厳しく。先のとおり半分くらいは不合格になったのだった。

余談だが結構凹んだ。そして聞けば改善点なんかも教えてくれたので、僅かながらも改良が進んだりもした。流石にお偉いさんの護衛ともなると良いもん食ってるね、舌が肥えてらっしゃる。

「そうだな。だが正確には半分も合格した、だ。他にも同じくらいの店は何件か見付けたんだが。」

「なにそれ、気になる。って、今は其れ処じゃない。と、なると。あんなの護衛対象の主人が来るって事なのか。」

「そうだ。ついでに私の育ての親でもあるな。言つてなかったか？」

なにそれこわい。

義理の娘と知らなかったとは言え、お偉いさんの可愛い娘さんに全力でセクハラをかましてしまった俺。そんな店に、親本人が来ると言う。

もしミラやうちの妹にそんな事をやらかした奴が、うちに来たら。俺だったら思わず手を出してしまうかもしれない。娘さんは娘さんでここで雇って欲しいらしい。逃げ場もない訳だ。

「それで、どうだ？自慢じゃないが結構やるぞ、私は。」

自らの胸に手を添え自慢気な表情で言う。そんな彼女を眺めながら頭の中で損得勘定を行う。

そこそこの蓄えは、ある。人手は、少し足りていない。今まではひっそりもやっていたこの店も、妹である勇者が訪れてから少し顧客が増えた。人手が足りないのも事実だが、今のところ回ってはいる。ここで彼女を雇う事は出来なくはない。だが、余計な火種を抱えるのは良くないんじゃないだろうか。

「うん、すまないが。この話は断わる。」

「え……。」

熟考を重ねた後、まだこちらが言い切る前たと言うのに、先んじて意図を汲み取ったのか途端に蜘蛛の脚を含め縮こまる目の前の存在。

「うん。いや、こちらこそ突然すまなかった。」

「すまん、とりあえず。あんたの主が来たら全力で腕を振るうのは約束しよう。だが、こちらも今現在困っていないんだ。だからら」

「そうだな、飲食店に蟲は良くないもんな。」

「……。」

「店主を相手にしてから少し勘違いをしてしまったみたいだ、すまない。忘れてくうひゃあっ!?!」

「……。」

「なつななな、何をする?!」

『別にその魔人の身体を理由に断つたんじゃない。』

ただ、そう言葉で伝えればいいだけの話だ。言えばそれで終わる問題でもある。だけど、俺はそれをしないで彼女の身体を抱き締めていた。今にも泣きそうな、簡単に崩れそうな笑顔を見た瞬間。その姿に幼い頃の妹を重ね合わせ、咄嗟に行動へと移してしまっていた。

最近明るく振る舞う様になった彼女は、まだまだ吹っ切れていないらしい。当たり前前だ。生まれながらの問題なのだから簡単な訳がない。

俺だけで1人の人間の価値観を変えるなんて、そんな大それた事はできる訳がない。

「店、主・・・？」

でも、放っておけなかった。

抱き締めた事によって小さな身体だと改めて認識する。その身体が、触れ合う事によってぞくぞくと震えているのもわかる。

なるべく優しく。異形の脚を、背中を撫でてやる。

何度も身を振って逃れようとしていた彼女だが、いつの間にか弱々しい抵抗はなくなっていた。

「仕事が今の状態で回るには回る。だが人手が欲しくないわけじゃない。いい。」

「・・・。」

暫くして、腕の中の抵抗もなくなり数分がたった頃。

もじもじと所在なさげに動いてる彼女に声を掛けた。

こんな時だと言うのに根性が捻くれてる俺の口からは。素直な言葉は出て来なかった。

「だから、前向きに考えておこう。」

「もつと分かりやすく・・・。」

相手側から初めて力を込められる。あちらから抱き返されながら顔は見えないもののそんな声が聞こえる。

その声に小さく溜め息を付きながら、俺は口を開いた。

「お前が欲しい。」

「ツ……!!」

うん！」

こうして、1人で気楽にやっていたお店に。

1人の従業員が働くことになった。

16話 御手入れと淫魔

（05）

私は悪くない。

◆ カタタツ、と微かな音が鳴る。

ベットにうつ伏せになって就寝していた自分は、それを聴覚と、床に6つの脚の先端部を触れされる様に投げ出していた事によって拾った振動。

その2つの要因によって目を覚ます。

「んっ……。」

未だにハッキリと意識は覚醒してはいないものの、今までの生活で身体に染み付いた習慣は簡単には抜けず。

結果、先程の小さな物音によって眼が覚めてしまった。

「ここは？あ、そっか……。」

触肢である腕を立てる事によって上体を起こす。上半身を支える手から伝わるベットの感触、回りを見渡した時の見慣れぬ壁や床、その違和感が。自分が長年住んでいた家を出た事を思い出させる。

あの人の護衛を辞め、最低限の荷物を纏め、飛び出す様に家を出た。ここは今日から世話になる、あの変り者の店主が営む食堂のある町。交易都市ハーフ。

その中心から少し外れた場所にある宿。

お金は普通に生きていくだけならば、しばらく何もしなくても大丈夫なくらいはある。今までの仕事、親代わりであったあの人の護衛。最初は私の個人的な我儘で始めた事であったが。

『金を払うって事は仕事に責任を負わせ、金を貰うって事は仕事の責

任を持つこと。金銭のやり取りがない仕事程、信用ならない物はないよ。』

まあ僕の娘であるキミは、そんな事しないと。他でもない僕が知ってるけどね。笑顔とそんな言葉と一緒に、私は少なくとも金額の給金を貰っていた。

今現在、自分が利用しているのは。

魔人向けに少し部屋が大き目に作られた、全部屋が個室の宿だ。

一等地や町の中心にある高級な宿でもなく、町外れにある施設の乏しい安宿でもない、少しだけ高級な普通の宿。

朝と夜。日に2度の日課をこなす為に個室と言う点だけは妥協しなかったし、出来なかった。

僅かに靄が掛かった意識を、少しでも鮮明にしようとして軽く頭を振る。改めて先程の物音を異形の脚を使い、地面からの振動で読み取る。

基本的に王国で私の存在を知る人はいない。護衛としての仕事も辞めた私には、もはやそんな用心する必要など皆無なのだが。今までの習慣が自然とそうさせた。脚から伝わる数々の情報。音、歩幅、体重による床の軋み具合。

そして、廊下をこちらに向かって歩いていく相手が、数日前からお世話になっている宿。つまりこの従業員の物と一致する事を理解し、6つの脚を床から離して自然な位置へと戻す。

「おはようございます。いつもの、ここに置いておきますね。」

「ああ、おはよう。助かるよ。」

いつもの。そう言って静かに開けられた扉。そこから程近い場所に置かれてたもの。

水の張られた桶。それと手拭いにも使われている、清潔に保たれている布切れ。それら2つをベットから起き出して手に取る。

蜘蛛の性質上なのか、私個人の性格なのか、もしくはその両方か。自分で言うのもどうかとは思いますが、私はとても綺麗好きだ。

一度身体の汚れに気が付けば、気になって仕方がないし。朝は起き抜けの一番最初にする事は、決まって全身を拭く事。勿論夜の就寝前にも御手入れの時間は取っているし、清潔な状態を保ってはいるのだが。

冷たい水を使つての目覚ましの代わりも兼ねている、朝の御手入れは基本的に欠かさない。

「はあ。」

桶に張られた水に布切れを浸し、過分に行き渡つた水分を絞り適度な状態にする。そして冷たくなつたそれで、まず顔を拭い、少しでも意識を覚醒させる。水を吸つて冷えた手拭いが気持ちよく欠伸混じりの吐息が漏れる。

「ふうー・・・。」

次いで服を脱ぎ去り、肌着になる。

途中に何度も手拭いを濯ぎ、首から肩、胸から腹。そして背中、下半身と順番にしっかりと拭いていく。人と変わらない肌を持つ部分順次こなしていき。

露出した肌の御手入れ全てを終え、やがて最後に残るのが・・・。

そう、蜘蛛の部位。

その脚を身体の前へと持つてくる。手となっている触肢に比べると大きく。先の従業員の足音と振動。板越しであれば体温等の細かい情報を読み取る事も可能な、黒い外骨格に覆われており、粗雑な刃物であれば通さなくらい頑丈で。

そして、短時間であれば壁や天井も移動する事も出来、人間の脚で歩くよりも静かで、突発的な制動をも意のままに操る、無骨で。そして何よりも。

「んっ・・・！」

敏感な場所。

生まれてきて、物心付いた時から殆ど欠かす事なく繰り返してきた日課。それが時折違う意味を持つようになったのは。変わったのは……。

「くそつ、あの店主のせいだ。違う、違う……！私は悪くないっ……！」

早朝だと言うのに、顔に熱が籠り熱くなる。上気したように頬が赤くなるのが自分でも理解できた。今では先程までであった眠気等、元より無かったのかと思うほどに意識もハッキリと覚醒している。

外骨格に覆われた脚を磨く様に少し強めに拭く。

敏感だからと弱々しくなぞるやり方で御手入れをしていると、あの時の事を思い出してしまいそうだったから、荒っぽくゴシゴシと磨く。磨く。雑念を挟ませる隙など与えない。一心に磨く。

「……。」

そして間接部へと辿り着く。ここが問題の場所だった。繋ぎ目であり、他の通常の外骨格に覆われている所よりも弱く、乱暴には出来ない箇所。

水で手拭いを濯ぎ、そつ、と触れる。

先程と同じ水だと言うのに、より冷たく感じとれる。身を切る様な冷たさにビクツ、と身体が小さく跳ねる。

そしてなにより、仕方ないとは言え。弱々しく触れた事である時の行為が再び脳裏に掠める。

顔を拭き、鮮明にさせた筈の意識が身体が火照った事によって、再び靄が掛かったかの様に曖昧になる。

「くそつ、あの男。いつか仕返ししてやるっ……！」

これはっ。これは、最近忙しくて、日常の変化が目まぐるしくて。色んな事が一気に変わっていったから。だから。ただ溜まっただけだ。

他に誰もいない個室の部屋で。

ここには居ない人への悪態をつき、心の中で自分に言い訳を重ね。
そして。

私はふわふわとしていて、ハッキリと意識の定まらないまま、最も敏感で弱い部分に伸びていく手を。

本来であれば。

夜にゆっくりと時間を掛けて御手入れをする。その為に朝は触らない様になっている。

蜘蛛の腹部。

そこに向かう手を止められなかった……。

……。



「最低だ、私……。」

夜に比べると幾分か簡略化された、朝の御手入れの行程を全て終えた私は今、自責の念に駆られつつ、初仕事の為に食堂へと歩を進めていた。

様々な声が飛び交う町の喧騒にも関わらず、私の回りには誰もいない。当然だ。

足下へ、その更に下へと視線を落とす。

するとそこには、この交易都市では何時もの光景である朝市。そして朝から買い物用の手提げ袋を手に動き回る人間。

仕事が終わって一杯引つ掛けた後なのだろう、覚束無い足取りでよろめきながら歩いている夜行性の魔人の姿。

そう、私は今。様々な建物の上。屋根から屋根を伝い、ポツリポツリと散見される空を飛んでいるハーピー達以外の、誰の眼にも止まら

ない場所を歩いていた。

護衛として使うことがなくなった、有り余る体力を使い。数日間に渡ってあらゆる場所を練り歩いてきた際に、同じような場所、同じような時間に何度か店主と出会い、会話を交わして経験によって、

そろそろあの男が動き出す時間だと言うのは把握済みだ。そして、こちらの方向には来ないという事も。

今、彼と会うのはマズイ。

もう少し落ち着いてからでないとマズイ。何がいけないのかは自分でも良く分からないが。兎に角良くない。幸い時間にはまだ少し余裕がある。

店主は何も悪くない。

それは分かっている。あの時の行為だって私を元気付けようと、親切心からの行動だと理解している。

ただ少しねちっこかったけど……。

「いらっしやいませえー♪大きな大きなパンはいかがですかあー？」

理解は出来るが納得できない。そんな答えが出ない事をツラツラと考えながら、歩を進めていると。

とある店前に1人の女性の姿。食べ物を取扱う以上前掛けや帽子等はきちんと装着しているが、それ以外が妙に露出が多く、肌面積の大きい服装をしている。

艶かしい店員の姿と声が聞こえてきた。

食べ歩きの仕事。あれを仕事と言っているのか微妙な線だが。その時の候補の1つに上がっていた店が視界に入った。

よい香りのパンに釣られて自分の腹が『仕事をさせろ！』とでも言うかの様に。くう、と小さい音が鳴る。

そうして誰かに見られた訳でもないが、朝の行為に後ろめたさを覚え、宿で朝食を取らずに出てきてしまった事を今更ながらに思い出す。

「食べ応えもあつて満足感もあるわよー♪」

職人の勘に頼らざるを得ないパン焼きとは、とにかく長年の経験が物を言う。素人の焼くパンとは、得てして不揃いになりがちである。膨らみかたが足りなかったり、焼きが足りなく水っぽくなったり、逆に火が通りすぎると固くなってしまう。

柔らかいものはもう一度火を入れれば多少取り戻せるが、やはりきちんと焼き上げたものには及ばない。固くなってしまえば柔らかくは出来ない。

それらは固くなったものは一般的に、店先の専用の場所へと並べられ、2級品として安値で販売される。

そしてここは、その2級品のパンが異常に少ない、世にも珍しい淫魔の経営するパン屋である。

淫魔。

男性には女性の。女性には男性の。

魅力的な異性の姿を形取り、ある時は夢に現れ、またある時は直接的な接触によつて。人の精を糧に生きていく種族。

食事を取ることが可能だが、逆に言うところ可能だけで絶対ではない。種族としての身体が整うまでは仕方がないとは言え、そうなるしまえば種族上食事の必要がなくなってしまう。

ハーピイの様な小柄な者もいるが、基本的には早熟で成長が早く、身体が出来上がるのが人間よりも早い。

人間として、魔人として。

生きている以上必ず発生する三大欲求。

その内の1つ、食欲を捨て去る代わりに性欲が以上に強くなった。そんな一族。

生きていく為に必要な事だから。

だから改良を重ね、一心に試行錯誤を繰り返し、新しいものを産み出していくのは理解できるが。

根本的に食欲が稀薄な淫魔と言う存在が、何故食事に傾倒するのか。何度も失敗を繰り返してきたであろう、その出来立てのパンの味と共に、その経緯が気になって聞いてみると。

『味は分かるんだし、回りの友達は生きる為に食事を取る。なら私は、せめてそれを用意してあげたい。そうすれば食事の間もずっと一緒に居られるでしょ?』

暫くの間言い淀んでいた彼女は、同性の私でも胸が高鳴る、とても素敵な笑顔でそう答えた。あれにはきつと魅了の力が宿っているハズだ。間違いない。

「よっ。」

今日はここで食事を取っていいこう。着地点に人が居ないことを確認した私は、パン屋の道を挟んで反対側にある家の屋根から飛び降りる。着地音は響かせない。

「ん? あら? いらつしやい。」

こちらへと向けられた笑顔に片手を上げることで答えつつ、歩み寄る。営業スマイルだと分かっている、その笑顔には癒される。

「今日はねえ、太い腸詰めの肉を挟んだパンがオススメよお。」

「そうか、ならそれを1つ。あとこの目玉商品の塩パンを2つ程頼む。ついでに何か適当に飲み物を見繕ってくれると嬉しい。」

「飲み物って事は今日はここで食べていくのかしら? 前回みたいに食べ歩きじゃないの?」

「今回はここで頂いていいこう。時間は大丈夫だしな。」

「そう、分かったわあ。」

今ちょうど焼き上がる頃だから、どうせだから出来たてを御馳走するわあ。そんな少し間延びした返事と共に裏へと引っ込んでいく彼女を見ながら、通り沿いに設置されている椅子へと座る。

「ホカホカの焼き上がりを食べられるのか。今日の私はついているな。」

正面から相対すると、ただの大きめのエプロン姿なのだが。後ろから見るとその相変わらざるの肌面積に少しドギマギする、そんな少し座りが悪い状態でパンが届くのを待つ。

「ぬわー!!?」

すると、その数秒後に彼女が消えていったドアから野太い悲鳴と共に煙がもうもうと立ち込めてくる。

「ここに男性の従業員なんていたか？」

淫魔と言う、艶かしい種族に釣られてここに働きたいと思う男性は少なくない。だが、確かここに男性はいなかったはずだ。

少しどころじゃなく気になるが、急な事態に上げかけた腰を再び下ろし、座り直して大人しく待つ事にする。

「もう、まだ早いわよお。もう少し我慢できないの？」

「いやーだって、前にこのくらいの時間で釜を開けてたじゃないか。」

「回数が変われば時間だって変わるわよお。この前とは違って2回目ですもの。釜に熱の籠り方が変われば時間だって変わるわあ。」

「うーん、やっぱ難しいな。あつ、お待たせしました、腸詰めのパンと塩パン2個。それと飲物は自前ので申し訳ないですが、麦湯です。」

唇の端に立てた指を当てながら楽しそうに笑う淫魔の女性に連れられ、反省点を述べながら現れたのは。

「て、店主!？」

「あれっ?」

「あらあ?知り合いかしらあ?」

落ち着くための時間が欲しくて利用した店で、目の前に現れたのは。木で出来た盆に出来立てのパンを3つと飲物を持った、件の男だった。

17話 混乱と新作

〽〽〽

沈黙つてのはいいものだ。

黙っていれば無能な事もバレないのだから。

事態の好転もまた、ありはしないのだけれど。

◇

「それであの人がな、―――――なったんだ。そうしたら何て言つたと思う？―――――だつてさ。」

「へえ、そうなんだな。」

俺は今、彼女を落ち着かせようと抱き寄せた状態のままにいる。

そのままの状態で彼女の身の上話を聞いていた。長い時間話していたが、ただ捲し立てるだけではなく、所々にきちんとオチや緩急を付け、話の仕方が丁寧で上手だった。

捨て子だった事。魔人でありながら人の国で過ごしていた事。その為姿を公に出来なかった事。役に立ちたくて隠密行動を練習した事。それを活かして影ながら護衛に従事していた事。友人がいなかった事。変わり者でお喋り好きな育ての親の事。

最初はポツリポツリと、しかし今まで親い人が居らず吐き出さずに貯めてきた想い、そして言葉は。一度紡ぎ出してしまえば止まらず。

塞ぎ止めていたダムが決壊した濁流の如く。正の感情も、負の感情も引つ括めて一緒に溢れ出てきた。

「で、あの人―――――とか言うんだ。あの人おかしくないか？な？」

「ふふっ、確かに少し変わってるな。」

一通りの言いたいことも、愚痴も不満も全てが吐露し終わったのか、身の上話も終了し。平静を取り戻した様に見える。現に今は町中で出会ったときみたいな月並みな雑談に興じていた。

「まあ、店主もなかなかだかな。ふう……。」

お喋り好きな彼女の身体は、抱き締めてみると意外な程に小さくて。大きな蜘蛛脚の存在もあるのだろうが、想像していたより収まりが良く、スツポリと胸元に収まった事で少々面食らった。

彼女が落ち着き話が終わるまでは気にならなかったのだが、ここで今更ながら1つの問題が浮上した。

これ、いつ離すのが正解なの？

「……。」

「ん……。」

時間が経つにつれ、気まずくなってきた。

先程まではそこそ普通話に話せていたと思うのだが、今はパツタリと会話も無くなり、腕の中で身動き1つせずにいる彼女も、恐らく同じなのだろう。

経験豊富の人ならスツ、と自然に離して、当たり前の様に次の行動に移せるのだろうが。悲しいかな、俺には経験が足りなかった。

それに最初は抵抗。と言っても、そう呼べないくらいの弱々しいものではあったが。それをしていた彼女は今、両腕と蜘蛛の脚。合わせて8本もの手足を俺の背中へと回し、こちらの身体をガツチリと絡め取っている。

だいしゆきホールドもビックリの拘束力。

加えて、とても柔らかいモノが俺の腹部から胸部にかけての位置に当たり変形している。気にしてなかった時は大丈夫だったのに。一度気が付いてしまうと。それは、もうどうあつても、無視できない魔性の果实。やあらかい……。

ソレを意識しないように、腕の中の彼女を見やる。取り乱した不安定な彼女を放っておけなくて、勢いだけで行動してしまった結果こう

なり。

長々と雑談を交わし、今では大分落ち着いたと言えるだろう。だが、未だに目尻には涙が滲んでいる。

その涙を見て、ミラや妹が小さかった頃の姿が脳裏に掠める。そしてすぐに安心してくれた、愚図ってしまった時の宥める方法を一緒に思い出し、それをそのまま実行に移す。背中に回した手の平で、背中を一定のリズムでポンポンと叩いてやる。

「ッ！ ふふっ……。」

一瞬全身を強張らせたが。2回、3回と繰り返す内に、どうやらお気に召したらしい。小さく笑うとコテン、と頭を俺の胸元に当て身体を預けてきた。

「あ……！」

この時、俺に電流走る……！！！！

ポンポン、ふによんふによん。

ポンポン、ふによんふによん。

意識を逸らせ、頑張れ俺、現実逃避するんだ！

例えば今の状況を客観的に見るとか。うん、蜘蛛の脚も使ってピツタリと密着されているこの構図。

あつ、なんか捕食されてるみたいで違う意味でもドキドキしてきた。

ク、クソがつ！落ち着け心臓！

この程度の事で取り乱してんじゃねえ！！

止まれっ！！

ザキ！ザラキ！！レベル1デス！！

「ッ!?!」

と、自らの臓器に対して理不尽な要求をする程の大混乱を起こして

いる俺に気が付いたのか。
バババツ、と突然勢い良く離れる彼女。

「どどど、どうしたー！」

「なっ、なんでもない！」

なんでもなくはないんだろうが、ここで踏み込むとお互いにダメー
ジを受ける事請け合いだ。下手すると恥ずか死しかねない。

恥ずか死。異性経験が足りないと起こる。

効果。激しい運動をしておらずとも心臓が通常の仕事を放棄し、下
手すると不整脈に近い症状に陥る。混乱（大）付与。

直す方法。経験値が足りません。

「あー、その。」

「・・・。」

1つの影が2人分に別れ。妙な空気が場を支配する。

内心、気が気じゃない俺は、互いにドギマギとして視線を合わせ
ることすらも出来ない状況に戸惑う。

良い歳した男女が2人でいると言うのに、こんな状況では、自分は
まるで役に立たない。

それこそただの案山子にすぎない。

うん、作物を守ってくれてる案山子に失礼な話だった。

中学生並の経験値が憎い。

前世は男子校。今世は半ば村八分状態からの、妹と共に冒険をして
いて、それどころではなかった。

前世は行動しなかった自分のせいだが。今世は、冒険から落伍し、
ハーフに店を構え、その借金を返そうと必死に働き。恋愛する時間
がなかったのです。

言い訳完了。なお、納得は出来ない模様。

「じゃ、じゃあ。これからよろしく頼むー！」

そんな空気を破壊し、場を進展させたのはチキン野郎な俺ではな

かった。

パン！と、両手を打ち合わせ、良く通る音を部屋に響かせ、それを機に仕切り直した。

「ああ、わかった。なら早速明日から頼もうかな。」

「ッ！」

妹にやるみたいにポンポンと頭を撫でる俺。固まる彼女。再び訪れる静寂。

何故俺は自分から空気を悪化させてるんだろう。こんな状態では何かをしたとしても全て悪手にしかならないんだろうなあ。と、他人事のように言ってみる。

守護者よ、俺を守りたまえ！

そういう能力じゃないけどね……。

しかしまあ、ちようどいい位置に頭があるもんだ。さっきの抱き締めてた時も思ってたけど、アイツと身長同じぐらいなんだな。

そんな全く別の事を考えながら、頭にやっていた手を動かし、同時に髪の毛を手櫛で梳く。これをやっていると、不思議と変に高揚していた波が引いていくのを感じた。

1分程これを繰返し、密着し少し崩れてしまった髪型を撫でて直し終わる頃には、俺のツツカリいつもの調子を取り戻していた。

「よし。」

「よしじゃないが。」

「あー、すまん。昔からの癖だな。」

まあいい、そう言って外方を向いてそのまま店から出ていく彼女を見送る。そのまま閉まるかと思っただアが少しだけ開き

「ありがと、これから世話になる。」

最後に照れが残った笑顔を見せながら彼女は帰っていった。

また動悸が……。

◇

次の日の早朝、厨房で朝の仕込み中。

「あー、朝からなんかムラムラする。」

集中できず遅々として進まない作業を行いつつ、そんな独り言を呟いていた。断つて置くが、今回に限つてはこの台詞。性的なあれではない。その原因は1つしかないのだが。

昨夜、最後に見せられた、あの笑顔が脳裏に焼き付いてしまつて、いつもの調子を取り戻せないでいる。その本人が今日から、この狭い店で一緒に働くと言うのに、コレではいけない。

「っしー」

パンパン、と頬を両手で叩き思考を無理矢理切り替える。こんなときは、なんか新作でも試して気を紛らわすに限る。

今うちにあるものは、と……。

トマト、腸詰め肉、乾酪、米、麦、魚、玉葱、茸、スパイス各種等の調味料。

そして……。実験的に作ったコレ。

本物とは味も風味も違うが、こと辛さと言う一点に絞ればかなり良い物が出来たと自負している。

タバスコモドキ。

赤唐辛子の、ヘタを取り除き。ミキサー……はないから手作業で細かく切り刻み、塩と酢を混ぜてペーストにしたもの。これを約2ヶ月寝かせた物。そうすると透き通った赤い、紅い液体になる。

単純に辛さを求めてカレーを作るのなら、スパイスの分量を弄ればそれで構わないのだが。ちみっこの様な辛いものが苦手な人の為に、俺がカレーを作るときは二種類作る。

で、辛さが控え目なカレーが残った時、その辛さを調整するために個人的に作ったもの。だから量は少ないが。

これならいけそうだ。アレ、出来るか？

「つと、オツケー。」

そうして、いつもの様にトマトをメインに使った煮汁。それに乾酪。まあつまりチーズだ。コレを溶かしていき、煮詰めてドロツドロの濃い目のペーストを作る。

薄めに切り分けた腸詰め肉とキノコ、さつきのペースト、もう一回出番が来る乾酪、最後にタバスコモドキ。これらをきちんと取り分け、持ち運ぶ為にビンや、鍋に移動させてゆく。

そして、準備を終え。それらを手に持ち仕上げの場所へと向かう。店の前に準備中の看板を立て、鍵を閉める。

そう、うちには窯がない。だから、不本意ながらアソコへと向かう。目の保養には良いんだが、高いんだよなあ。あのパン屋……。

◇

さて、やってまいりました。ハーフに居を構える人達の中でもとびっきりの変わり者が営む店。

パン屋『ブスクス』

「あらあ？いらつしやーい。」

「よう、景気はどうだい？」

「まずまずねえ。」

サキユバスの語源スクブス、ここから名前を借りて作ったこの店は、本来食欲が稀薄な筈の淫魔が経営している。

赤ワイン染みた濃く深い色の髪を、営業中の今は1つに纏めて結い上げ。服装は淫魔特有の肌面積が異常に大きく、所々に貴金属の様な物でワンポイントの装飾が施された、水着でいう所の黒ビキニの格好に、エプロンとバンダナ。

そして、この前掛けがまた面積が大きく、際どい衣装の上に着ている今の状態だと、まるで裸エプロンみたいで。初めてここを通り掛かった時は三度見くらいした、俺は悪くない。きつと誰だっけそうするし、俺も当然そうなった。

初見の時は、淫魔が営むパン。

その想像出来ない味が気になり、そのついでに目の保養を求めて来店し食事。食べたその日の内に朝食セットの御供として契約を結んだ。それぐらいに焼き加減が上手く、美味しかった。

ウチの食堂では、今でこそ米があるが。それまではパンを主食にしていた為、頻度は少々減ったが、今でも頻繁にお世話になっている。

「今日はなあに？随分と急だけど、朝食セットの分かしらあ？」

「いや、今日は窯を借りに来たんだ。今空いてるかい？」

「今は使用中よお。もう少しで焼き上がるから、そうしたら使ってもいいわあ。貴方の、私は好きよお♪」

「そうかい？ああ、あと生地も少し分けてもらえると助かる。この生地にはどうやっても追いつけなさそうだしな。一応ウチから持ってきたのと食べ比べがしたいんだ。」

「あら、誉めても何にも出ないし、料金もまけないわよお？」

そんなしつかりした言葉と共に手招きされ。裏の部屋へと引つ込んでいく背中。自分もその後を追う。

そして後ろを歩けば自然と蝙蝠に良く似た羽、そしてピョコピョコと動く尻尾を視線に入り、目で追いかけてしまう。

前世では良く敏感な場所として書かれる事の多かった箇所だが……。

いや、煩惱退散させるため、ひいては気を紛らわす為に新作を試しているのにこれでは不味い。

「はい、これでいいかしらあ？」

「おう、助かる。」

寝かせてある生地の一つをテーブルの上へと出して貰い、自分で用

意してきた物と並べる。それを潰し薄く延ばしていく。

直径25cmくらいの円形に薄く延ばし、それが終わった所で、端を少し盛る。具材を落とさない様にするために。これを持ち込みの生地で3つ。貰った生地で更に1つ。計4つ作る。

「変わった形ねえ？」

出来立てのパンを取り出しながら、不思議そうに覗きこんでくる姿を視界の端に捉える。やはり裸エプロンにしか見えない。そんな際どい姿に少し戸惑うが、それを隠しつつ次の作業に移る。

作った生地を窯の手前側へと入れ、トマトと乾酪を混ぜて作ったペーストをたっぷりとパンに塗りたくり、等間隔で腸詰め肉、茸の薄切り、玉葱を乗せ。最後に再び乾酪を細かく刻んだ物を隙間を作らない様に振り掛ける。

「これでよし、っと。」

本当ならピーマン的な物があれば、見た目的にも更に良かったんだが。まあいいだろう。

「生地が薄め、でも具材が多目だし・・・。」

先程までのやり取りとは違い、片目を瞑り、1本だけ立てた人差し指を柔らかそうな下唇辺りに当てつつ、焼き上がりの時間を計算しているらしい、その表情は真剣なものだった。

焼き加減に関しては余計な口は出さずに本職に任せの方がいいだろう。

俺はその空いた時間で厨房を借りて、狼の魔人に米と一緒に送ってもらっている麦。これを煮出して麦茶を作る。

今回作るものは結構重たいから、個人的に飲む為にお茶を用意する事にした。

「これで大丈夫だと思うけど、初めてのものだし。実験も兼ねてとりあえず1つだけ焼くわあ。何かあったら呼んでねえ？」

そんな事をしていると、釜の中にピザとは別のパン生地を次々と入れていき、隙間が少なくなると窯を閉じる。

最後にそんな言葉を残して、店先に呼び込みへと出て行ってしまった。

返事を聞くことなく行ってしまった不用心な彼女に軽く笑い。出来上がった麦茶を一杯。

はあ、お茶が美味しい・・・。

やはり日本人はお茶で和む機能が付いているのだろうか？身体はもう日本人じゃないけど。

そんな阿呆な事を考えながら出来立ての麦茶を店先のサキユバスへと持っていく。

「おーい、呼び込みで喉渴かないか？」

「あら？ありがとお♪」

休憩がてら通り沿いに設置した、店備え付けの椅子に並んで座り、2人でお茶を飲近い。

句読点を入れ損なうぐらいの衝撃！

わざわざ距離を離す必要はないのだけれど、流石にこれは近いっすよ。人との接触の多いであろう余裕なサキユバスと、焦る俺の差が如実に現れる。

「最近ねー、とあるお得意様からの要求が少なくなって寂しいのよねえ・・・。」

「あー、うん。」

「ね、どう思う？」

飲食店をやっている以上、爪を延ばさずキッチンと手入れされた人差し指を立て、俺の太股辺りをツツツ、と撫で上げてくる。あふん。

「最近新しい受注先が増えたんでな。」

「あら？誰も貴方とは言っていないわあ？」

「あー。」

グツ・・・！やりにくい・・・！

簡単に言質を取られ、手玉に取られ、文字通り掌でコロコロと自在に転がされ、踊らされている感じがして。

「あー、わかったわかった。最近は何日だった注文を、来週は全部頂くよ。とりあえずは、それでどうだ？」

「ウフフツ、素直な男の人は好きよ♪」

でも引くところはキチンと引いてくれる。だから全く不愉快なやり取りではなくて。双方の顔には笑みが浮かんでいる。

そうこうしている間に、時間が来たのか彼女は離れて裏へと引っ込んでいった。

次に現れたときは、具材にはきちんと火が通り、上に乗ったチーズは熱々でちよっぴり焦げが付き、ピザの耳はカリカリに焼き上がると言う。絶妙な物が出来上がり。

「あん♪垂れちゃう。」

「・・・。」

蕩けチーズを溢さない様に、口を開き軽く舌を伸ばして食べる姿に妙なエロスを感じたり。

「そ・れ・なあに？」

「かなり辛いが味のアクセントにとっても役立つもんだよ、勿論お手製な。」

「また変な物を作ったのねえ。」

途中俺が自分の分だけに使っていたお手製のタバスコを彼女も使いたがったり。

「あつ、それはかけすぎ・・・！」

「大丈夫よ、結構辛い物は得意よ。それに貴方のところでカレーだったかしら？あれも辛口でー！?!辛ツ、いや、コレ、痛い!!！」

「あーあ……。」

初めて使うそれによつて口内にダメージを受けたりと。軽い一悶着あったものの、味見と称したそれによつて、瞬く間に2人の胃袋へと消えていったのだった。

二人でギヤアギヤアと店先で騒ぎつつ美味しそうに食べているそれ。

ピザ。

「これは試作品よお。残念だけど私達だけの分しかないわあ♪」

「そんな、ひどい。」

「あらおいひい♪」

「そんな、ひどい！」

通りがかつた何人もの人達に質問と注文をされ、その度に目の前で独り占めする彼女はとても楽しそうな笑顔をしていた。

◇

「じゃ、今回はこれ1つ貰うわねえ。」

「たっか!!?」

「今日の貴方は他にパン生地持っていないみたいだけど?」

町のパン屋に一般市民がパン生地を焼いてもらう場合、大体は25個とか20個につき1つぐらゐの割合で現物支給を行ない、窯の代金として持っていかれるのが普通だ。

だが今回は4つの内の1つ、税率25%!味見部分を含めるならば、なんと驚きの37.5%

窯の代金としてこれは重税すぎませんか?

「それに今も唇が……。これは間違いなく初めての時より痛かったわねえ……。」

「それは自業自得だろうが。つーか酒も入っていない昼間に平然と何言ってるの!」

ぶつくりとした柔らかかそうな唇を、指の腹でプニプニと押したり撫

でたりしながら、批難めいた視線で卑猥な話題を振ってくるサキユバ
ス。

その自然に振る舞っている筈の仕草は、やはりどこかが艶かしい。

「あら、夜ならいいのかしら?」

「揚げ足をとるんじゃないの。そもそも淫魔は初めてだろうが何だろ
うが痛くないらしいじゃん!」

「あら、男なのに詳しいのね。えっち。」

「うるせえ!」

そんな軽口を互いに叩いている今現在。

先程の言っても聞かなそうな女の子のお客さんにお引き取り願
い、残りのピザを焼く準備を終えたところだ。

「はいはい、タバスコの件は確かに俺も悪かったよ。でも最初に注
意したのに聞き入れなかったのは、一体どこのお姉さんだったかな?」
「ふう、それにしても。お腹一杯になったお姉さんは、いやらしいこと
がしたくなつたわあ。」

「話題の逸らし方が雑っ!はあ、焼き上がったら1つ持っていって
いから。そしたら俺も帰るわ。」

「あら、残念♪」

クスクスと笑う彼女とそんなやり取りを終え、呼び込みに戻る彼女
と窯の前に陣取る俺。

数分後・・・。

今だツ!!

さつきお茶を作りながら数えていた、焼き上がりまでの時間をその
まま頭の中で数え、時間になったので勢い良く窯を開ける。

「ぬわー!!?」

もうもうと立ち込める煙と良い香り。
その煙の勢いに咄嗟に変な声を出してしまう。

「あらあ？ 具材が多目のものを一気に3つも焼いたらかしら？ それに少し開けるの早かったかもねえ。」

「そつ、そつか。」

論点ずらしとしてではなく、物理的に煙に巻かれて軽く咳き込みながら彼女の言葉を聞く。普段はおちゃらけているが、人に物を教えているときの彼女は親切で真剣だ。

続けて要点を話ながら焼き上がったばかりのパンを持ち運び用のトレート、1つの盆へと移していく。

「やっぱりシンプルなのが売れるわねえ、貴方が考案してくれた塩パンとっても良く売れてるわあ。少し妬げちゃうくらい。」

「考案ってか、俺が記憶を頼りに適当に作ったものを、完璧な形にしたのはキミだから、これはキミのものだよ。」

「あら、嬉しいわあ。さて、もう帰るのでしょうか？ 申し訳ないけど最後にお茶を一杯分けて貰える？ それと腸詰め肉のパンとっても相性が良さそうだわ。」

「おつ、お客さんか。ついでに配膳するよ。」

「ありがとお。助かるわ。」

お金は使えないから、せめて気を使ってるんだよ。

声に出して相手に伝えてもそこそこ笑いの取れる行為をしつつ、注文されたと言う商品を合計3つ盆に取り分けそれを運ぶのを手伝った。

そうして、そこにいたのは。

「て、店主!？」

「あれっ？ アル?？」

「あらあ？ 知り合いかしらあ?？」

昨夜、俺が新作を作り出し始めるくらいに平静を掻き乱していっ

た。
件の彼女、アルケナだった。